

平成三十年度 京都女子大学 博士（文学）学位請求論文

源氏物語の人物造型―金剛醜女説話の受容について―

今井友子

目次

凡例	1
I 序論	4
一 本論の目的	4
二 金剛醜女説話の資料	5
三 本編要旨	10
四 付編要旨	16
II 本編	
第一章 源氏物語における末摘花の造型 — 金剛醜女説話の受容について —	21
はじめに	21
第一節 源氏物語と賢愚経卷第二「波斯匿王女金剛品第八」の関係	21
第二節 末摘花の造型と金剛醜女変文の類似	30
第三節 源氏物語と金剛醜女の関係	34
第四節 末摘花・蓬生卷の卷末について	37
第二章 源氏物語における玉鬘の造型について — 『原中最秘抄』が示す長谷観音の靈驗譚の関わり —	42
はじめに	42
第一節 馬頭夫人の伝本について	43
第二節 原中最秘抄が引く馬頭夫人説話と玉鬘卷の関わり	47
第三節 金剛醜女説話と玉鬘の造型について	52
おわりに	56
第三章 源氏物語における歌語「玉かづら」の意味 — 末摘花と玉鬘の造型を手がかりとして —	59
はじめに	59

第一節	末摘花・蓬生卷と玉鬘卷の主人公について	61
第二節	賢愚経卷第二「波斯匿王女金剛品第八」について	67
第三節	「玉かづら」の意味 ― 金剛醜女と勝鬘夫人を同一人物とする資料から ―	73
まとめ		79
第四章	源氏物語の指食いの女の造型について ― 「上陽白髮人」と金剛醜女説話の関わり ―	83
はじめに		83
第一節	「上陽白髮人」と指食いの女の造型について	84
第二節	指食いの女と金剛醜女の類似点	89
第三節	金剛醜女変文と指食いの女の類似点	93
まとめ		96
結 章	敦煌変文と源氏物語の人物造型	100
はじめに		100
第一節	末摘花の造型と金剛醜女変文	101
第二節	指食いの女の造型と金剛醜女変文	104
第三節	空蟬・花散里の造型と金剛醜女変文	107
まとめ		110
III 付 編		
第一章	川口松太郎『愛染かつら』における「長恨歌」の受容について	113
はじめに	― 愛染堂勝鬘院「愛染かつら」の霊木 ―	113
第一節	戦前における「長恨歌」の受容について	114

	第二節 『愛染かつら』と「長恨歌」・「長恨歌伝」の比較	119
	第三節 『愛染かつら』の構成 — 源氏物語桐壺卷 —	128
	まとめ — 『愛染かつら』の主題について —	130
IV	付表	
	I 仏典比較表（賢愚経・百緣経・雜宝藏经・経律異相・法苑珠林）	139
	II 金剛醜女説話比較表（注好撰・今昔物語・私聚百因縁集・聖徳太子内因曼荼羅）	145
	III 馬頭夫人説話比較表（原中最秘抄広本・原中最秘抄略本・長谷寺験記）	149
V	初出一覧	151

凡 例

一、源氏物語の本文は、石田穰二・清水好子両氏校注『新潮日本古典集成 源氏物語』（新潮社、昭和五十一年（一九七六））により、巻名と頁数を記す。但し一部表記を改めたところがある。

一、源氏物語の本文の異同は、池田亀鑑氏編『源氏物語大成』（校異編、中央公論社、昭和二十八年（一九五三））により確認する。

一、『賢愚因縁経』（以下、賢愚経と略する）の本文は、『大正新脩大藏経』（大正新脩大藏経刊行会、昭和三十六年（一九六一））により頁数を記す。旧字体は便宜上通行に改め、適宜句読点を入れる。併せて、次の資料を参照する。

東洋仏典研究会監修『高麗大藏経』（東洋出版社、昭和四十六年（一九七二））。

『東大寺本賢愚経残卷』（大聖武）「波斯匿王女金剛品第八」（『聖武天皇宸翰賢愚経』東京国立博物館蔵e国宝）。

『興聖寺本賢愚経』（平安時代写）は、国際仏教大学院古写本研究soのこ厚意により、影印を確認する。

『石山寺本賢愚経』（永暦二年（一一六一）頃写）は、奈良文化財研究所所蔵の写真帳により確認する。

一、『注好撰』の本文は、原姿を伝える最善本と見られる後藤昭雄氏編金剛寺蔵『注好撰』（和泉書院、昭和六十三年（一九八八））により、旧字体は便宜上通行に改め、訓点是一部改めたところがある。

一、Pel11ot3048「醜女縁起」の本文は、『法国国家図書館蔵敦煌西域文献21』（上海古籍出版社、二〇〇二年）と、フランス国立図書館 Gallica Bnf の写真版による。合わせて以下の4点の影印本と、黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』（中華書局、

一九九七年）を参照した。異体字・旧字体は便宜上通行に改め、訓点は私による。

Stein4511「金剛醜女因縁一本」は、黄栄武博士主編『敦煌宝蔵第36冊』（新文豊出版公司、一九八五年）参照。

Stein2144v「醜女金剛縁」は、黄栄武博士主編『敦煌宝蔵第16冊』（新文豊出版公司、一九八五年）参照。

Pelliot2945v「金剛醜女縁」は、『法国国家図書館蔵敦煌西域文献20』（上海古籍出版社、二〇〇二年）参照。

Pelliot3592v「醜女縁起」は、黄栄武博士主編『敦煌宝蔵第126冊』（新文豊出版公司、一九八五年）参照。

一、『三宝絵詞』の本文は、国宝『三宝絵詞』（東寺観智院本、文永十年（一二七三）書写、e 国宝）と、同書を底本とする馬淵和夫・小泉弘・今野達・三氏校注『新日本古典文学大系31 三宝絵 注好選』（岩波書店、一九九七年）を参照する。旧字体は便宜上通行に改める。

一、『原中最秘抄』広本系の本文は、高松宮家旧蔵『国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書』（文学篇第十九卷〈物語4〉、臨川書店、二〇〇〇年）により、頁数を記す。旧字体は便宜上通行に改め、併せて阿波国文庫旧蔵本の翻刻（『源氏物語大成』資料編、原本焼失）を参照した。

一、『原中最秘抄』略本系の本文は、蓬左文庫本『奥入 原中最秘抄』（日本古典文学影印叢刊19、貴重本刊行会、昭和六十（一九八五）年）により、頁数を記す。旧字体は便宜上通行に改める。併せて『群書類従 原中最秘抄』（温故学会、昭和五十六年（一九八一）十月）を参照する。

一、『長谷寺験記』の本文は、『長谷寺験記』（新典社善本叢書2、平成四年（一九九二）所収、長谷寺蔵古写本『長谷寺靈験記』（内題『長谷寺験記』）により、頁数を記す。旧字体は便宜上通行に改め、振り仮名と句読点は適宜入れる。

一、『宝物集』は本文に異同が多いが、該当箇所は論旨に問題がなく、宮内庁図書館蔵本伝平康頼自筆本複製『宝物集』（古典

保存会、昭和四年（一九二九）を使用した。句読点と右注は私に適宜入れる。合わせて黒田彰氏編著『見延文庫藏宝物集中巻 付片仮名活字三巻本』（和泉書院、一九八四年）を参照した。

一、『勝鬘師子吼一乘大方便方広経』（以下、勝鬘経と略する）の本文は『大正新脩大藏経』（大正新脩大藏経刊行会、昭和四十二年（一九六七））により、合わせて重要文化財『勝鬘経』（東京国立博物館蔵 国宝、鎌倉時代）を参照する。

一、満性寺本『聖徳太子内因曼荼羅』（正中二年（一三二五）書写）の本文は、黒田彰氏所有の写真版複写と、平松令三氏『真宗史料集成』（第四巻、同明舎出版、昭和五十七年（一九八二））を参照した。

一、『歌行詩諺解』の本文は、架蔵『歌行詩 全』（貞享元甲子（一六八四）年季春仲旬、書林 小佐治半右衛門、同氏半左衛門開版、足立蔵書印）を使用し、本文引用の際はその丁数を記す。神鷹徳治氏編『歌行詩諺解』（勉誠文庫¹³⁸、勉誠社、一九八八年）と同版である。但し同書は「一ノ上」・「一ノ下」・「二」に改装されている。

一、川口松太郎『愛染かつら』の本文は、初出『婦人倶楽部』（大日本雄弁会講談社、一九三七年一月～一九三八年五月）と同文の『愛染かつら』（大日本雄弁会講談社、昭和十三年（一九三八）十一月）を使用。引用の際に旧漢字は通行の字体に改め、旧仮名遣いはそのまま使用。全ルビは省略したが適宜使用し、本文引用の傍点は私に付けた。

一、右の文献以外の使用にあたっては、注に記す。

一、凡例に掲げた書名については、本文に記す際二重括弧を省略する。テキストの発行年が元号の場合は西暦を補足する。

一、付表の表記は原則として使用テキストに従った。訓点是一部改めたところがある。

一 本論の目的

源氏物語が、古物語、史書、和歌、歌謡、漢詩文、仏典等の多様な分野の影響を受けて成立したことは、古來その研究により明らかにされてきた。しかしながら未だ説明されない多くの課題が残る。その一つに、光輝くほど美しく才能に恵まれた光源氏の物語に、類い稀な醜女が登場することである。なかでもとりわけ注目されるのが、常陸宮の姫君末摘花である。高貴な身分に生まれながら、「あなかたはと見ゆるものは御鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先のかたすこし垂りて色づきたること、ことのほかうたてあり」（末摘花・二七〇）と、鼻は普賢菩薩の乗物の白象に喩えられ、容貌は「おどろおどろしう長きなるべし」と、極めて醜い女性として描かれる。このような醜女と美しい貴公子の組み合わせは、物語文学には珍しい現象といえる。末摘花の醜貌と頑愚な性質は失笑の対象とされるが、蓬生巻では一転して皇族としての高貴な精神性が際立ち美しく描かれる。同一人物の変貌、もしくは別人のような描かれ方は、「同一人物の性格への照明の当て方が違ってきた」、または「作者は人物の統一性を壊してしまった」と解釈が分かれており、依然として末摘花造型の課題の一つである。

この他にも光源氏と関わる女性には、末摘花ほど極端ではないが、醜貌の女性が登場する。例えば花散里は「か
の花散里も、あざやかに今めかしうなどは花やぎたまはぬ所にて、御目移しこよなからぬに」（蓬生・七九）と、
末摘花と比べても大した違いのない見た目の劣る女性である。空蟬も、「目すこし腫れたる心地して、鼻なども
あざやかなるところなうねびれて、にほはしきところも見えず。言ひ立つれば、わろきによれる容貌をいといた
うもてつけて」（空蟬・一〇九）と醜い容貌である。帚木巻に登場する指食いの女は、左馬の頭の妻という設定
の違いはあるが、「みにくき容貌」と「誠実な性格」は、前にあげた女性と共通する。夕顔の娘玉鬘は生まれついた

美女で醜女ではないが、「玉かづら」や「かたは」という共通の言葉を介して、末摘花との関わりがみられる。こうした登場人物の造型に、題目に掲げた「金剛醜女説話」の関わりが考えられるが、それを具体的に指摘する先行研究はみられない。本編は、金剛醜女説話の原拠である賢愚経をはじめとする仏典、二十世紀初めに敦煌で発見された敦煌文書の金剛醜女の話（以下、金剛醜女変文と称す）、日本に現存する金剛醜女の説話（以下、金剛醜女説話と称す）に着目し、源氏物語に登場する醜女の人物造型について、金剛醜女説話との関わりを論じるもので、全五章からなる。

付編は、小説『愛染かつら』の主人公の造型と構成について、白居易の長恨歌と源氏物語との関わりを論じる。『愛染かつら』は、昭和を代表するメロドラマとして国民的人気を得た作品であるが、文学研究の対象とされていない。作者川口松太郎（一八九九～一九八五）の生い立ちや、明治から戦前にかけて出版された、長恨歌を粉本とする大衆小説・歌舞伎・新劇を調査することで、近代日本の大衆文学の一面を、長恨歌の受容に見ることができ。本編と同様に、広く民衆に知られた物語を作品に取り込む手法に迫る。また作者が直接に用いたテキストの一つに、『歌行詩』の本文に鼈頭（頭註）を加えて刊行された『歌行詩諺解』（貞享元年（一六八四）版）のあることを考察する。

二 金剛醜女説話の資料

漢訳仏典を原拠とする金剛醜女説話の概略は、賢愚経によれば以下の通りである。主人公の波斯匿王の娘波闍羅（金剛）は、前世において一人の辟支仏を供養した故に王家に生まれるが、心中に聖者の醜さを蔑んだ罪により、顔が極めて醜悪に生まれつく。人離れた醜さではあるが末利夫人の生んだ娘なので、王は宮内に「勿レ令ニ

外人得^レ見^レ之也」と命じ、外の人に娘を見せないように育てる。年頃になると、旧家の生まれで今は貧困の若者を捜し、大臣の位にして娘婿にする。夫の大臣は王命により、妻を人に見せないように鍵をかけて幽閉する。女は悩み、遙か遠くの仏に向かつて、「我は何の罪により幽閉されるのか、願わくは哀れみを垂れ、我が前に姿を現し教訓せられよ」と念じる。女は「精誠・敬心・純徳」であつたので、仏は女の志を知るとすぐに現れ、女を端嚴美麗に変える。大臣は妻が美しくなったことを父王に知らせると、王は立派な車を用意して娘を迎える。そして王・夫人・王女・婿は仏のもとに行き、王女の過去世の因縁を聞くという内容である。原拠は訳出・成立年代順に、以下仏典1・2・3、類書4・5がある。

1 『賢愚因縁経』巻第二「波斯匿王女金剛品第八」（慧覺等訳、四四五年、以下、賢愚経と略す⁽¹⁾）

※仏の諫めの言葉「一切の衆生有形の類は身口を護るべし、妄りに非となし人を軽呵するなかれ」は、賢愚経だけにみられる。

2 『撰集百縁経』巻第八「波斯匿王醜女縁」（支謙訳、五世紀中期以降、以下、百縁経と略す⁽²⁾）

※百縁経は1賢愚経と概ね同文であるが省略と異訳が見られる。次の同箇所を比べると、

1 其女^ノ面類、極^テ為^ス醜^ト惡^ト。肌体^ハ麤^ク澁^シ、猶^ク如^ク駝^ノ皮^ニ。頭^ハ髮^ハ麤^ク強^シ、猶^ク如^ク馬^ノ尾^ニ。
（賢愚経・三五七）

2 面貌^ハ極^テ醜^シ、身体^ハ麤^ク澁^シ、猶^ク如^ク蛇^ノ皮^ニ。頭^ハ髮^ハ麤^ク強^シ、猶^ク如^ク馬^ノ尾^ニ。
（百縁経・二四二）

賢愚経の金剛醜女の膚は「駝皮」とあるが、百縁経は「蛇皮」となる。この漢訳の違いにより、百縁経を原拠とする金剛醜女説話は、「身^ノ膚^ハ如^ク毒蛇^ニ」^{ハタヘハシ}、其臭^ノ香^ハ不^レ可^ク近^ツ」^{ノクサキ}（注好撰・二八ウ）と、身の肌を「毒蛇」に喩えたと考えられる。

3 『雜宝藏経』巻第二「波斯匿王女醜女頼提縁」（吉迦夜・曇曜共訳、四七二年）

※主人公名は「頼提」で、「有十八醜」、「見皆恐拍」「形如魚皮」という表現や、夫が仲間から重い罰を受

けるなど、他の仏典と異なる内容が加わる。

4 『経律異相』卷第三十四諸国王女部「波斯匿王女金剛形醜以念仏力立改殊顔」（梁宝唱編、五一六年成立）

※卷末に「出賢愚経第二卷」とあり賢愚経を出典とする。本文は賢愚経を概ね半分に抜粋した内容といえるが、賢愚経の「摩利夫人」は「末利夫人」となり、賢愚経にない「作十八変」の本文が見られる。

5 『法苑珠林』卷第七十六・十悪篇「第八十四之四悪口部」（唐道世編、六六八年成立）

※巻頭に「又百縁経云」とあり、百縁経の本文を半分にした省略と書き替えがみられる。賢愚経の「金剛」と経律異相の「作十八変」の本文があることから、経律異相を参照したことが考えられる。

この中で、1 賢愚経は訳出年代が最も古く、内容が最も豊かで、大聖武とよばれる伝聖武天皇宸筆「東大寺本賢愚経残卷」（波斯匿王女金剛品第八）が国宝に指定される⁽³⁾。この他に、興聖寺本、石山寺本、七寺本、西方寺本の奈良平安古写経が現存する。源為憲が永観二年（九八四）に、尊子内親王に献上した仏教の入門書『三宝絵⁽⁴⁾』の序に、賢愚経巻第四「出家功德戸利苾提品第二十二」の舍衛城の薩薄の婦は、我が貌の良いことを誇り、死後に虫となり己の屍に住む話を掲載する。『三宝絵』下に、「又賢愚経にとくを聞けば」、「賢愚経に、仏五施をほめ給ふ」と賢愚経引く⁽⁵⁾。室町前期の『河海抄』は、鈴虫巻の「行香の人々」（鈴虫・三四六）の註に、「行香事 見賢愚経云々⁽⁶⁾」と示すことから、賢愚経は広く知られた仏典であることがわかる。

金剛醜女説話は管見によれば、以下①から⑫と、金剛醜女の話を型を用いた説話⑬から⑯が見られる。内容を大きく分けると、賢愚経または百縁経の二系統に分かれる。

【法苑珠林の流れをくむ金剛醜女説話】

①『注好撰』「金剛醜女変美艶第二十九」（仁平二年（一一五二）以前成立⁽⁷⁾）

②『今昔物語集』卷第三「波斯匿王娘金剛醜女語第十四」(一二二〇年頃成立⁽⁸⁾)

③『私聚百因縁集』卷第三「十四」「金剛醜女事」(正嘉元年(一二五七)成立⁽⁹⁾)

※①②③と⑦の1は小異はあるがほぼ同文で、主人公名が賢愚経の「金剛」で、肌が百縁経の「蛇皮」とあることから、百縁経を引く法苑珠林が原拠と考えられる。

④『神道集』卷第四第十八「諏訪大明神五月会事」(文和・延文年間(一三五三から一三五六)の成立⁽¹⁰⁾)

※波斯匿王の娘金剛女の宮は天下第一の美人であつたが、過去世の罪が重い為に、十七歳になつたとき体が急に金色に替わり、生きながら鬼王になる。金剛女は仏に利益を願うと、仏は眉間から光を放ち金剛女は三十二相を備える」と異なる本文が加わる。

⑤『説法統因縁集』光明部一七「醜形作端正」(元禄五年壬申(一六九二)開版⁽¹¹⁾)

※頭注に「百縁経ノ説」とあり、百縁経の概略である。

【金剛醜女と勝鬘夫人を同一人物とする仏教説話】

⑥平康頼撰『宝物集』卷五(治承二年(一一七八)成立⁽¹²⁾)

※金剛醜女は仏の慈悲により勝鬘夫人となる。

⑦岡崎市満性寺本『聖徳太子内因曼荼羅』(正中二年(一一三二)書写⁽¹³⁾)

※金剛醜女説話が二話収録される。法苑珠林の系統を便宜上⑦の1とし、賢愚経の系統を⑦の2とする。

⑧叡山文庫本『太子伝』(一四五四・五年書写⁽¹⁴⁾)

⑨鶴林寺本『太子伝』(明応三年(一四九四)書写⁽¹⁵⁾)

⑩四天王寺本『太子伝』(室町後期写⁽¹⁶⁾)

⑪内閣文庫本『聖徳太子伝記』(又第二二八先生之勝鬘夫人之御事)(一五八六年書写⁽¹⁷⁾)

【聖徳太子絵伝】

⑫ 四天王寺藏「聖徳太子絵伝」(鎌倉後期頃⁽¹⁸⁾)

※⑦から⑫は聖徳太子の前世譚に、⑥と同じく金剛醜女は仏の慈悲により勝鬘夫人となる話が組み込まれる。賢愚経を原拠とするのは⑥⑦の2から⑫が考えられる。法苑珠林の系統の①から⑤と⑦の1は、金剛醜女の身の肌を「蛇皮」に喩え、「その臭き香近づくべからず」となる。仏典や金剛醜女変文にない「求婚譚」があり、仏典・変文の「宴会」は「法会」となり、「地中踊出」は「仏身現庭中」という相違点が特徴である。

【金剛醜女の話型を用いた仏教説話】

⑬ 『原中最秘抄』(一二七二頃成立⁽¹⁹⁾) 所引、散佚書『長谷寺流記』『馬頭夫人説話』(九一〇年以前成立⁽²⁰⁾)

※唐の信宗皇帝の馬頭夫人は馬のような醜貌であるが、長谷観音に起請すると、東方より紫雲に乗った「奇ケナル貴僧」(長谷観音の化身)が、手に水瓶を持ち現れて顔に注ぐと、馬頭夫人は歓喜し端嚴美麗になるという靈驗譚である。

⑭ 『長谷寺験記』『唐朝馬頭夫人得端正成守護神事第六』(承元三年(一一二〇)以前成立⁽²¹⁾)

⑮ 『長谷寺観音靈験記』『第六唐朝馬頭夫人得端正成守護神事』(承応四年(一六五五)開版⁽²²⁾)

※⑭⑮は、結語に「源氏ノ物語」とあることから源氏物語の影響が見られる。

⑯ 『石山寺縁起⁽²³⁾』卷二第一段「普賢院淳裕夢により美男に再生する」(一二三二六年成立)

※「普賢院内供淳祐は、少年の時面貌醜陋にして、天性愚鈍なり。内供は終夜本尊に祈請すると、老僧が二人来たりて左右の手を取りて、面貌端正にして、智恵虚空に等しと言ひて、上下すること兩三度なり。夢さめて、其の貌端嚴にして岳湛が美を継ぎ其の性明敏にして、顔閔が才に同じ」と、淳裕の面貌が端嚴になるだけでなく、僧が現れるという要素に、金剛醜女説話の型や馬頭夫人説話の影響が伺える。

【金剛醜女変文】

⑰ Pelliot3048「醜女縁起」

⑱ Stein4511「金剛醜女因縁一本」

⑲ Stein2144v「醜女金剛縁」

⑳ Pelliot2945v「金剛醜女縁」

㉑ Pelliot3592v「醜女縁起」

※二十世紀初に甘肅省敦煌市の莫高窟で発見された敦煌文書（五代〈九〇七から九六〇〉）に五本の抄本が現存する。賢愚経を所依とした、聴衆に解りやすい語り物として作られた唱導の台本である⁽²⁴⁾。

【敦煌莫高窟壁画】

②② 敦煌莫高窟第九八窟「賢愚経变相部分 波斯匿王女醜女縁⁽²⁵⁾」（五代）

②③ 敦煌莫高窟第一四六窟「波斯匿王女金剛品⁽²⁶⁾」

※莫高窟に壁画が現存することから、かつて敦煌の地において説法の材料として金剛醜女の説話の絵解きが行われていたことが確認できる。

【比較表】 卷末に資料として次の比較表を付す。

I 仏典比較表（賢愚経・百縁経・雜宝藏経・経律異相・法苑珠林）

II 金剛醜女説話比較表（注好選・今昔物語集・私聚百因縁集・聖徳太子内因曼荼羅）

III 馬頭夫人説話比較表（原中最秘抄〈広本・略本〉・長谷寺験記）

三 本 編

第一章 源氏物語における末摘花の造型——金剛醜女説話の受容について——

源氏物語の登場人物のなかで、最も醜く描かれるのは常陸宮の姫君末摘花である。作者はどのようにして末摘花の造型を作り上げたのか、金剛醜女説話を手がかりに論じていく。第一節は、まず金剛醜女説話の原拠である仏典1から5のなかで、どの本文を用いる可能性があるか検討すると、序論二に記したように、1賢愚経は漢訳の時代が最も古く、内容が豊かで、源氏物語の時代に広く知られていた仏典であることがわかる。これらのことから、賢愚経と源氏物語との関わりを想定して比較すると、主人公波闍羅（金剛）と末摘花は、「出自が高い」、「容貌が極めて醜く、畜生に譬えられる」、「外の人に姿を見せない」、「乳母に養護される」等の要素が一致する。また、仏の救いを念じる金剛醜女の前に仏が現れる場面と、蓬生巻で源氏が「仏菩薩の変化の身」とされ、末摘花の待つ宮邸を訪れる場面が対応することを指摘する。第二節は、現存する金剛醜女変文⑩から⑭のなかで、保存状態がよく、内容が最も豊かな⑩Pe1110t3048「醜女縁起」と末摘花・蓬生巻の本文を比較し、金剛醜女変文だけにみられる醜女的美徳と末摘花の一致点を示す。遠く離れた敦煌出土の金剛醜女変文と、源氏物語との間に直接的な関係があるとは想定しにくい、何らかの資料を介在させて繋がる可能性について検討する。第三節は、金剛醜女説話に、仏典や金剛醜女変文にない「求婚譚」が加わり、仏典・変文の「宴会」は「法会」となり、「地中踊出」は「仏身現庭中」となる相違点について、末摘花・蓬生巻の本文との関わりを考察する。

まとめでは、第一節から第三節の考察から、末摘花の造型をめぐる発想や表現に、金剛醜女説話の受容のあったことを論じ、その場合の直接の典拠となった資料を推察する。また金剛醜女説話の受容をふまえて、末摘花巻末の草子地の解釈を、金剛醜女説話の主題の観点から考察する。

第二章 源氏物語における玉鬘の造型について——『原中最秘抄』が示す長谷観音の靈驗譚の関わり——

長谷観音の靈驗を明確に想起させるかたちで書いたと思われる源氏物語の巻に、玉鬘巻をあげることができ。主人公の玉鬘は、幼き時に母夕顔と死別し、乳母と共に筑紫に下るが、豪族からの求婚を逃れて上京する。玉鬘は都に無事帰着した報告に石清水八幡宮を詣でると、その次に「仏の御なかには、初瀬^{はつせ}なむ、日の本^{ひもと}のうちには、あらたなる驗^{しるし}あらはしたまふと、唐土^{もろこし}にだに聞こえあなり」（玉鬘・二九七）という乳母子の勧めで初瀬に向かう。椿市の宿に着くと、折しもそこに来合わせたのは、数十年にわたり夕顔の忘れ形見を捜していた夕顔の乳母子右近であつた。右近との邂逅は、長谷観音の靈驗であることを印象づけ、玉鬘の新たな物語が展開される。この唐土にまで届くという長谷観音の靈驗譚について、源氏物語の注釈書^⑬原中最秘抄は、散佚書『長谷寺流記』（以下、流記と略称する）の馬頭夫人説話の内容を詳しくあげる。唐の馬頭夫人は馬のような醜貌であるが、長谷観音の靈驗により端嚴美麗に変貌するという話である。以降、『河海抄』（一三六二から六八年成立）、『紹巴抄』（一五六五年頃成立）、『孟津抄』（一五七五年成立）、『湖月抄』（一六七三年成立）に、馬頭夫人説話の概略が引かれ、昨今の注釈は唐土にまで届く靈驗譚の一例として紹介している。しかしながら、原中最秘抄の本来の意図は、馬頭夫人説話と玉鬘巻との関わりを示していることが考えられることから、本章は原中最秘抄が引く流記を手がかりとして、馬頭夫人説話と玉鬘巻の関わりについて考察する。

第一節では、まず現存する馬頭夫人説話^{⑬⑭⑮}のなかで、どの本文を用いるかということを検討する。^⑬原中最秘抄は現在二系統の伝本が伝わり、広本・略本と通称される。略本は広本と比べると訂正や省略があり、^{⑭⑮}長谷寺験記は、結語に源氏物語の影響が見られることから、広本の本文が適切であることを論じる。

第二節では、広本と玉鬘巻を比較すると、1「馬頭夫人の醜貌と玉鬘のかたは」、2「長谷観音に祈請する」、3「長谷観音の利益をもたらす人物との邂逅」、4「馬頭夫人と玉鬘の変貌」の要素が共通し、また広本だけにある「行程^{カウテイ}ヲ隔ツト云トモ」と「夢ニウツ、トモナク」の本文が、玉鬘巻にも見られることを指摘する。第三節で

は、玉鬘巻の馬頭夫人説話の引用だけでは捉えきれない部分について、馬頭夫人説話の原拠の金剛醜女説話と玉鬘巻を比較する。1「父方の出自」、2「外の人に見せずに守護されて育つ」、3「両親と別れた後、乳母に育てられて適齢期を迎える」、4「金剛醜女の醜貌と玉鬘のかたは」、5「前世の罪の自覚と、仏を念ず」、6「主人公の変貌」、7「父王に立派な車で迎えられる」の共通点について考察する。このなかで、1・2・3・5・7は、馬頭夫人説話にない要素である。

まとめでは、玉鬘の造型をめぐる発想や表現に、馬頭夫人説話と金剛醜女説話の受容がみられることを論じる。

第三章 源氏物語における歌語「玉かづら」の意味 —末摘花と玉鬘の造型を手がかりとして—

源氏物語のなかで、歌語「玉かづら」を歌に詠むのは、第一章で考察した末摘花と、第二章で考察した玉鬘の二人の姫君に限られている。この用例については、すでに頭髮の飾りの「鬘」と、夕顔の蔓草の筋の連なりから草（植物）の「蔓」という解釈があるが、「玉かづら」の「玉」については、美しく優れた事物に付ける美称とするだけで、具体的な考察はされていない。しかし、単なる比喻や美称ではない意味が込められているのではないだろうか。考察を進めるにあたり、重要な糸口になると思われるのは、主人公との関わりを論じた金剛醜女説話である。本章は主人公造型の鍵となる金剛醜女説話と、金剛醜女と勝鬘夫人を同一人物とする説話との関わりから、歌語「玉かづら」の意味について考察する。第一節では、まず具体的な関わりについて検討する前に、末摘花・蓬生巻と玉鬘巻の主人公について、1「巻頭の類似」、2「主人公の父方の血筋の高さ」、3「人と親しまずに身を隠す暮らし方」、4「求婚を聞き入れず」、5「かたは」、6「前世の罪と菩薩を念ずる」、7「主人公の変貌」、8「源氏の庇護を受ける」等の共通点が見られることを確認する。第二節では、第一章と第二章において末摘花と玉鬘の造型との関わりを論じた賢愚経と、二人の共通点が一致することを指摘する。

第三節のまとめでは、資料⑥から⑫と賢愚経と勝鬘経の本文を考察し、それぞれの主人公の金剛醜女と勝鬘夫人が同一人物とされる背景をさぐり、我が国において金剛醜女が勝鬘夫人となる話が知られていることに着目する。第四節は、勝鬘経の注釈書『勝鬘宝窟』と『勝鬘経義疏』の「勝鬘」の註釈により、末摘花と玉鬘に用いるの歌語「玉かつら」の意味に、勝鬘夫人が含まれることを論じる。

第四章 源氏物語の指食いの女の造型について ―「上陽白髮人」と金剛醜女説話の関わり―

簀木卷の、雨夜の品定めと呼ばれる女性談義に登場する指食いの女の造型について、これまで白居易の新樂府「上陽白髮人」の関わりが論じられてきた。指食いの女の、

みにくき容貌かたちをも、この人に見やうとまれむと、わりなく思ひつくるひ、うとき人に見えは、おもてぶせに
や思はむと、憚り恥ぢて

(簀木・六三)

という「うとき人に見えは、おもてぶせにや思はむ」について、古注釈『紫明抄』(一二九四年以前成立)、『河海抄』(一三六二から六八年成立)は、「上陽白髮人」の「外人不見見応笑」(外うとき人に見えじ、見えなば笑はれなむ)を示す。この指摘にもとづく新聞一美氏は、題序に「愍あはれ怨曠えんくわう也」(怨曠えんくわうを愍あはれべり)とあるように、上陽宮に幽閉された女性(以下、上陽人と呼称する)と指食いの女は、怨み嫉妬する女として共通するとされる。

しかし上陽人は、芙蓉や玉に喩えられた美女で、その為に楊妃に睨まれ生涯独身であるが、指食いの女は、左馬の頭の妻という設定の違い、「みにくき容貌」、夫への気配りや誠実な性格など、「上陽白髮人」にない要素がみられる。

そこで第一節では、上陽人と指食いの女の造型について再考し、二人の類似点と相違点について考察を加える。ここで特に着目するのが、上陽人の「外人不見見応笑」と、指食いの女の「うとき人に見え、おもてぶせにや思はむ」の意味の違いである。上陽人は時代遅れの粧いを恥じ、指食いの女は「みにくき容貌」^{かたち}を恥じる。二人は、外面を恥じる心情と、外^{うと}き人に容貌を見せないことが共通するといえる。ところが、上陽人は自分が恥をかくことを心配するのに対して、指食いの女は夫が「おもてぶせ」に思うだろうと、夫の面目に気遣いを加えることを指摘する。第二節は、「外人不見見応笑」は、白居易以前の漢詩文に見出し難い表現であるが、仏典1賢愚経、2百緣経、4経律異相に類似する本文が見られることから、本文の豊かな賢愚経との関わりを考察する。指食いの女と金剛醜女の描写の言葉の一致、誠実な人柄に共通点のあることを指摘する。第三節は、金剛醜女変文⑩「醜女縁起」と指食いの女を比較すると、「外人に醜貌を隠す」、「裁縫が巧み」、「妻の醜貌が夫の恥になる」という要素が一致することを指摘する。

まとめでは、第一節から第三節の考察から、指食いの女の造型をめぐる発想や表現に、「上陽白髮人」と金剛醜女説話の受容が見られることから、指食いの女の「うとき人に見え、おもてぶせにや思はむ」の表現に、白居易の新樂府「上陽白髮人」の「外人不見見応笑」と、賢愚経の「勿令外人覩見面狀」の両方の意味が含まれることを論じる。

結 章 敦煌変文と源氏物語の人物造型

甘肅省敦煌市は、かつて絲綢之路の交通の要衝として繁栄し、仏教文化が東漸をつづける古代中国、中原地方への門口であった。前秦建元二年（三六六）、敦煌鳴沙山の東面する断崖に莫高窟最初の仏教石窟寺が開かれたと記録にあり、以後千年の時にわたって千余の石窟寺がつくられた。その内の四九二窟が今日まで伝えられてい

る。この第九十八窟に「賢愚經變相部分 波斯匿王女醜女縁」(五代)の壁画が現存する。また、五本の金剛醜女変文が出土したことから、彼の地において金剛醜女縁の絵解きが行われていたことがわかる。そして敦煌から遙か遠く離れた大阪天王寺にある和宗総本山四天王寺が所蔵する掛福「聖德太子絵伝」⁽²⁷⁾前世譚の部分に、金剛醜女の絵が描かれているのである。第一幅の書画の大半を占める勝鬘夫人伝は、稀代の醜女金剛女が、長く深宮に幽閉されていたが、金剛醜女の庭に釈迦が示現して救世観音を授け、金剛女が観音像を受けると、たちまち絶世の美女に変身し、金剛女が勝鬘女と名を改めるといふ構図である。この勝鬘夫人伝は、聖德太子の本地が救世観音であることを説き、さらには、三十五歳條「勝鬘經講讃」に通じる。このように我が国では、波斯匿王の娘金剛醜女は、仏の利益で勝鬘夫人となり、用明天皇の皇子として生まれ、推古天皇の時代に摂政として、内政、外交、仏教の興隆に力を尽くしたという聖德太子(五七四―六二二)の伝世譚に組み込まれるという展開を見せている。かつて川口久雄氏は、日本文学の隅々にまで敦煌のものが響きわたっているとのべ、金剛醜女変文と源氏物語の末摘花との間に、「二つの醜女の系列がある」⁽²⁸⁾と指摘された。しかしその後、半世紀たった今日に至るまで、川口氏の説を検討するものは皆無である。

本章は本論のまとめとして、末摘花をはじめ、指食いの女、空蟬、花散里といった源氏物語に登場する醜女の造型を考察することで、日本に金剛醜女変文の流れをくむ金剛醜女説話の存在した可能性について論じる。

四 付 編

第一章 川口松太郎『愛染かつら』における「長恨歌」の受容について

小説『愛染かつら』の主人公の造型と構成について、白居易「長恨歌」と、陳鴻「長恨歌伝」そして長恨歌を用

いた源氏物語の利用のあることを論じる。『愛染かつら』は、昭和を代表するメロドラマとして国民的人氣を得た作品であるが、文学研究の対象とされていない。本編と同様に広く民衆に知られた作品を取り込む手法に迫る。

日本文学における「長恨歌」の受容については、遠藤実夫氏の『長恨歌研究』がある。改めて明治から戦前にかけて出版された「長恨歌」を粉本とした作品の調査をすると、歌舞伎や新劇の上演・通俗小説の出版が盛行したことが、多くの例証により確かめることができる。この時期は、作者川口の生まれ育った時期と重なり、「長恨歌」は人気の題材であったことがわかる。『愛染かつら』は、美貌の看護婦高石かつ枝と病院長の令息津村浩三の悲恋譚である。この主人公の人物描写に、作者が用いたテキストとして考えられるのは、『歌行詩』(長恨歌・長恨歌伝・琵琶行・野馬台詩)の本文に、詳しい頭注を加えて刊行された『歌行詩諺解』(貞享元年版)である。『歌行詩諺解』の頭注の、楊貴妃の美しさの描写は、主人公かつ枝の美貌と一致し、玄宗と楊貴妃の比翼連理の誓いは、浩三とかつ枝の愛の誓いの場面が一致することを示し、作者が用いた可能性について論じる。また『愛染かつら』の主題は、「長恨歌」と同じく「男女の愛」の物語であるが、「母の愛」が男女の「愛の障碍」になるという展開は、作者の生い立ちや私生活の影響が窺える。以上の考察から、作者川口の知識に漢詩文や源氏物語があり、日本人に人気のある名文を用いたことで、国民的人氣の物語が誕生したことを論じる。

(1) 金岡照光氏『敦煌の絵物語』(東方書店、昭和五十六年(一九八一)、一六八頁)は、賢愚経の訳出年代と状況について、「賢愚経が凡本訳出の經典ではなく河西の僧曇学等八人の僧が于闐へ赴き、般遮于悉会で説教を聞き、その胡語を記録して帰り、高昌において漢語でこれを記して、元嘉二十二年(四四五)一書を為したという『出三蔵記集』卷第二、及び僧祐撰『賢愚経記』(『出三蔵記集』第九)を真実とすれば、「賢愚経」自体、河西に流布する必然性を持つていたものと考えられる」とある。

(2) 出本充代氏「『撰集百縁経』の訳出年代について」(『パーリー学仏教文化学』八、平成七年(一九九五)五月)は、『百縁経』は呉の時代に支謙(二二三―二五三)が訳したとなっているが、『賢愚経』が先にあり『百縁経』が文章を借用した形跡がある。『百縁経』は、『賢愚経』よりも後に訳出されたもので、訳出年代は五世紀中期以降」と指摘される。

(3) 国宝・東京国立博物館。書写年が奈良時代であることは、石田茂作氏『写経から見たる奈良朝仏教の研究』(東洋書林、昭和五十七年(一九八二))に記される。

(4) 本文は馬淵和夫・小泉弘・今野達・三氏校注『新日本古典文学大系31 三宝絵 注好撰』(岩波書店、一九九七年)による。

(5) 賢愚経巻第二「華天因縁品第十」と賢愚経巻第四「摩訶斯那優婆夷品第二十一」を引く。

(6) 賢愚経巻第三「七瓶金施品第一八」に「時に衆僧食時已に到り作業して立つ。蛇、彼の人を次第に香を付せしむ。自ら信心を以て香を受くる者を視る」とあり、僧に香を配らせるが本縁である(『望月仏教大辞典』、世界聖典刊行協会、昭和四十八年(一九七三))。

(7) 今野達氏「注好選解説」(馬淵和夫・小泉弘・今野達三氏校注『三宝絵 注好選』新日本古典文学大系31、岩波書店、一九九七年)は、「仁平二年(一一五二)に先立つ古写本が現存し、今昔物語集の出典ともなったことなどを考え合わせる」と、十二世紀初頭、あるいは十一世紀後半にまでさかのぼりえる作品かもしれない」とされる。

(8) 今野達氏「今昔物語語解説」(今野達氏校注『今昔物語集一』新日本古典文学大系33、岩波書店、一九九九年)は、「一二〇年が成立の上限で、一応この頃を目安として成立年次を推定すべきであろう」とされる。

(9) 『私聚百因縁集』巻第三(十四)「金剛醜女ノ事」(『大日本佛教全書』、有精堂出版部、昭和七年(一九三二))を参照した。

(10) 貴志正造氏訳『神道集』(平凡社、昭和四十二年(一九六七))は、「後光厳院の文和・延文年間(一三五三―一三

五六)の成立と考えられる」とされる。

(11) 京都女子大学蔵『説法続因縁集』参照。

(12) 山田昭全氏「宝物集 解説」(新日本古典文学大系『宝物集 閑居友 比良山古人靈託』平成五年(一九九三))は、成立年について「史実に合わせるとすれば、治承二年(一一七八)とするのがよい」とされる。

(13) 平松令三氏「聖徳太子内因曼荼羅と親鸞聖人伝」(『高田学報』第四十八輯、昭和三十六年(一九六一)八月)は、「正中二年(一一三二五)の書写年記と解する」とされる。

(14) 『中世聖徳太子伝集成』(斯道文庫古典叢刊6、勉強出版、平成十七年(二〇〇五))による。

(15) 村松加奈子氏「聖徳太子絵伝にみる三国伝来観―鶴林寺本聖徳太子絵伝をめぐって―」(『美術史學會』、平成二十二年(二〇一〇)十月)参照した。

(16) 前掲注14に同じ。

(17) 前掲注14に同じ。

(18) 重要文化財「聖徳太子絵伝」は、もともと四天王寺にあったものではなく伝来は未詳で、作は鎌倉後期とされる。

『真宗重宝聚英第七卷』(同朋舎出版、昭和五十四年(一九七九))参照。

(19) 『原中最秘抄』の成立については、『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書』(文学篇第十九卷、臨川書店、平成十二年(二〇〇〇))の解題著者、館蔵史料編集会代表虎尾俊哉氏による。

(20) 永井義憲氏「長谷寺流記と縁起・験記」(『大妻国文』第22号、平成三年(一九九一)三月)は、散見する『流記』の佚文を收拾した上で、成立年は「延喜十年(九一〇)の、それ以前に『流記』は成立していたと考えられる」という試案を提示される。

(21) 『長谷寺験記』の成立については、永井義憲氏解説『長谷寺験記』(新典社善本叢書2、昭和五十三年(一九七八)、三〇七頁)は、正治二年(一一二〇)より建保七年(一一二八)の間の成立となるが、さらにさかのぼって承元

三年（一二〇九）以前の成立であろうと推測される

（22）京都女子大学蔵『長谷寺観音靈驗記』の刊記に「承応二二年孟春吉日 和州長谷住閑東屋弥作開版」とある。

（23）本文は、小松茂美氏編『石山寺縁起』（日本の絵巻16、中央公論社、平成五年（一九九三））を参照した。

（24）傳芸子氏「醜女縁起与賢愚経金剛品」（周紹良・白化文編『敦煌変文論文録』下冊、上海古籍出版社、一九八二年所収。初出『藝文』三卷三期、一九四三年）をはじめ、岩本裕氏は「縁起の文学」（『東方学』第三十輯、昭和四十年（一九六五）七月）に、「賢愚経の所伝が波斯匿王女金剛の名を出す敦煌変文の「醜女縁起」の所依となったことは疑えないであろう」とされる。

金岡照光氏は「変文は絵解きの講唱である」（『敦煌の文学』大蔵出版、昭和四十六年（一九七二））と指摘される。

（25）敦煌文物研究所編『中国石窟敦煌莫高窟第五卷』（平凡社、一九八二年）に、第九八窟の図像が掲載される。

（26）この壁画は未確認であるが、前掲注26に同じ第五卷付編『敦煌莫高窟内容総録』によると、第一四六窟西壁にも「波斯匿王女金剛品」の図があると記載される。

（27）作品の概要と図様構成については、村松加奈子氏「四天王寺所蔵 二幅本聖徳太子絵伝」（『国華』第一四〇八号、二〇一四年）に詳しい。

（28）川口久雄氏「金剛醜女変文と日本の説話文学」（『漢文教室』第五九号、一九六二年三月初出。『敦煌よりの風』3 敦煌の仏教物語【上】、明治書院、一九九九年所収）。

第一章 源氏物語における末摘花の造型―金剛醜女説話の受容について―

はじめに

源氏物語に登場する女君のなかで、類い稀な醜女として注目されるのが、末摘花巻に登場する常陸宮の娘末摘花である。高貴な身分に生まれながら、「あなかたはと見ゆるものは御鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ」(末摘花・二七〇)と、普賢菩薩の乗物である白象に喩えられ、極めて醜い女性として描かれる。末摘花は、醜貌だけでなく頑愚な性質も失笑の対象とされるが、蓬生巻では一転して宮家の遺風を守る高貴な精神性の際立つ描かれ方となり、著しい窮乏生活の中において源氏を信じ待ち続ける姫君を、源氏が庇護するという筋書きである。こうした末摘花の造型について、記紀⁽¹⁾や神話⁽²⁾、漢詩文⁽³⁾等からの指摘はあるが、仏教説話の受容を具体的に指摘する先行研究は見られない。その中で川口久雄氏は、敦煌出土の金剛醜女変文と末摘花との間に「一つの醜女の系列」があることを指摘された⁽⁴⁾。しかしその後、半世紀たった今日に至るまで、川口氏の説を検討するものは皆無である。本章は、末摘花造型の典拠に、題目に掲げた「金剛醜女説話」の関わりが考えられることから、原拠の仏典、金剛醜女説話、金剛醜女変文に着目して、末摘花造型の典拠について考察を行う。また、末摘花・蓬生巻の主題について、金剛醜女説話受容の観点から考察する。

一 源氏物語と賢愚経「波斯匿王女金剛品第八」の関係

序論二「金剛醜女説話の資料」において考察したように、金剛醜女説話の原拠の仏典1から3と類書4・5の

なかで、訳出年代が最も古く、本文の内容が最も豊かで、大聖武と呼ばれる伝聖武天皇宸筆「東大寺本賢愚経残卷」（波斯匿王女金剛品第八）が現存する賢愚経と、源氏物語との関わりを想定して両者を比較する。次の1から8は、賢愚経と末摘花・蓬生卷の構成や要素が対応すると考えられる場面である。傍線の箇所は、特に両者の主人公が類似すると思われる本文である。

1 主人公の出自と醜貌

賢愚経の主人公の波闍羅（金剛⁽⁵⁾、以下金剛醜女と称す）は、波斯匿王と摩利夫人の娘として生まれるが、極めて醜く生まれついたことが、まず巻頭に書かれている。

如^クレ是我聞^{キヌ}。一時仏在^{イマシキ}ニ舍衛国祇樹給孤独園^ニ。爾時、波斯匿王最大夫人名曰^ヲニ摩利^ト。時生^{ニム}ニ一女^ヲ。字^スニ波闍羅^ト。晋言^ニニ金剛^ト。其女面類⁽⁶⁾、極^メ為^テニ醜惡^ト。肌体龜皴、猶如^クニ駝皮^ノ。頭髮龜強、猶如^クニ馬尾^ノ。

（賢愚経・三五七）

金剛醜女の顔は、極めて醜惡で、肌や頭髮を動物に譬えられる。賢愚経の後半に父王は娘の醜さを「劇^{シク}如^シニ畜生^ノ」（後掲5）と、畜生のようなだと述べている。末摘花も「故常陸の親王の、末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御女、心細くて残りゐたるを」（末摘花・二四六）と、父方は皇族の血筋で身分が高い。容姿については、雪明かりの朝、源氏の眼に映った姿は次のように描かれている。

まづ居丈の高う、を背長に見えたまふに、さればよと、胸つぶれぬ。うちつぎて、あなかたはと見ゆるものは、御鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先のかたすこし垂りて色づきたること、ことのほかにうたてあり。色は雪恥づかしく白うて真青に、額つきこよなうはれ

たるに、なほ下がちなる面やうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし。瘦せたまへること、いとほしげにさらばひて、肩のほどなどは、いたげなるまで衣の上まで見ゆ。
(末摘花・二七〇)

「あななたはと見ゆるものは、御鼻なりけり」と、末摘花の鼻は、普賢菩薩の乗物の白象に喩えられ、あきれるほどに高く長くて、先の方が少し垂れて赤いのは、とりわけ異様である。肌は雪が恥じるほど白く青ざめている。額がとても広いのに、それでも下のほうが長く見える顔だちは、大層な長い顔である。このように、二人の姫君は、父方の血筋が高く、極めて容貌の醜いことを動物に喩えることが共通する。

2 外人に見せずに守護され、適齢期を迎える

王は宮内に、

便勅^{チス}ニ宮内^ニ。勸^ニ意^ヲ守護^シ、勿^レ令^ム外人^ト得^ル見^ヲ之^ヲ也。所以^カ者何、此女^ノ雖^モ醜形^ニ不^レ似^レ人^ニ、然^{ドモ}是末利夫人^ノ所^{ナリ}生^ム。
此雖^モ醜惡^ト、当^ニ密遣^{シテ}人而^ヲ護^ヲ養^ヲ之^ヲ。女年^{ナリ}転大^{ナリ}。任^{タリ}当嫁^ニ処^ニ。
(賢愚経・三五七)

と、娘を念を入れて守護し、「外人」に見せてはならないと命じる。理由は、娘の人離れをした醜形である。けれども、末利夫人の生んだ娘なので、醜惡といえども密かに養護して育てられる。そして「年^{うたた}転大なり。当に嫁ぐべき処に任^{たへ}たり」と結婚の適齢期になる。末摘花の暮らしぶりは、命婦が次のように話している。

心ばへ容貌など、深き方はえ知りはべらず。かいひそめ、人疎^ハうもてなしたまへば、さべき宵など、物越^ハしにてぞ、語らひはべる。
(末摘花・二四六)

「性質や容貌など詳しくは知りません。姫君はひっそりと隠れて人と親しまれないので、私が伺った夜などは、物を隔て語らっておられます」と源氏に伝える。金剛醜女の両親は健在で、末摘花の両親は故人という違いはあるが、人と親しまず、姿を見せない暮らし方は同じである。また、末摘花の年齢の記述はないが、命婦の手引きにより源氏が通うことから、二人は結婚の適齢期であることも共通する。

3 王命により金剛醜女と結婚する

王は娘が適齢期になると、元は富貴で落ちぶれた若者を探し出して、娘の結婚相手とする。

時^ニ長者子、長跪^{シテシテ}白言^ク。当^{ベシ}奉^ズ王勅^ヲ。正使^{ニモシ}大王以^テ狗見^{ヲラムルモ}賜^ハ、我亦^{ベシ}当^ク受^ク。

(賢愚経・三五七)

長者の子は跪いて「王勅を謹んで承る。大王が狗をお与えになられても、我は受けるべきである」と申し上げ、金剛醜女を妻にする。末摘花の父親王はすでに亡くなり、源氏に娘を直接託したのではないが、「わがかうて見馴れけるは、故親王のうしろめたしとたぐへ置きたまひけむ魂のしるべなめりとぞおぼさる」(末摘花・二七三)と、源氏は姫君のもとに通うようになったのは、故親王の魂の導きなのだろうとお思いになるとあることから、長者の子と源氏が醜女を妻にするのは、どちらも父王の導きといえる。

4 姫君は鍵をさして、外人に姿を見せない

王勅^{ハス}ニ女夫^{ノニ}。自^ラ捉^リ戸鑰^{ノヲ}、若^シ欲^{スモ}出^テ行^{カムト}、而^デ自^ヨ閉^ヲ之^ヲ。我^ハ女^ノ醜^ハ惡^ニ、世^ニ所^{ナリ}未^ザレ有^{ラル}。勿^レ令^{シムルコト}三^ニ外人^ニ覩^ミ見^セ面^ヲ状^ヲ、
常牢^ニ門^ヲ戸^ニ、幽閉^{シテ}在^リ内^ニ。

(賢愚経・三五七)

王は娘の夫に「自ら戸の鍵を捉えて、娘がもし出て行こうとしても、閉じ込めよ。我が娘の醜惡は、世間でも見たことがない。外の人に面状を見せてはならない」と命じる。そして、娘は常に門戸をかたく閉ざした内にいる。末摘花も源氏との対面で、

答へきこえで、ただ聞けとあらば、格子など鎖してはありなむとのたまふ。――中略――二間の際なる障子、手づからいと強く鎖して、御茵うち置き、ひきつくろふ。

（末摘花・二五九）

と鍵を鎖した内にいる。賢愚經の「常に門戸を牢し、幽閉して内に在り」の「牢」は固く閉じ込めるという意味で、末摘花巻の「いと強く鎖して」に対応し、鍵をさして外の人に姿を見せないことが共通する。

5 前世の罪の自覚と仏を念じる

金剛醜女は、

彼女心悩、自責罪咎^一。而作^{サク}是言^ヲ。我種^{ハエ}何罪^一、為^ニレ夫所^ノ憎、恒見^{ニルヤ}幽閉^ヲ。

（賢愚經・三五七）

と心悩み、自らの罪咎を責めてこのように言った。「我は何の罪を種え夫の為に憎まれ、恒に幽閉されるのか」と。この罪咎が前世の行いによるものであることは、波斯匿王が後半に、

時波斯匿王、跪^{ひざまツキ}白^{シテ}レ仏言^{ニク}。不審^{ナリ}、此女宿^{ハさきのよニ}殖^{エノ}二何福^ヲ、乃生^{チルヤ}二豪貴富樂之家^ニ。復造^タ二何咎^ヲ。受^ケ二醜陋^ノ形^ヲ、皮毛龜強、劇^{シク}如^ニ畜生^一。

（賢愚經・三五八）

娘は前世において、どのような福を植え、豪貴富樂の家に生まれることができたのか。また何の咎を造り醜陋を受け畜生のものであるのかと、仏に娘の因縁を聞く言葉から判る。末摘花も「わが身は憂くて、かく忘れたるにこそあれ」(蓬生・六五)と、自分の果報が悪いので源氏に忘れられたとわが身を責める。また女房達が「いとくちをしき御宿世なりけり」(蓬生・五六)と末摘花の運の悪さを嘆いている言葉からも、二人の醜女は誰の所為でもなく、自分の宿世の罪を責めていることが共通する。そして金剛醜女は、

復ラおもフヤウ自念言ニ。今仏在ハリ世ニ。潤シ益衆生ヲ、遭フ苦厄ニ者ハ、皆蒙ムル過度ヲ。即便すなわち至心遙礼シ世尊ヲ、唯願クハレ垂レ愍ヲ。
到リ於我前ニ。暫見レヨ教訓ヲ。
(賢愚經・三五七)

と、仏が今この世に在つて、世の中の衆生が仏の救いを受けていることを知ると、仏が自分の前に現れることを、この上なく誠実な心で念じている。末摘花も人々が源氏が帰京したことを天下の喜びとして騒いでいることを聞くと、「わがかくいみじきありさまを聞きつけたまはば、かならずとぶらひたまひてむ」(蓬生・六五)と、源氏が必ず訪れて下さるに違いないと信じて待っている。金剛醜女は現世にいる仏の評判を聞き、末摘花は帰京した源氏の噂を聞きながら信じて待つ情況が似ている。しかし、二人の醜女が待つ「仏」と「源氏」を対応させるには大きな隔たりがあるといえよう。

ところが源氏物語五十四帖の中で蓬生巻だけに、源氏を「神仏」や「仏か菩薩」に喩える例がみられる。末摘花に仕える女房たちは、

いでや、いとくちおしき御宿世なりけり。おぼえず神仏神仏のあらはれたまへらむやうなりし御心ばへに、かか
るよすがも人は出でおはするものなりけり。
(蓬生・五六)

と源氏を神か仏のようだと話し、また末摘花の兄の禅師が源氏が営んだ法会の帰りに宮邸を訪れ、

権大納言殿の御八講に参りてはべりつるなり。いとかしこう、生ける浄土の飾りに劣らず、いかめしうおもしろきことどもの限りをなむしたまひつる。仏菩薩の变化の身にこそものしたまふめれ。
(蓬生・六六)

と、権大納言殿(源氏)は、仏や菩薩の化身でおられると話す。兄の禅師の突然の登場は、源氏を「仏菩薩の变化の身」とする為の役割と考えられる⁽⁸⁾。従って、金剛醜女は「仏」を念じ、末摘花は「仏か菩薩の变化の身」を念じて待つことが一致する。

6 金剛醜女の志を知った仏は、女の前に現れる

其女精誠敬心純篤。仏知^{ノハ}ニ其志^{ナリ}、即到^ハニ其家^リ、於^チニ其女前^ニ、地中^テ踊出^ノス。

(賢愚経・三五七)

「其の志」は、金剛醜女の仏に対する「精誠、敬心、純篤」をさす。「精誠」は真心をつくす誠実さを意味し、「敬心」は相手を敬い礼をつくす心、「純篤」は、情に篤く真心のあることを意味する。また金剛醜女の名は波闍羅、漢訳すると金剛(前掲1)となり、金剛心⁽⁹⁾をもつ。従って仏に対する誠実な志は、堅固な信仰心といえる。仏は金剛醜女の志を知ると、すぐに金剛醜女の家にとり、女の前に地中から突然現れるのである。

末摘花は「亡き人の御本意違はむがあらはれること」(蓬生・五八)と、父常陸宮の遺志を守り、貧窮の中においても調度品を手放すことを許さず、叔母が太宰府への下向を勧めても、「されど動くべうもあらねば」(蓬生・

六九)と誘いを断る。乳母子に見捨てられても、なお頑なに源氏を待ち続ける様子は、金剛醜女の金剛心と共通するといえる。金剛醜女の「精誠、敬心、純篤」は、末摘花の「心変わりのない誠実で、父宮を敬う心、源氏を純粹に信じる篤い精神性」に通じる。そして仏が金剛醜女の志を知ると、すぐに女の前に現れるように、源氏も末摘花が父常陸宮の遺志を守りながら待ち続ける「深き蓬の本の心」を知ると、その場ですぐに訪ねるのである。

「いかがすべき。かかる忍びありきもかたかるべきを、かかるついでならではえ立ち寄らじ。変はらぬありさまならば、げにさこそはあらめと、おしはからるる人ざまになむ」とのたまひながら、ふと入りたまはむこと、なほつつましく思さる。―中略― 惟光も、「さらにえ分けさせたまふまじき蓬の露けさになむはべる。露すこし払はせてなむ、入らせたまふべき」と聞こゆれば、

尋ねてもわれこそ訪はめ道もなく深き蓬のものと心を

とひとりごちて、なほ下りたまへば、御先の露を、馬の鞭して払ひつつ入れたてまつる。

(蓬生・七五)

賢愚経の「仏、其の志を知り即ち其の家に到り」の「即」と、蓬生巻の「ふと入りたまはむ」の「ふと」は、「すぐに」という意味で、仏も源氏もすぐに醜女の前に現れることが一致する。賢愚経の「地中踊出」は、仏教説話では「仏身現庭中」となり、より源氏物語に近い表現となる。この場面については第四節において再考する。

7 主人公の変貌

賢愚経の大団円は、金剛醜女が美しく変貌する場面である。

女見ニ仏身^ヲ、益増歡喜^ス。因ニ歡喜^ニ故、惡相即滅^ス。身体端嚴、猶如ニ天女^ノ。

(賢愚経・三五七)

金剛醜女は、仏身を見ていっそう歎喜し、歎喜に因って悪相がすぐに消え、身体は端嚴に天女のように美しくなる。源氏物語では現実離れた事は起きないので、金剛醜女のように末摘花の容姿が美しく変貌することはない。しかし、「かの花散里も、あざやかに今めかしうなどは花やぎたまはぬ所にて、御目移しこよなからぬに、咎多う隠れにけり」（蓬生・七九）と、華やかさのない花散里と大した違いがなく、見た目の欠点の多くは隠れてしまったとある。末摘花は、極めて容貌の醜い姫君であったが、見た目の欠点が隠れてしまったのは、変貌といえるのではないだろうか。金剛醜女の「悪相即ち滅す」と、末摘花の「咎多う隠れにけり」は対応するといえる。

8 賢愚経と末摘花巻の巻末

波斯匿王は仏のもとに行き、「娘は前世において、どのような福を増やしたので、豪貴富樂の家に生まれることができたのか。また何の咎を造り醜陋と生まれ、その形は畜生のようなものであるのか」と尋ねると、

唯願^{クバ}世尊^{セラレヨ}、当見^ニ開示^一。仏告^{ハダ}大王^ニ。夫人^{ハシ}処^レ世^ニ、端政^ハ醜陋^ハ、皆由^ル宿行^ニ罪福^ノ之報^ニ。——中略——
 由^ル三其^レ爾時^ノ、惡不善^ノ心^ニ毀^ス三皆^ニ賢聖^ノ辟支^ヲ仏^ニ故^ニ、自造^ラ口過^ヲ。於^レ是^ニ以来^ニ、常受^ニ醜形^ヲ。後見^ニ神變^ヲ、自改^ム悔^ヲ故^ニ、還得^ビ端正^ヲ、英才^ユ越^エ群^ヲ、無^シ能及^ブ者^ニ。由^ル供^{スル}養^ニ辟支^ヲ仏^ニ故^ニ、世世^ニ富貴^ニ、縁得^リ解脱^ヲ。如^ク是大王^ノ、一切衆生^ハ有^ル形之類^ハ、応^{ベシ}護^ル身口^ヲ。勿^レ三妄^{リニシ}爲^レ非輕^ト呵^{スル}於人^ヲ。
 （賢愚経・三五八）

仏は大王に「夫れ人は、世において、端正と醜陋は皆、前世の善惡の行為による。——中略——惡不善の心で辟支仏を罵ったことにより自らの口に咎をつくり、以来常に醜形を受ける。後に神変を見て懺悔をしたので端正を得る。その優れた才能は群を超え及ぶものは無い。辟支仏を供養したことで、世々富貴となり、解脱を得る」と告げた。

この仏の言葉は、1から5の經典と類書に共通する主題である。しかし「一切の衆生有形の類は身口を護らなければならぬ。妄^{みだ}りに人を非難し、笑つてはならない」は、他の仏典にはなく賢愚經だけにみられる仏の言葉である。この仏の戒めを暗示させる場面が末摘花巻の結末にみられる。

髪いと長き女をかきたまひて、鼻に紅をつけて見たまふに、画にかきても見ま憂きさましたり。わが御影の鏡台にうつれるが、いときよらなるを見たまひて、手づからこのあかばなをかきつけにほはして見たまふに、かくよき顔だに、さてまじれらむは見苦しかるべかりけり。姫君見て、いみじく笑ひたまふ。「まろが、かくかたはになりなむ時、いかならむ」とのたまへば、「うたてこそあらめ」とて、さもや染みつかむと、あやふく思ひたまへり。

(末摘花・二八二)

源氏が描いた髪の長い女は末摘花を連想させ、また鼻に紅をつけて若紫を笑わすのは、末摘花の醜さを笑いものになっているといえる。この場面は読者に、仏の諫めの言葉「口をつつしんで、人を軽んじ、笑うなかれ」を想起させるのではないだろうか。

このように1から8の共通点が見られることから、末摘花・蓬生巻は、賢愚經を典拠にして書かれたと考えられる。しかし、賢愚經を原拠とする金剛醜女説話を經由した利用も考えられることから、次節では敦煌変文との関わりについて検討する。

二 末摘花の造型と金剛醜女変文の類似

遠く離れた敦煌出土の金剛醜女変文と、源氏物語の間に直接的な因果関係があるとは想定しがたいが、金剛醜女変文の金剛醜女と、末摘花の要素は看過するにはあまりにも似すぎているのである。金岡照光氏は「変文はまさに絵説きの講唱である」と示され、また傳芸子氏や岩本裕氏が「賢愚経の所伝が波斯匿王女金剛の名を出す敦煌変文の「醜女縁起」の所依となったことは疑えないであろう⁽¹⁰⁾」と指摘されるように、金剛醜女変文は、賢愚経の描写と類似する点が多い。従って本節では、第一節で考察した賢愚経と末摘花・蓬生巻にみられる1から8の共通点を除いた、金剛醜女変文だけに見られる描写との類似点を、次の1から5に挙げる。資料として、現存する金剛醜女変文⑬から⑳のなかで、保存状態がよく、内容が最も豊かな⑬Pe11iot3048「醜女縁起」を用いる。

1 獸頭^ノ渾^テ是^レ可^レ憎^ハ貌^ハ、国内計^レ応^レ無^ニ比^ベ並^ニ。

(P3048 醜女縁起・6―2)

金剛醜女の獣のような頭は、憎らしい貌で国中に二人といないと、獣に喩えられる。末摘花の容姿が「観普賢菩薩行法経」の引用による白象の譬であることは、池田亀鑑氏の指摘がある⁽¹¹⁾。それに加えて末摘花の顔は「額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし」(末摘花・二七〇)とひどく長い顔立ちである。二人は人離れした容貌を動物に喩えられることが共通する。

2 渾身^ハ又^{タリ}似^ノ野猪^ノ皮^ニ。 ―中略― 女縁^ノ醜陋^ノ世間^ニ希^{ナリ}、渾身^ハ一^{タリ}似^ノ黒^ノ執皮^ニ。 (P3048 醜女縁起・6―2)

賢愚経の金剛醜女の肌は「肌体麤洩。猶如^ニ駝皮^ニ」(前掲第一節1)とあるが、変文では、より具体的に全身が野生の猪の皮や、黒い^{なめし}執皮に似るとある。末摘花の肌は、雪が恥ずかしくなるくらい白く青ざめているので(前掲第一節1)、金剛醜女の黒い肌とは対極であるが、末摘花の装束をみると、

聴し色のわりなう上白みたる一襲、なごりなう黒き桂重ねて、表着には黒貂くろぎの皮衣かはぎぬ、いときよらに香ばしきを着たまへり。古代のゆゑづきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには、似げなくおどろおどろしきこと

(末摘花・二七二)

と薄紅の色あせた一襲の桂は、元の色が判らないほど黒く汚れ、表着は黒貂の皮衣を着ている。金剛醜女の野生の猪の皮と、末摘花の薄汚れた桂が対応し、また、金剛醜女の黒なめしの鞣皮なめしのような全身は、末摘花の「表着には黒貂の皮衣」の黒い鞣皮が一致する。

3 看ル人左右和シテ身転ゲ、—中略—公主全無ハクシ二窃窕ニ—⁽¹²⁾、差事⁽¹³⁾、非レ常不レ小。上唇半斤有リ余、鼻孔竹筒渾小。
生来未レ省ミル二歡喜スルコト—、見ニ説三年一ニ笑フト—。
(P3048 醜女縁起・612)

金剛醜女は、人を看る時は、左右に体ごと向きをかえ、—中略— 公主にはまったく嫺やかさがなく、奇異な様子は甚だしく、上唇は半斤余り、鼻の穴は竹筒より大きく、生まれてからいまだ歡喜をみず、三年に一度笑うと公主らしからぬ態度である。末摘花も、高貴な姫君に似合わない身のこなし方である。

口おほひしたまへるさへ、ひなびふるめかしう、ことごとしく、儀式官の練り出でたる臂もちおぼえて、さすがにうち笑みたまへるけしき、はしたなうすするびたり。 —中略— ただ「むむ」とうち笑ひて、いと口重くちしげなるもいとほしければ出でたまひぬ。

(末摘花・二七二)

末摘花の「ことごとしく儀式官の練り出でたる臂もち」という大げさで堅苦しい臂つきは、金剛醜女の嫋やかさのない動作と共通する。金剛醜女は「上唇半斤有余」とあるが、上唇が重いと解釈すれば、末摘花の「いと口重げなる」に通じる。また金剛醜女は「生来末省歡喜、見説三年一笑」と、生まれてから歡喜せず、滅多に笑わない様子は、末摘花のにこやかに笑わない様子と共通する。そして金剛醜女は「鼻孔竹筒渾小」とあり、末摘花も「あなかたはと見ゆるものは御鼻なりけり」と形は違うが極端に醜い鼻である。二人は醜形の描写と高貴な女性の資質である嫋やかさに欠けていることが似ている。

4 錦繡羅衣馥かんばしき（14）鼻香。

（P3048 醜女縁起・6―4）

錦繡の羅衣は、羅に刺繡をした美しい豪華な装束のことで馥郁たる香がする。末摘花も「いときよらに香ばしきを着たまへり。古代のゆゑづきたる御装束なれど」（末摘花・二七一）と由緒ある装束に香を薫き込めている。醜女の外見的美質の立派な装束と良い香りが、末摘花と一致する。

5 紅花レハタリ似ニ輕トクニ輕ハ玉ハ質ケ如ニ綿ノ白雪レ和ケリ。

（P3048 醜女縁起・6―6）

金剛醜女は仏の加護を得て、紅花のようなかほ臉は輕やかにさ坼くようで、玉のような肌は白雪の綿のように端正に変貌する。この「白雪」は、末摘花では「色は雪恥づかしく白うて真青に」（末摘花・二七〇）と、肌は雪も恥じるほど白くて真青でと、美人の譬えではないが、「白雪」が一致する。「紅花」は、美しい容貌の譬えであるが、末摘花の場合は、

紅の花ぞあやなくうとまるる梅の立ち枝はなつかしけれどいでや

(末摘花・二八三)

と、末摘花の紅い鼻とかけているので、用いる意味は違うが、「紅花」が一致する。

以上のように、仏典にない敦煌変文だけにみられる醜女の要素と、末摘花の要素が共通することは偶然の一致とは考えにくく、何らかの資料を介した繋がりがあのではないだろうか。

三 源氏物語と金剛醜女説話の関係

日本に現存する金剛醜女説話とその流れをくむ説話は管見によれば、序論二に挙げたように、制作年代順に①注好撰、②今昔物語集、③私聚百因縁集、④神道集、⑤説法統因縁集、⑥宝物集、⑦聖徳太子内因曼荼羅、⑧叡山文庫本太子伝、⑨鶴林寺本太子伝、⑩四天王寺本太子伝、⑪内閣文庫本太子伝に見られる。また⑫四天王寺蔵聖徳太子絵伝の絵解き絵が現存することから、日本においても金剛醜女説話は絵説きの題材として広く流布していたことがわかる。この中から成立年が最も古いとされる①注好撰と末摘花・蓬生巻を比較し、説話との関わりを考察したい。注好撰「金剛醜女変^{ハス}ニ美艶^ニ」は、「金剛醜女は前世において、僧を供養した故で大王の子として生まれ、謗りを生じた故で鬼^{ミに}身を得る。金剛醜女が、靈山の釈迦、吾が形を美に成て父の法会に逢はしめたまへと願うと、仏が庭に現れ美しくなる」という内容である。また「故僧不^ラ可^レ謗^{トモ}。復造^{トモ}罪、能々生^{シテ}怖畏^ノ心^ヲ可^レ二懺悔^ニ」(注好撰・三〇ウ)が主題と考えられる。次の1から3は、金剛醜女説話だけにみられる要素と末摘花・蓬生巻との一致点である。

1 求婚譚

后^{ヲハフ}曰^ニ末利夫人^ト。其形貌^ノ吉^{コト}。十六大国^ニ無^レ並^ヒ。時^ニ夫人生^リ一女子^ヲ也。——中略——時^ニ成^{セル}二十二三^ニ之間^タ、推^{シテ}末利夫人女^ノ美^ガ、從^{コトヲ}十六大国^ニ各相訪^{ヒラフ}。
(注好撰・二八ウ)

金剛醜女の母末利夫人は、十六大国のなかで最も美しいので、その女^{むすめ}も美しいであろうと十六大国より求婚される。末摘花は、

君たちは、ありつる琴の音をおぼし出でて、あはれげなりつる住まひのさまなども、やう変へてをかしう思ひつづけ、あらましごとに、いとをかしうらうたき人の、さて年月を重ねゐたらむ時、見そめて——中略——そののちこなたかなたより文などやりたまふべし
(末摘花・二五三)

と、源氏は末摘花の父親王の風雅のたしなみから、末摘花の琴も「おしなべての手にはあらじ」(末摘花・二四七)と推し量り、また源氏と頭の中将は荒れた邸に寂しく暮らす姫君の琴の音を聞き、美しくて可憐な人と思ひ競つて恋文を送るのである。どちらの醜女も親が優れていることにより、娘も美しいであろうと求婚を受けることが共通する。

2 法会

賢愚經「讌会⁽¹⁵⁾」、金剛醜女変文の「朝官之宴」は、金剛醜女説話では「法会」である。父王は「大王^ニ為^ニ一生大願^ノ」^ス修^ニ法会^ヲ。第一女形^{ノムスメ}鬼^{ミニクキ}故不^レ来^ヲ」(注好撰・二九オ)と一生の大願の為に法会を行うが、金剛醜女は醜いの

で参加できない。末摘花も兄の禪師から「かの殿には、故院の御料の御八講、世の中ゆすりてしたまふ」（蓬生・六五）と源氏が二条院において主催する法会の様子を聞く。二人の醜女は、法会に参加出来ず、悲しむことが共通する。

3 仏が庭に現れる

靈山^ノ釈迦、吾^カ形^ヲ成^テ美^ニ令^レ逢^ニ父^ノ法^ハ会^ニ。依^テ比^ニ願^ニ仏^ノ身^ハ現^ル庭^ニ中^ニ。

（注好撰・二九才）

金剛醜女は「靈山の釈迦、吾が形を美に成て、父の法会に逢はしめたまへ」と、釈迦に祈るが、蓬生巻では「越の白山」と対応させていることがうかがえる。

霜月ばかりになれば、雪霰がちにて、ほかには消ゆる間もあるを、朝日、夕日をふせぐ蓬葎の蔭に深う積もりて、越の白山思ひやらるる雪のうちに、出で入る下人だになくて、つれづれと眺めたまふ。（蓬生・七一）

この「越の白山」の引歌について、紫明抄、河海抄は、藤原兼輔の大江千古への贈答歌をあげている。

大江千古がしらやまにまうでけるに

きみがゆくこしのしらやましらねどもゆきのまにゝゝあとはたづねむ^{（16）}

白山は、奈良時代に越前の泰澄大師が開いた古くからの山岳信仰の地であり、兼輔歌の詞書に「しらやまにもう

でけるに」とあることから、平安時代に白山信仰が都の貴族に広まっていたことがわかる。平安末期成立の白山宮最古の縁起と伝わる「白山之記⁽¹⁷⁾」に、

白山^ハ観音^{（薩埵）}サタ利益^ノ砌也、一度^{フム}踐^ニ清涼^ノ峯^ヲ者、必^リ預^ニ文殊^ノ利益^ニ、一度白山^{ヨツル}攀^マ類、不^レ疑^ハ観音^ノ冥助^ヲ者歟、
從^{リテ}却^一初^ニ以来^ニ、常^ニ雖^モ仏菩薩集会^ト砌^一機感時^テ至、養老三年未己七月三日御宅宣成始

と、白山は「観音菩薩の利益の砌（場所）」、「仏菩薩^{ぶつぼさつ}の集会の砌^{みざり}」と記されている。枕草子の「職^{しき}の御曹司におはします頃」の章段に、庭に作った雪山が消えないように「白山^{しろ}の観音、これ消えさせ給ふな⁽¹⁸⁾」と祈ることからも、白山神の本地が観音菩薩であることが知られていたことがわかる。これらのことから、蓬生巻の「越の白山」の引用は、「雪が消えることがない越の白山」という解釈に、白山の観音菩薩の利益を願うことの意味が含まれると読み取るのが、当時の知識であったと考えられる。

末摘花が越の白山を想像するような雪のなかで一人寂しく物思いにふける場面は、金剛醜女の靈山の釈迦を祈る姿が思い合わせられる。そして金剛醜女の前に「仏身庭中に現ず」と仏があらわれるように末摘花の前には、

尋ねても我こそ訪はめ道もなく深き蓬のものと心を

とひとりごちて、なほ下りたまへば、御さきの露を、馬の鞭して払ひつつ入れたてまつる。（蓬生・七六）

と「仏か菩薩の変化の身」（前掲第一節5）と称された源氏が、庭の蓬の露を払わせながら現れる。このように金剛醜女説話の「求婚」、「法会」、「靈山」、「仏身庭中」の要素が、源氏物語に見られることがわかる。

四 末摘花・蓬生卷の卷末について

こうした考察から、源氏物語の末摘花をめぐる発想や表現に、金剛醜女説話の受容があったことがわかる。この典拠となる資料は、賢愚経、金剛醜女変文、金剛醜女説話があげられる。この三つの資料をそれぞれの場面で典拠として用いたか、三つを併せ持つ何らかの資料があったか、もしくは賢愚経と、金剛醜女変文の流れをくむ金剛醜女説話の存在が考えられるのである。

末摘花・蓬生卷の卷末について、金剛醜女説話受容の観点から考えてみたい。末摘花卷の卷末は、源氏が末摘花を想起させる髪の毛の長い女を描き、自分の鼻に赤い色をつけて若紫を笑わせる場面である（前掲第一節8）。これは戯れとはいえ、末摘花の赤い鼻を物笑いにしているのである。そして「かかる人びとの末々、いかなりけむ」（末摘花・二八三）という語り手の言葉で締めくくられる。この「かかる人々」について、『花鳥余情』『湖月抄』は、「是は物語の作者の詞、末摘花の事也」とあり、現代の註釈は、末摘花をはじめ、空蟬や軒端荻など源氏に関わる女性を挙げ、源氏と若紫は含まれていない。

しかし、源氏が末摘花を物笑いにする場面は、金剛醜女説話受容の観点から、辟支仏を供養しながら心の中では辟支仏の醜さを罵ったことにより、自らの口に咎をつくり、以来醜形を受けるという金剛醜女説話を読者に想起させるといえる。賢愚経の仏の諫めの言葉「一切の衆生有形の類は身口を護るべし、妄りに非と為し人を輕呵する勿かれ」（前掲第一節8）を鑑みれば、「かかる人びとの末々、いかなりけむ」は、末摘花の醜さを誇った源氏と、若紫は源氏に笑わされたものではあるが、二人の将来や来世は、どうなるのであるのかという解釈ができるのである。したがって「かかる人々」は、源氏と若紫も含まれると読み取ることができる。

蓬生卷の末摘花は、宮家の遺風を守る高貴な精神性として描かれるが、女房達には頑愚にみえ、信じていた乳

母子にまでも見捨てられるという設定である。末摘花が源氏に救われてから二年ほど後に、太宰から上京してきた乳母子の侍従が、末摘花の幸運を知るという場面で蓬生巻は終わる。

侍従が、うれしきものの、今しばし待ちきこえざりける心浅さはづかしう思へるほどなどを、今すこし問はず語りもせまほしけれど、いと頭いたううるさくもの憂ければなむ。今またもついであらむをりに思ひ出でてなむ聞こゆべきとぞ。

(蓬生・八二)

侍従はもう少し待てばよかったと自分の思慮が浅いことを恥じている。末摘花巻に「はやりかなる若人」(末摘花・二六二)とあり、「思慮の浅いさま」や「気の早いさま」は、末摘花の源氏を待ち続けた「金剛心」と相反するといえる。侍従が「ままの遺言はさらにも聞こえさせず」(蓬生・七〇)と、末摘花の乳母(侍従母)の遺言にそむいて姫君を見捨てた行動を、「心浅さはづかしう思へるほどなど」と悔やんでいることについて、金剛説話受容の観点から考察すると、

複造^{トモヲ}罪、能々生^{シテ}怖畏^{ノヲ}心可^ニ懺悔^ニ。

(注好撰・三〇ウ)

と罪を造るとも、よくよく怖畏の心で、懺悔すべしを暗示していると解釈することができる。また、蓬生巻の「今またもついであらむをりに、思ひ出でてなむ聞こゆべきとぞ」(蓬生・八二)は、玉鬘巻に繋がることが考えられることから、次章において考察を述べたい。

- (1) 鈴木日出男氏『源氏物語歳時記』(ちくまライブラリー 30、筑摩書房、平成元年(一九八九)、二八五頁)は、「末摘花の物語での雪の意味を考える為にも、彼女の醜貌について記紀の石長比売の伝承が想起される」と指摘される。
- (2) 林田孝和氏「源氏物語の醜女―末摘花・花散里の場合―」(『日本文学論究』第四十二冊、昭和五十八年(一九八三)五月)は、「末摘花も花散里もこうした降魔の相をもつ(魔除けの女)(降魔の女)として発想されたのであろう」と指摘される。
- (3) 新聞一美氏「源氏物語の女性像と漢詩文―帚木三帖から末摘花・蓬生卷へ―」(和漢比較文学会編『中古文学と漢文学Ⅱ』和漢比較文学叢書第四卷、汲古書院、昭和六十二年(一九九〇))は、「末摘花は貧の中で徳に生きた女の貧士としての性格をもっている」と指摘される。
- (4) 川口久雄氏「金剛醜女変文と日本の説話文学」(『漢文教室』第五十九号、昭和三十七年(一九六二)三月)参照。
- (5) 岩本裕氏「縁起の文学」(『東方学』第三十輯、昭和四十年(一九六五)七月)は、賢愚経の題名に見られる波斯匿王の王女「金剛」の名は、波闍羅の訳でサンスクリット語でヴァジラーであると指摘される。「金剛」は非常に堅固で破砕しえないものを修飾する語である。
- (6) 大正新脩大蔵経の校注「貌」、高麗大蔵経「類」、東大寺本『賢愚経』残卷(大聖武)は「狼」、石山寺本「狼」、興聖寺本「狼」とあるが、「狼」は「貌」の異体字である。「類」は、形象・姿・様子のことで、「貌」と同義語である。
- (7) 一葉抄・弄花抄・細流抄「たゝ末摘のうき果報にて忘れぬると観し給也」。
- (8) 岩本裕氏「縁起の文学」(前掲注5に同じ)は「金剛醜女説話は、アヴァダーナ説話で過去七仏とくにヴィバシイン仏かカーシャパ仏が登場する」と指摘される。仏典と敦煌変文は「辟支仏」が、仏教説話では「聖人・僧」が登場する。蓬生卷に兄禅師(僧の尊称)が登場するのは、金剛醜女説話の流れをくむ故かと考えられる。
- (9) 「金剛心者、一切結使煩惱所レ不能レ動、譬如四金剛山不三為レ風所二傾揺二」(『大正新脩大蔵経』大智度論第四五)。

- (10) 「序論」注30に同じ。
- (11) 池田亀鑑編『源氏物語事典』（東京堂出版、昭和三十五年（一九六〇））所収の「所引詩歌仏典」参照。
- (12) 「窈窕淑女、君子好逑」（『詩経』周南、関雎）。
- (13) 「差事」は「奇事・怪事」のことで、普通と異なる奇異な事を意味する（禮鴻編『敦煌文献語言詞典』、杭州大学出版社、一九九四年）。
- (14) S4511「復」、S2114・P2945「複」。
- (15) 「酒もりのあつまり」（『国訳一切経』印度撰述部、本縁部、賢愚経、大東出版社、昭和四十九年（一九七四））。
- (16) 兼輔集『西本願寺本三十六人歌集』九（国宝西本願寺本三十六人歌集刊行会、昭和四十八年（一九七三））。
- (17) 「白山之記」の本文は日本海文化研究室編『白山史料集』上巻（日本海文化叢書第四巻、石川県立図書館教会・昭和五十四年（一九七九））により、その際に訓点は私に加えた。
- (18) 本文は、池田亀鑑・岸上慎二・秋山虔三氏校注『日本古典文学大系19 枕草子 紫式部日記』（岩波書店、昭和三十三年（一九五八））による。

第二章 源氏物語における玉鬘の造型について

―原中最秘抄が示す長谷観音の靈驗譚の関わり―

はじめに

十二世紀末に編纂された今様の歌謡集『梁塵秘抄』に、「観音しるし驗みを見る寺、清水石山長谷はせの御山をやま、粉河近江こがはあふみなる彦根山ひしねやま、間近まぢかく見ゆるは六角堂ろかくだう（上）」と謡うように、奈良県桜井市初瀬の豊山長谷寺の本尊十一面観音の靈驗と信仰は、奈良時代の創建以来、長谷寺の名を世の中に知らしめてきた。この長谷観音の靈驗を明確に想起させるかたちで書いたと思われる源氏物語の巻に、玉鬘巻をあげることができる。この巻に登場する夕顔の忘れ形見の姫君は、後世の読者により玉鬘と呼ばれる。母夕顔と死別の後、乳母と共に筑紫に下り、その地で成人すると、豪族の強引な求婚を逃れて上京する。玉鬘は都に無事帰着した報告に石清水八幡宮を詣でると、その次に、

仏の御なかには、初瀬はつせなむ、日の本もとのうちには、あらたなる驗しるしあらはしたまふと、唐土もろこしにだに聞こえあ
んなり。
(玉鬘・二九七)

という乳母子の豊後介の勧めで、初瀬に向かう。椿市の宿に着くと、折りしもそこに来合わせたのは、十数年にわたり玉鬘を捜していた夕顔の乳母子右近であった。右近との邂逅は、長谷観音の靈驗であることを印象づけ、玉鬘の新たな物語が展開されると理解することができる。

玉鬘の巻でとりわけ注目されるのが、長谷観音の唐土にまで評判が高いという靈驗である。永観二年（九八四）

成立の『三宝絵詞』（以下、三宝絵とする）に「ソノ、チ利益アマネク靈驗モロコシニサヘキコヘタリ」（五月長谷菩薩戒）とあるように、唐土にまで靈驗が届くという評判は、古くから伝承されていることがわかる。源氏物語の古注釈である原中最秘抄は、靈驗譚の例として、散佚書『長谷寺流記』（以下、流記とする）の馬頭夫人^{めづぶにん}（²）の話（以下、馬頭夫人説話とする）を引く。唐の馬頭夫人は馬のような醜貌であるが、長谷観音の靈驗により端嚴美麗になるという話である。以降、河海抄をはじめ諸所の注釈書に概略が引かれてきた。それはすなわち、長谷寺に唐土や新羅にまで靈驗を及ぼすという靈驗譚の伝わる中で、この馬頭夫人説話が、玉鬘の物語に相応しい事例の一つであるに他ならない。しかしながら、原中最秘抄が、流記の馬頭夫人説話を引く意図については、論じられたことがないように見受けられる。

本稿は、原中最秘抄所引の馬頭夫人説話は、玉鬘巻との関わりを示していると想定して考察したい。また、この馬頭夫人説話の原拠とする金剛醜女説話は⁽³⁾、第一章において末摘花の造型に関わることを述べたが、玉鬘にも末摘花と同様に「玉かつら」と「かたは」という共通する語を用いることから、金剛醜女説話の関わりについても考察を加えることで、玉鬘造型の背景に迫ってみたい。

一 馬頭夫人説話の伝本について

玉鬘巻と馬頭夫人説話との関わりについて具体的な検討に入る前に、その前提として踏まえて置きたいのは、現存する資料のなかで、どの本文を用いるのかという点である。最も古い本文と思われるのが、流記の馬頭夫人説話である。永井義憲氏は、野口博久氏の「散佚書の『流記』は長谷寺の内部の管理記録であつた⁽⁴⁾」とする説を肯定され、さらに散見する流記の佚文を收拾した上で、成立年は「延喜十年（九一〇）の、それ以前に流記

は成立していたという試案を提示された⁽⁵⁾。

この流記の馬頭夫人説話を引用するのが、原中最秘抄である。原中最秘抄は、学祖河内守光行（寛元二年（一二四四）歿）、その子親行、親行の弟素寂、親行の子聖覚（俗名義行）、義行の子行阿（俗名知行）の四代五人にわたって書き継がれた源氏物語の注釈書である。現在二系統の伝本が伝わり、広本・略本と通称される。広本の原形は、光行の子親行最晩年の文永九年（一二七二）頃の成立とされるが、行阿の加筆終了が貞治三年（一二三四）九月、さらに後人の整理を経て、広本の成立にもう少し時間を要したとある⁽⁶⁾。馬頭夫人説話の引用文のあとに「已上行阿勘文」と記されていることから、引用は行阿によるものと考えられる。略本は、奥書に明記されるように、耕雲山人（花山院長親）によって抄出・整理されたものである。田坂憲二氏は、略本は広本の省略本ではなく異本別本というもので、耕雲が略本を纏めるに際して依拠した原中最秘抄の原本の内容・構成を基本的に尊重しているため、広本（非耕雲抄出本）の欠を補う資料としての意味があると指摘された⁽⁷⁾。成立は応永十五年（一四〇八）頃以降である⁽⁸⁾。この広本・略本の冒頭部分を比べると、

①長谷寺流記云。唐信宗皇帝之時千人ノ后ヲモチ給ヘリ。第四ノ后ヲ馬頭夫人ト云ヘリ。文宗皇帝孫玄成太子娘。顔長シテ面馬ニ似タリ。仍馬頭ト名ツク。然トモ心ニ情フカクシテ帝ノ寵愛ニ心ナシ。ソレヲ猜^{ネタミ}テ自余ノ后妃^{コウヒ}評定シテ云。馬頭夫人ハ夜ナク御門ニマイリ給ヘルハカリニテ、面貌^{モウバウ}ヲアサヤカニ見給ハサルニヨリテ御気色無双也。白昼ニ彼貌^{モウバウ}ヲ叡覽アラハ定テ疎^{ウツ}ム御心出キナント云合テ（広本・一〇〇）

②長谷寺流記云。唐僖宗皇帝千人の後をもち給。其中馬頭夫人と云。顔ながくして馬の面に、たり。然心に情ふかくして帝の寵愛ニ心なし。自餘の夫人これをそねみて此面^{コノオモ}を分明に見たまはぬによりて寵愛あり、白昼にかたち^{カタチ}をみせたてまつらんと相儀して（略本・三三九）

広本の「信宗皇帝」は歴史上実在のない名前である。略本は、唐朝第十八代の「僖宗皇帝」となり、広本の本文の省略や訂正がみられる。

同じく流記を利用した資料に、鎌倉中期成立の『長谷寺靈驗記』（内題「長谷寺驗記」、以下、驗記とする）が現存する。驗記の成立について永井義憲氏は、正治二年（一二〇〇）以降、建保七年（一二一八）以前の成立とし、さらにさかのぼって承元三年（一二〇九）以前の成立であろうと推測される⁽⁹⁾。この長谷寺に伝わる驗記に、唐土や新羅にまで驗^{しるし}を及ぼすという靈驗譚は五話掲載されており⁽¹⁰⁾、その第六話が「唐朝ノ馬頭夫人得ニ端正ニ成ニ守護神ニ事」である。前掲の①②と同じ冒頭部分を比較すると、③の傍線部分は、①②にみられない本文である。

③ 第六陽成天皇御宇ニ大唐国ニ王有キ（ニ）、僖宗皇帝ト云。千人ノ后有リ。其第四ノ后ヲハ馬頭夫人ト名ク。是文宗皇帝孫玄成太子ノ御娘也。宿習ニヤ有ケム、顔長クシテ鼻ノ姿頗ル馬ニ似リ。ケレトモ心ニ情ケ深クシテ由シ有ル様ニ云ニ付テ、優ニ思ヒケルニヤ。帝王忒心無ク時メカセ玉テ、サル御カタワ有トハ知食ナカラ、カタヘノ后達ヨリ猶マチカクシテナサレケルヲ、数多ノ御方々一ツ心ニ嫉ミアヒ玉テ、何ニモコノ后ノカタワヲ帝ニ見セ奉テ、御中ヲサケ申サムト巧ミケル程ニ、一人ノ后御計事トシテ帝王ヲ始テ千人ノ后集リテ七日七夜花見ノ宴ヲ始テ昼ル彼ノ夫人ノ顔ヲ見セ奉ムト云合セケレハ、九百余人ノ后皆一同シテ此由ヲ奉聞シケリ。

（驗記・三〇）

このように驗記の本文は、広本にない本文がみられ、後半部には長谷寺の山内が広大な清浄の法地で功德成就の三千世界であること等が増補されている。特に源氏物語との関わりを考察する上で注意したいことは、馬頭夫人

の顔が、広本「面貌」「彼ノ貌」（前掲①）と略本「此面」「かたち」（前掲②）に対して、験記は「カタワ」と本文の異同がみられることである。広本と験記の同所を見比べると、

④ 医師ニ申テ曰。御貌ハ生得也。治スルニ不可ト申ス。

（広本・一〇一）

⑤ 医師申ケルハ御生レ付ノ御カタハヲハ薬ノ及フヘキニ非ス。

（験記・三二）

「御貌」は「御カタハ」となる。これは誤写とみるよりも、験記の編者による意図的な書き替えではないだろうか⁽¹¹⁾。また馬頭夫人説話の結語に、

⑥ 源氏ノ物語ニ唐シノ后、十種ノ宝物ヲ当寺ニ送ルト書キタルハ、此事ヲ思ハエルナルベシ。実ニ此尊ノ閻浮ノ中ニ簡ハレテ、生付ノ叶難キ願ヲモ満玉事、尊哉。

（験記・三四）

と、「源氏ノ物語」とあることから、源氏物語の影響が窺える⁽¹²⁾。

この他に馬頭夫人説話は、長谷寺蔵天正十五年（一五八七）写本『和州長谷寺観音験記』と、承応二年（一六五三）の刊記を有する『長谷寺観音験記』と、承応二年と同じ版木を用いた「承応二二年（四年の意）孟春吉日和州長谷寺関東屋弥作開版」が現存する。これらは先にあげた験記の本文と小異はあるがほぼ同文で、後半に馬頭夫人が長谷寺の守護神となった経緯が増補されている。承応四年の版本の結語は、

⑦ 源氏ノ物語ニ唐シノ后、十種ノ宝物ヲ当寺ニ送ルト書キタルト、此事ヲ思侍ルナルヘシ。誠ニ此尊ノ閻浮ノ中ニ簡ハレ生付ノ御片輪ヲ直サセ給事尊哉。

（一七才）

と、驗記の「生付^{うまれつき}ノ叶難^{かたがわ}キ願^{ねが}ヲモ満玉事、尊哉」(前掲⑥)は、「生付^{うまれつき}ノ御片輪^{かたわ}ヲ直サセ給事尊哉」となる。このように源氏物語から凡そ二百年後に編纂された驗記は、長谷観音の靈驗譚の信憑性を高める為に、源氏物語を利用した書き替えのあることを認識しておきたい。

したがって、略本は広本と比べると訂正や省略がみられ、驗記は源氏物語の影響が見られることから、玉鬘の巻と馬頭夫人説話の関わりについて考察する為に用いるのは、散佚書の流記の馬頭夫人説話を引用する原中最秘抄の広本の本文が適切と考える。

二 原中最秘抄が引く馬頭夫人説話と玉鬘巻の関わり

原中最秘抄は、

一 仏ノ御中ニハツセナン日ノ本ニアラタナルシアラハシ給モロコシニモ聞エアナリ長谷寺和州高市郡二建立元正天皇御時養老七年道明法師造之同供養之事聖武天皇御時天平八年導師行基菩薩水鏡見之長谷寺流記云
―前掲第一節①の本文に続く―

と、一つ書に玉鬘の巻を引用し、本文の註として流記の馬頭夫人説話をあげる。四辻善成著の源氏物語の注釈書『河海抄』(二三六二から六八年成立)は馬頭夫人説話の概略を載せ、その次に、

又吉備大臣入唐時長谷寺観音住吉明神に起請して野馬台を読みける靈瑞あるよし江談にみえたり。

(河海抄・三八六⁽¹³⁾)

吉備真備は唐において野馬台詩の解説を命じられた時、長谷寺に祈ると読むことができたという話が『江談抄』にみえると紹介する。以下『紹巴抄』(一五六五年成立)、『孟津抄』(一五七五年成立)、『湖月抄』(一六七三年成立)も、馬頭夫人説話と吉備真備の話を紹介することから、唐土にまで評判が高い長谷観音の靈験の一つとして、馬頭夫人説話を紹介するようにみえる。しかしながら、原中最秘抄の筆者が、流記の馬頭夫人説話をあげるのは、玉鬘の巻の全体の構成に関わることを認定したのではないだろうか。

まず長谷観音は、馬頭夫人説話と玉鬘巻において主人公開運の欠くことのできない重要な要素であることを確認しておきたい。そして考察の重要な糸口となると思われるのが、馬頭夫人の馬のような醜貌と、玉鬘の「かたは」の噂である。大切に育てた姫君の疵になる噂を、乳母みずからが立てるという作者の意図に、注意を払う必要があると考ええる。次の1から4は、両話が共通すると思われる箇所である。

1、馬頭夫人の醜貌と玉鬘の「かたは」

馬頭夫人は、「顔長シテ面馬ニ似タリ。仍馬頭ト名ツク。」(前掲第一節①)と馬のような長い顔のために、馬頭夫人と呼ばれる。第一節の④⑤で考察したように、馬頭夫人の「御貌」(広本)が「御カタハ」にかわる例や、末摘花の巻の主人公は、「あなかたは」と見ゆるものは御鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ」(末摘花・二七〇)とあるように、極端に見苦しい様子は、「かたは」という認識のあったことがわかる。

玉鬘は「いとうつくしう、ただ今から気高きよらなる御さま」(玉鬘・二八三)と、気品のある美しい姫君であるが、評判を聞いた田舎人からの求婚を固辞する方便として、乳母がはなはだしい不具があると言いふらすこ

とから、「故少弐の孫^{むまゝ}は、かたはなむあんなる。あたらしものを」（玉鬘・二八六）と噂が立つ。ところが大夫監は「いみじきかたはありとも、我は見隠して持たらむ」（玉鬘・二八七）と、玉鬘との結婚話を強引に進めてくるのである。このような展開は、玉鬘と乳母一家の追い詰められた状況を際立たせるといえるが、大切な姫君をわざわざ「かたは」と貶める必然性はないといえよう。しかし、玉鬘に「かたは」の噂が立つことは、馬頭夫人の極端な醜貌と同じく、どちらも「かたは」の要素を持つといえるのである。

2、長谷観音に祈請する

馬頭夫人は馬のような面貌を嘆いて医師を召すが、生まれつきは治すことができないといわれ、次に仙人を召すと、

我昔、宝志和尚ト云シ時、他心智ヲ得、飛行自在ナリキ。其時世界ヲカケリ見シニ、大日本国長谷寺観音ハ極位ノ大薩埵也。次ニ凡^{ホシユ}衆ニ同シテ利生ヲホトコシ給。彼国ハ是ヨリ東方ナリ。タトヒ行程ヲ隔ツト云トモ、彼仏ヲ向奉祈請マシマサハ、定感応タチ処ニ侍ナント申ニ、仍骨髓ヲクタクキ礼拝ライタシ数反名ヲ唱エテイノリ給ニ、――3に続く――

（広本・一〇二）

仙人は昔「宝志和尚⁽¹⁴⁾」であつた時に世界を見た中で、東方にある大日本の長谷寺の観音は極位の大菩薩で、すべての衆生に利生を施すと教える。「行程ヲ隔ツト云トモ」は、たとえ道のりが遠くても、長谷観音に祈れば必ず加護を施してくださるという意味である。乳母子豊後の介は、

「ましてわが国のうちにこそ、遠き国の境とても、年経たまひつれば、若君をばまして恵みたまひてむ」とて出だしたてまつる。

（玉鬘・二九七）

ましてや姫君は、同じ日本の国の中に、遠い筑紫の国とはいっても、長年お住まいになったのだから姫君をお助け下さるに違いないと、玉鬘を初瀬に向かわせるのである。「タトヒ行程カウテイヲ隔ツト云トモ」と「遠き国の境とても」は、長谷観音と遠く離れていてもという意味が一致し、馬頭夫人と玉鬘は、人に勧められて、唐土にまで評判の長谷観音の加護を請うことが共通する。

3、長谷観音の利益をもたらす老僧と右近との邂逅

馬頭夫人が長谷観音の方向に向かって祈ると、

七日ヲフル曉夢ニウツ、トモナク、東方ヨリアヤシキ老僧、香ノ袈裟ヲ着タルカ紫雲ニ乗テ、手ニ水瓶ヲ持来近付テ顔ニソ、クト思ニ、心歎喜シテ已ニ利生ニ預ヌト思フ。

(広本・一〇三)

七日目の曉の夢に、不思議な老僧が紫雲に乗って現れる。玉鬘は、都から出発して四日目に椿市の宿において、玉鬘の行方を捜していた亡き夕顔の乳母子右近と邂逅する。

皆おどろきて、「夢の心地もするかな。いとつらく、言はむかたなく思ひきこゆる人に、対面しぬべきことよ」とて、この隔てに寄り来たり。

(玉鬘・三〇一)

目の前に現れた右近を、夢を見ているような心地と驚く。老僧は夢の中に、右近は現実に現れると状況は違うが、主人公に利益をもたらす人物が、夢のように現れることが一致する。

4、馬頭夫人と玉鬘の変貌

馬頭夫人のもとに、不思議な老僧が現れ、御貌に水瓶の香水を注ぐと、

心歎喜シテ已ニ利生ニ預ヌト思フ。則鏡ヲ取テ形ヲ見レハ、本ノ容兒ニアラス。端嚴美麗ニナレリ。

(広本・一〇三)

馬頭夫人の心は歎喜し、観音の利益を預かったと思うと、すぐに鏡を取って見れば、容貌は端嚴美麗になり、そして皇帝の寵愛がより一層に増すという大団円である。

玉鬘は生まれついた美女で、馬頭夫人のように容貌が変わることはない。しかし、源氏物語の中で、玉鬘ほど劇的な環境の変化に翻弄された姫君は他にみられない。高貴な血筋に生まれながら、幼い時に乳母と共に筑紫に下り、成人した後に帰京が果たせたとはいっても、九条あたりの市女商人の住む場所での心細い暮らしを余儀なく強いられるのである。六条院に引き取る際に源氏が、「さやうに沈みて生い出でたらむ人のありさまうしろめたくて」(玉鬘・三一五)と心配するように、落ちぶれた境遇で育った姫君である。その姫君が右近によつて見いだされ源氏に知らされると、格別な装束を整え、お付きの女房とともに御車を三台したて、源氏の娘として六条院に迎えらるるのである。これはまさしく長谷観音の靈験により、薄幸の姫君が端嚴美麗に変貌したといえるであらう。

このように馬頭夫人説話と玉鬘の巻は、長谷観音の利益により開運するだけでなく、1馬頭夫人と玉鬘の「かたは」の要素、2長谷観音に祈請、3長谷観音の利益をもたらす人物との邂逅、4馬頭夫人と玉鬘の変貌の共通点がみられる。そして、広本だけにみられる本文の「行程ヲ隔ツト云トモ」(前掲2)と、「夢ニウツトモナク」(前掲3)と類似する表現が見られることから、玉鬘の巻に馬頭夫人説話の要素を用いたことが考えられ

るのである。

三 金剛醜女説話と玉鬘の造型について

しかし、玉鬘の巻は馬頭夫人説話の引用だけでは捉えきれない部分がみられる。馬頭夫人説話の原拠は金剛醜女説話である⁽¹⁵⁾。この金剛醜女説話については第一章において末摘花との関わりを論じたが、玉鬘巻も関わりが考えられることから両者を比較したい。まず、序論二「金剛醜女説話の資料」に挙げた金剛醜女説話の原拠の仏典と類書1から5のなかで、訳出年代が最も古く、本文の内容が最も豊かで、大聖武と呼ばれる伝聖武天皇宸筆「東大寺本賢愚経残巻」(波斯匿王女金剛品第八)が現存する1賢愚経と、玉鬘の巻との関わりを想定して考察をしたい。

1、主人公の出自

金剛醜女は「爾時、波斯匿王最大夫人、名曰摩利^ヲ。時生^ニ女^ヲ」(賢愚経・三五七)とあるように、波斯匿王と摩利夫人の娘である。玉鬘は「父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり」(玉鬘・二八五)と、父方の血筋の高さが共通する。

2、外の人に見せずに守護されて育つ

金剛醜女は、

便勅ニ宮内ニ。勲レ意守護、勿レ令ニ外人得レ見レ之也。所以者何、此女雖ニ醜形不レ似レ人、然是末利夫人所レ生。
此雖ニ醜惡ニ、当ニ密遣レ人而護ニ養之ニ。
(賢愚経・三五七)

と、王命により、人離れをした醜形の為に「外人」に見せないよう密かに護養される。「護養」の「護」は保護の意味で、「養」は育てるの意味である。玉鬘の場合も、

その人の御子とは、館の人にも知らせず、ただ孫のかしづくべきゆゑあるとぞ言ひなしければ、人に見せず、限りなくかしづききこゆるほどに、
(玉鬘・二八五)

と育てられる。「館の人」と「人に見せず」の「人」は、賢愚経の「外人」に対応し、両女は人に見せずに、大切に養い育てられることが共通する。

3、両親と別れて適齢期をむかえる

金剛醜女は、醜惡であるけれども、密かに人を遣わし養護される(前掲2)。「人を遣わし」は、父王が人を派遣する意味で、金剛醜女は親から離れて養護されると捉えることができる。玉鬘も乳母と共に筑紫に赴くことから、親と別れて乳母に育てられることが共通する。また金剛醜女と玉鬘は、親と別れた後に「女年転大、任当レ嫁^{グベキ}処^ニ」(賢愚経・三五七)と結婚の適齢期を迎え、玉鬘も「この君、ねびととのひたまふまに」(玉鬘・二八五)と適齢期を迎えることが共通する。

4、金剛醜女の醜貌と、玉鬘の「かたは」

第二節1で考察したように、末摘花は「あな^ノかたはと見ゆるものは御鼻なりけり」と、極端な醜貌は不具という認識のあることから、金剛醜女の「此女^ノ雖^モ醜形不^レ似^レ人^ニ」（前掲本節2）という人離れた醜貌も「かたは」といえる。玉鬘は生まれついた美女であるが、求婚を固辞する方便に乳母が「容貌^{かたち}などはさてもありぬべけれど、いみじきかたはのあれば」（前掲第二節1）があると言いふから、不具の要素が共通するといえる。

5、前世の罪の自覚と、仏を念ず

馬頭夫人説話に前世の罪を嘆く場面は見られない。しかし金剛醜女は「彼女^ノ心悩^ミ、自責^ノ罪咎^ヲ。而作^{サク}是言^ヲ。我種^{ハエ}ニ何罪^ノヲ、為^ニ夫所^ノ憎、恒見^{ニルヤ}ニ幽閉^ニ」（賢愚経・三五七）と、心悩み、自らの罪咎を責めて、私はどのような罪を植えて、夫の為に憎まれ、常に幽閉されるのか、と言う。そして「心遙^ヲ礼^{ニシ}ニ世尊^ヲ、唯、願^{クハレ}垂^レ愍^ヲ」（賢愚経・三五七）と、仏に救いを願うのである。この罪咎が前世の行いによるものであることは、波斯匿王が、

時波斯匿王^ニ、跪^{ひざまツキ}白^{シテ}仏言^{ニク}。不審^{ナリ}、此女^ノハ、宿^{さきのよニ}殖^ユニ何福^ヲ、乃生^{チルヤ}ニ豪貴富樂之家^ニ。復造^{タリ}ニ何咎^ヲ、受^ケニ醜陋^ノ形^ヲ、皮毛^{シク}龜強^{キヤ}、劇^{シク}如^{キヤ}ニ畜生^ニ。

（賢愚経・三五八）

娘は前世において、どのような福をうえ、豪貴富樂の家に生まれることができたのか、また何の咎を造り醜陋を受け畜生のようなものであるのかと、仏に娘の因縁を聞く言葉から解る。玉鬘は、長谷寺に徒歩で向かう辛い道中に、

いかなる罪深き身にて、かかる世にさすらふらむ、わが親、世になくなりたまへりとも、われをあはれとおぼさば、おはすらむ所に誘ひたまへ、もし世におはせば、御顔見せたまへと、仏を念じつつ、ありけむさまをだにおぼえねば

（玉鬘・二九七）

自らの前世の罪を責めながら仏を念じる。金剛醜女の「我種^{ハエ}何罪^ノ」と玉鬘の「いかなる罪深き身」は、前世にどのような罪を犯したのかと問うことが共通し、また自らの前世の罪を責めて仏を念じることが一致する。

6、金剛醜女の変貌と玉鬘のすぐれた容姿

金剛醜女は、仏の利益で美しく変貌すると、「王見^ハ婦端政^{ナルコトニレテ}殊特^{キラ}少^{ナラフモ}双^ニ」(賢愚経・三五八)と婦人の姿が立派なことは、とりわけて優れて並ぶものが少ないとある。玉鬘の姿をみた右近は、

見たてまつるに、命のぶる御ありさまどもを、またさるたぐひおはしましなむやとなむ思ひはべるに、いづくか劣りたまはむ。ものは限りあるものなれば、すぐれたまへりとて、頂きを離れたる光やおはする。

(玉鬘・三〇六)

と、命が延びる源氏や紫の上のお二人の美しい様子を、他に並ぶものはないだろうと思っていたが、玉鬘の美しさは劣っていない、仏の頭を離れるような光はないけれども、この上ない誉めようである。「双^{ナラフモノ}」と「たぐひ」は、「相ならぶもの」という意味で、金剛醜女が仏の利益で変貌したあとの、特別にすぐれ並ぶものが少ないという美しさの表現が一致する。

7、父親に立派な車で迎えられる

父王は、娘の金剛醜女が端厳美麗に変貌したことを聞くと、

審如^{ニク}是者^ノ、速往^{ニテヒキキレ}将来^ニ、即時^{ただちに}厳車^{ニテ}、迎^ヘ女入^{ヲレヨニ}宮^ニ。

(賢愚経・三五八)

「審^{つまび}らかにそうならば、速やかに往き、引き連れて来よ。ただちに巖車にて宮に迎え入れよ」と、娘を宮殿に迎え入れよと命ずるのである。玉鬘の場合も源氏は、「容貌などは、かの昔の夕顔と劣らじや」（玉鬘・三二三）と、玉鬘の容貌について確認をする。右近から「こよなうこそ生ひまさりて見えたまひしか」（玉鬘・三二三）と母夕顔よりも格段に美しく成人したことを聞くと、「さらばかの人、このわたりにわたいたてまつらむ」（玉鬘・三三四）と自分の娘として引き取るのである。六条院に入るときは、「御車三つばかりして、人の姿どもなど、右近あれば、田舎びずしたてたり」（玉鬘・三三〇）と、御車を三台ほどで、お供の女房の身なりなど、右近がついているので田舎びることのないよう、立派に仕立てて六条院に入るのである。金剛醜女の父王と、玉鬘の養父の源氏は、娘の容貌の美しいことを確認すると、立派な車をしたてて娘を自分の住む宮殿に迎え入れることが共通する。

以上の考察の1・2・3・5・7の共通点は、馬頭夫人説話にみられない要素である。このように馬頭夫人説話の原拠である賢愚経の金剛醜女の要素が、玉鬘の物語に組み込まれていることがわかる。

おわりに

こうした考察から、玉鬘の造型をめぐる発想や表現に、馬頭夫人説話とその原拠の金剛醜女説話の構成や要素を用いたことがわかる。その場合の典拠となった資料を推察すると、馬頭夫人説話、賢愚経、賢愚経を原拠とする金剛醜女説話があげられる。したがって原中最秘抄が、一つ書きに玉鬘の巻の「仏ノ御中ニハツセナン日ノ本ニアラタナルシルシアラハシ給モロコシニモ聞エアナリ」の本文を引用し、その註に、馬頭夫人説話の本文を掲

載するのは、玉鬘の巻における馬頭夫人説話との関わりを示す指摘といえる。また第一節で考察したように、現存する馬頭夫人説話の中で、験記の本文は源氏物語の影響による書き替えがみられ、また略本の本文は、広本の大幅な省略が見られることから、原中最秘抄が引く馬頭夫人説話は、散佚書の流記の馬頭夫人説話の本文を知ることにおいて、貴重な資料といえるのである。

(1) 『梁塵秘抄』の三一三番歌は、新聞進一・外村南都子両氏校注『完訳日本の古典 梁塵秘抄』(小学館、昭和六十三年(一九八八))による。

(2) 馬頭夫人(めづぶにん)の振り仮名は、京都女子大学蔵『長谷寺観音験記』(題箋『長谷寺観世音霊験記』和州長谷住閑東屋弥作開版、承応四年(一六五五))による。本文の引用は、その丁数を記す。

(3) 池上洵一氏「長谷寺対外霊験譚の構造―長谷寺「唐朝馬頭夫人」説話と勝尾寺「百済国王后」説話―」(『国文論叢』36号、特集長谷寺研究、神戸大学文学部国語国文学会、平成十八年(二〇〇六)七月)は、「馬頭夫人の話が直接的に踏まえた典拠が何であったかは決定し難いが、金剛醜女の話の型を踏まえて成り立っていることに疑問の余地はない」と指摘される。

(4) 野口博久氏「『長谷寺験記』と『流記』」(西尾光一教授定年記念論集『論纂 説話と説話文学』笠間叢書125、昭和五十四年(一九七九)所収)。

(5) 永井義憲氏「長谷寺流記と縁起・験記」(『大妻国文』第22号、平成三年(一九九一)三月)。

(6) 『原中最秘抄』の成立については、『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書』(文学篇第十九卷、臨川書店、平成十二年(二〇〇〇))の解題著者、館蔵史料編集会代表虎尾俊哉氏による。

(7) 田坂憲二氏「『原中最秘抄』の完本と略本」(『文芸と思想』51、昭和六十二年(一九八七)二月)。

(8) 略本の成立年については、阿部秋生氏「原中最秘抄」の解説(蓬左文庫本『奥入 原中最秘抄』、日本古典文学影印叢刊19、貴重本刊行会、昭和六十年(一九八五))による。

(9) 永井義憲氏解説『長谷寺験記』(新典社善本叢書2、昭和五十三年(一九七八)による。

(10) 前掲注9に同じ。「吉備大臣於大唐読野馬台帰朝事第一」・「唐朝馬頭夫人得端正成守護神事第六」・「唐大梁大祖取国位達立今長谷寺事第九」・「新羅国照明王后遁王難送宝物事第十二」・「唐堯恵禅師依冥告来当寺往生事第十三」の五話が見られる。

(11) 源氏物語の玉鬘巻は、長谷観音の利益により「かたは」とされた主人公が開運することから、験記の作者は、長谷寺に伝わる靈験譚の信憑性を高めるために、「御貌」を「御カタワ」と書き替えた可能性が考えられる。

(12) 池上洵一氏(前掲注3同じ)は「実は、唐の后が十種の宝物を送ったことなど、『源氏』のどこにも書かれていない。――中略――『験記』はさりげなく言葉を補って、『源氏』を話の信憑性保証のために機能させている」と指摘される。
(13) 本文は、玉上琢彌編、山本利達・石田穰二両氏校訂『紫明抄・河海抄』(角川書店、昭和四十三年(一九六八)による。

(14) 毛利久氏「宝誌和尚像」(『古文化』第一集、昭和二十三年(一九四八)十月)は、「宝誌和尚は中国六朝時代の実在の僧で、野馬台詩の作者としても我が国人に可成り知られてゐた」と紹介し、宝誌和尚が観音の変化の身と信じられていたと記される。

(15) 前掲注3に同じ。

第三章 源氏物語における歌語「玉かづら」の意味

―末摘花と玉鬘の造型を手がかりとして―

はじめに

源氏物語の登場人物の中で、類い稀な醜女として描かれる常陸宮の姫君末摘花の唯一の外見的美質は、九尺余りの美しい髪である。その髪を鬘に仕立て、旅立つ乳母子侍従へ餞別の品として贈るのである。その別れの場面で末摘花は、

絶ゆまじき筋を頼みし玉かづら思ひのほかにかけ離れぬる

(蓬生・七〇)

あなたとは絶えるはずのない間柄と頼りにしていましたのに、思いもかけず離れてしまうと、乳母子に見捨てられる心細さを歌う。姫君の歌を受けて侍従は、

玉かづら絶えてもやまじ行く道の手向の神もかけて誓はむ

(蓬生・七〇)

姫君とのご縁は決して切れることはありません、行く道々の手向の神にもかけてお誓いしますと返す。人の長い髪は貴重な上に、出自からしても最高の鬘で、「玉かづら」は末摘花の「鬘」の美称として用いている。

源氏物語にはもう一人、「玉かづら」の歌語を用いる姫君がある。亡き夕顔の娘玉鬘である。玉鬘は「いとう

つくしう、ただ今から気高くきよらなる御様」(玉鬘・二八三)と、幼い頃から気品があつて美しく、「この君、ねびととのひたまふままに、母君よりもまさりてきよらに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり」(玉鬘・二八五)と、母夕顔よりも優れて美しく成長する。その姫君と初めて対面した源氏が、

恋わたる身はそれなれど玉かづらいかなる筋を尋ね来つらむ

(玉鬘・三二三)

と、夕顔を慕い続けてきた我が身はそのままだけれども、娘はどのような縁をたどつて、私のもとに尋ねてきたのだろうと、夕顔の蔓草の筋として詠ずる。このように歌語「玉かづら」は、源氏物語の中で末摘花と玉鬘の二人の姫君だけに見られる。この三例について、紫藤誠也氏は、頭髮の飾りの「鬘」と、夕顔の蔓草の筋の連なりから草(植物)の「蔓」という解釈を示され⁽¹⁾、また清水婦久子氏は「つる草が細く長く繋がって生えるごとく、会えない人を忘れず、長き思いを絶やす心を連想させる歌枕だったのである」と、和歌の伝統を踏まえた深い意味があると指摘される⁽²⁾。

しかし、末摘花と玉鬘に用いる歌語「玉かづら」の「玉」については、美しく優れた事物に付ける美称とするだけで、具体的な考察は見られない。その中で武田早苗氏は、玉鬘の「玉」について、「この姫君の場合、単なる比喻や美称にとどまらず、彼女の並はずれた美質を称える表現として、作者により、意図的に多用されたものと解することができよう⁽³⁾」と、玉鬘の並外れた美質を称える表現であると指摘される。では、どのような意図により、玉鬘に並外れた美質を備え、「玉」を多用するのか、そして末摘花にも「玉かづら」を用いるのであろうか、単なる比喻や美称ではない意味が含まれているように窺える。第一章では、末摘花の造型に金剛醜女説話との関わりを述べ、第二章では、玉鬘の造型について、馬頭夫人説話とその原拠の金剛醜女説話との関わりを論じた。これらの考察により、末摘花・玉鬘の造型は、金剛醜女説話と関わるものが共通するといえる。美醜の違いの大

さい二人の主人公に共通点があるとは見えにくいだが、その証左に「玉かづら」の語があるといえる。本稿は、源氏物語の「玉かづら」の意味について、主人公造型の鍵となる金剛醜女説話と、その流れをくむ金剛醜女と勝鬘夫人を同一人物とする仏教説話との関わりから考察するものである。

一 末摘花・蓬生巻と玉鬘巻の主人公について

末摘花と玉鬘の造型について、金剛醜女説話の関わりという点が共通することは先に述べたが、それぞれ個々に論じていることから、まず、末摘花・蓬生巻と玉鬘巻における二人の共通点について確認しておきたいと思う。

1 巻頭の類似

末摘花巻は、

思へどもなほ飽かざりし夕顔の露におくれしこちを、年月経れど、おぼし忘れず、
(末摘花・二四五)

と、どんなに思っても飽きることのない愛おしい人が、夕顔におく露の消えるように死んでしまった悲しみを忘れられないという夕顔を追慕する源氏の思いではじまる。玉鬘巻は、

年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を、つゆ忘れたまはず、
(玉鬘・二八一)

と夕顔巻を受けるとともに、末摘花巻を思い合わせることはすでに指摘されるように⁽⁴⁾、両巻の書き出しは、

源氏の亡くなった恋人夕顔の面影を追い求める内容で始まり、末摘花や玉鬘の物語に繋がるのが文章に現れている。

2 主人公の父方の血筋の高さ

次に主人公の出自をみると、末摘花は「故常陸の親王の、末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御女、心細くて残りゐたるを」（末摘花・二四六）と皇族の血筋であることがわかる。玉鬘も「父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり」（玉鬘・二八五）と、父の内大臣（頭の中将）の母は、桐壺帝と同腹の大宮であるので、父の母方は皇族の血を引くことが共通する。

3 人と親しまず身を隠す

末摘花は、両親が亡くなり宮邸にさびしく暮らしている。源氏の乳母子大輔の命婦は、

心ばへ容貌^{かたち}など、深きかたはえ知りはべらず。かいひそめ、人疎うもてなしたまへば、さべき宵など、物越しにてぞ、かたらひはべる。
(末摘花・二四六)

と、姫君は「かいひそめ」とひっそりと身を隠し、「人疎うもてなし」と人と親しまず、会う時も物を隔てて話をかわすので、気立てや顔立ちなど解らないと話す。末摘花の年齢の記述はないが、命婦の手引きにより源氏が通うことから適齢期といえる。玉鬘は母夕顔の死後、乳母の夫が太宰の少弐として筑紫へ下るのに伴われると、

その人の御子とは、館^{たち}の人にも知らせず、ただ「孫^{むまご}のかしづくべきゆゑある」とぞ言ひなしければ、人に

見せず、限りなくかしづききこゆるほどに　―中略―　この君、ねびととのひたまふままに、

(玉鬘・二八五)

姫君をどなたのお子であるか知らせず、誰にも見せずに育てるうちに、姫君は立派に成人する。二人の姫君は、親と死に別れた後は、頼りになる後見がなく、乳母や乳母子に守られながら、適齢期になっても身を隠し、人と親しまない暮らし方は同じといえる。

4 求婚

末摘花の噂を聞いた源氏と、何事も競いあう頭の中将の二人は、月の美しい夜に末摘花の琴の音を聞くと、昔話にあるような荒れた邸に、思いがけない美人を見出したような空想をして心をときめかす。

そののち、こなたかなたより、文などやりたまふべし。いづれも返りこと見えず、

(末摘花・二五三)

と、恋文をおくるが姫君の返事はない。玉鬘の場合も、

聞きつつ、好いたる田舎人ども、心かけ、消息がると多かり。ゆゆしくめざましくおぼゆれば、誰も誰も聞き入れず。

(玉鬘・二八六)

と、姫君の評判を聞いた好色な田舎人が思いをかけ、恋文を届けるが玉鬘側は承諾しない。二人の姫君は年頃になると、美しいと推し量った好色な男性たちが競って恋文を届け、返事をしないことも共通する。

5 かたは

末摘花は「あなかたはと見ゆるものは御鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先のかたすこし垂りて色づきたること、ことのほかうたてあり」（末摘花・二七〇）と、極端な醜貌は「かたは」という認識のあったことがわかる。玉鬘には、評判を聞いた田舎人からの求婚を固辞する方便として、乳母が「いみじきかたはのあれば」（玉鬘・二八六）と言いふらすことから、「故少弐の孫^{むまご}は、かたはなむあんなる。あたらしものを」（玉鬘・二八六）と世間に噂が立つ。それにもかかわらず大夫監は、「いみじきかたはありとも、我は見隠して持たらむ」（玉鬘・二八七）と、玉鬘との結婚話を強引に進めてくる。このように二人の姫君は、「かたは」の語が共通する。

6 前世の罪の自覚と、仏菩薩に救いを求める

源氏を待ち続ける末摘花は、

御心のうちに、さりとも、あり経ても、おぼし出づるついであらじやは。あはれに心深き契りをしたまひしに、わが身は憂くて、かく忘られたるにこそあれ、風のつてにても、わがかくいみじきありさまを聞きつきたまはば、かならずとぶらひ出でたまひてむと、年ごろ思しければ、おほかたの御家居も、ありしよりけにあさましかれど、わが心もて、はかなき御調度どもなども取り失はせたまはず、心強く同じさまにて念じ過ぎしたまふなりけり。

（蓬生・六五）

「わが身は憂くて⁽⁵⁾」と果報が悪いので、源氏に忘れられたとわが身を責める。しかし、こんなに困っている様子を聞きになつたら必ず訪れて下さるとに違いないと、源氏を心強く信じて待つのである。

玉鬘は、乳母子の勧めにより初瀬に向かうが、辛い道中に、

いかなる罪深き身にて、かかる世にさすらふらむ、わが親、世になくなりたまへりとも、われをあはれとおぼさば、おはすらむ所に誘ひたまへ、もし世におはせば、御顔見せたまへと、仏を念じつつ、ありけむさまをだにおぼえねば

(玉鬘・二九七)

と、自らの前世の罪を責めて観音菩薩を念じる。二人の姫君は、我が身の前世の罪を責めながら、末摘花は源氏を信じ、玉鬘は長谷観音を信じて救いを求めることが共通する。しかし、衆生の源氏と長谷観音菩薩を対応させることは、大きな隔たりがあるといえよう。ところが、源氏物語の中で蓬生巻に、源氏を「神仏」(蓬生・五六)や「仏菩薩」に喩える例がみられるのである。末摘花の兄禪師は、源氏が営んだ法会の帰りに宮邸を訪れて、

権大納言殿の御八講に参りてはべりつるなり。いとかしこう、生ける浄土の飾りに劣らず、いかめしうおもしろきことどもの限りをなむしたまひつる。仏菩薩の変化の身にこそものしたまふめれ。(蓬生、六六)

と、極楽浄土のような美しい飾りの立派な御八講を行われる源氏は、仏菩薩の化身でいらっしゃるのであろうと、末摘花に語るのである。兄禪師の登場は、源氏を仏菩薩にするための役割として必要であるといえよう。従って末摘花は「仏菩薩の変化の身」の如くの源氏を、玉鬘は「仏を念じつつ」と、長谷観音に救いを求めることが一致する。

7 主人公の変貌

末摘花は、極端な醜貌の姫君として登場するが、蓬生巻では一転して「かの花散里も、あざやかに今めかしうなどは花やぎたまはぬ所にて、御目移しこよなからぬに、咎多う隠れにけり」（蓬生・七九）と、華やかさのない花散里と大した違いがなく、欠点の多くは隠れてしまったとある。

玉鬘は生まれついた美女であるが、幼き時に乳母と共に筑紫に下り、後に帰京が果たせたとはいっても、九条あたりの市女商人の住む場所での心細い暮らしを余儀なく強いられるのである。六条院に引き取る際に源氏が、「さやうに沈みて生ひ出でたらむ人のありさまうしろめたくて」（玉鬘・三一五）と心配するように、落ちぶれた境遇で育った姫君である。その姫君が右近により見いだされて、源氏に知らされると、格別な装束を整え、源氏の娘として六条院に迎えられるのである。これはまさしく長谷観音の靈験により、薄幸の姫君が端嚴美麗に変貌したといえるであろう。二人の姫君は変貌することが共通する。

8 源氏の邸に迎えられる

源氏は、父常陸宮の意志を守りながら、自分を待ち続ける末摘花の誠実な心を知ると、何年も訪れなかったことを不憫に思い、そして「二年ばかりこの古宮にながめたまひて、東の院といふ所になむ、のちはわたしたてまつりたまひける」（蓬生・八二）と、かねてから造らせていた二条の東院に迎えるのである。玉鬘の場合も、十数年にわたり捜し求めていた夕顔の忘れ形見を「こよなうこそ生ひまさりて見えたまひしか」（玉鬘・三二三）と、母夕顔よりも格段に美しく成人したことを、源氏は右近から聞くと、「さらばかの人、このわたりにわたいたてまつらむ」（玉鬘・三一四）と六条院に迎えるのである。二人の姫君は辛苦を重ねた後に、源氏に迎えられることが共通する。

このように末摘花・蓬生巻と玉鬘巻は、歌語「玉かづら」だけでなく、1「巻頭の類似」、2「主人公の父方の血筋の高さ」、3「人と親しまずに身を隠す暮らし方」、4「求婚を聞き入れず」、5「かたは」、6「前世の

罪の自覚と、仏菩薩に救いを求める」、7「主人公の変貌」、8「源氏に迎えられる」等の要素が共通する。

二『賢愚因縁経』巻第二「波斯匿王女金剛品第八」について

末摘花・蓬生巻と玉鬘巻の構成や主人公の要素に共通点が見られるということは、末摘花と玉鬘が造型された根底に、作者は同じ資料を用いたことが考えられる。そこで考察を進めるにあたり、重要な糸口になると思われるのは、第一章と第二章において主人公との関わりを論じた金剛醜女説話である。あらためて二人の共通点と、金剛醜女説話との関わりについて再考しておきたい。次の1から7は、金剛醜女説話の原拠である賢愚経と、末摘花と玉鬘の共通点と一致すると思われる箇所である。

1 主人公の登場

賢愚経の巻頭は、

如^ク是^レ我^ノ聞^{キヌ}。一時^ニ仏^ハ在^{マシキ}。舍^ノ衛^ノ国^ニ祇^ノ樹^ノ給^ニ孤^ノ独^ノ園^ニ。爾^ノ時^ニ、波^ノ斯^ノ匿^ノ王^ノ最^ノ大^ノ夫^ノ人^ノ名^ヲ曰^フ摩^ノ利^ト。時^ニ生^ム一^ニ女^ヲ。字^ス波^ノ闍^ト羅^ト。晋^ニ言^フ金^ノ剛^ト。 (賢愚経・三五七)

「このように私は聞いた。ある時、仏は舍衛国の祇樹給孤独園におられた」という言葉で始まり、仏と金剛醜女が登場する。末摘花・玉鬘巻は、源氏の亡き夕顔への追慕と、その源氏の思いから末摘花や玉鬘の物語が始まることを暗示する言葉ではじまる。巻頭にその巻の主人公を登場させるのは常套手段といえるが、源氏と末摘花、

源氏と玉鬘、仏と金剛醜女の関係は、救済者と救済される関係が一致する。

2 主人公の父方の血筋の高さ

金剛醜女は舍衛国の波斯匿王の娘で、末摘花と玉鬘の父方は皇族の血筋（第一節2）であることから、父方の血筋の高さが共通する。

3 人と親しまず身を隠す

波斯匿王は、生まれたばかりの娘の顔を見て、

便^チ勅^スニ宮内^ニ。勲^レ意^ヲ守護^シ、勿^レ令^ニ外人^ニ得^レ見^レ之^ヲ也。所以^ソ者何^ヲ。此女^シ雖^モ醜形^ト不^レ似^レ人^ニ、然^{ドモ}是^レ末利夫^ヲ人所^ノ生^{リム}。此^レ雖^モ醜惡^ト、当^{ベシ}密遣^ニ人而護^ニ養^ヲ之^ヲ。

（賢愚経・三五七）

すぐに宮内に、意を勲ろに守護し、外人に娘を見せてはならないと王命を下す。理由は、人とは思えない「醜い容貌」であるけれども、末利夫人の生んだ娘なので、密かに「人」（乳母）を遣わして護養するべしと命ずるのである。「外人」は宮外の人のことで、文脈から、末摘花の「人疎うもてなし」（第一節3）、玉鬘の「館の^人に^も知らせず」「^人に見せず」の「人」（第一節3）に対応するといえる。末摘花と玉鬘が外の人と親しまず姿を見せない暮らし方は、金剛醜女が外人に姿を見せない状況と同じといえる。

4 結婚の適齢期

金剛醜女は、醜悪である為に密かに養護して育てられる。そして、

当^ニ密遣^レ人而護^コ養^ヲ之^一。女年^{ナリ}転大^{ナリ}。任^ニ当^レ嫁^ル処^一。

(賢愚経・三五七)

と、「年^{うた}転^た大なり。当に嫁ぐべき処に任^{たへ}たり」と嫁ぐ年齢に達する。末摘花は、命婦の手引きにより源氏が通うことから適齢期といえる。玉鬘は、「この君、ねびととのひたまふままに」(第一節3)と、乳母や乳母子に守られながら適齢期を迎える。三人の姫君は、密かに乳母に育てられ適齢期を迎えることが共通する。

5 主人公の「かたは」

金剛醜女の容姿は、

其女面類⁽⁶⁾、極^{メテ}為^リ醜惡^一。肌体^ク麤^ク、猶如^ニ駝皮^ノ。頭髮^ク麤^ク強^ク、猶如^ニ馬尾^ノ。

(賢愚経・三五七)

と、面貌は極めて醜く、肌は粗く駝皮のようで、頭髮は荒く堅く、馬の尾のようである。このような極端な醜さは、第一節5に挙げたように、末摘花の人離れした醜貌と共通し、「かたは」と言ってもよいだろう。玉鬘は決して醜女ではないが乳母により「かたは」(第一節5)と噂されることから、三人は「かたは」の要素が共通する。

6 前世の罪の自覚と、仏菩薩を念ずる

金剛醜女は、自分が醜いことを悩み、

彼女心悩^ミ、自責^ノ罪咎^ヲ。而作^{サク}是言^ヲ。我種^ハ何罪^ヲ、為^ニ夫所^ノ憎^ル、恒見^ニ幽閉^ヲ。

(賢愚経・三五七)

と自らの罪咎を責めて、我は何の罪を植えて、夫の為に憎まれ、常に幽閉されるのかと嘆く。この罪咎が前世の行いによるものであることは、賢愚経の後半に父王が、

此女宿^{ハサキのヨニ}殖^ユ二何福^ヲ一、乃生^{チルヤ}二豪貴富樂之家^ニ一。復造^{タリ}二何咎^ヲ一。受^ケ二醜陋形^ヲ一、皮毛麤強、劇^{シク}如^ク二畜生^ニ一。

（賢愚経・三五八）

と、娘は宿世において、どのような福を殖え、豪貴富樂の家に生まれることができたのか。また何の咎を造り醜陋形を受けて、畜生のものであるのかと、仏に娘の前世の因縁を聞く言葉からも解る。そして金剛醜女は、「心遙礼^ニ世尊^ヲ一、唯、願^{クハレ}垂^レ愍^ヲ」（賢愚経・三五七）と、仏に愍みを垂れよと願うのである。第一節6で考察したように、末摘花は「わが身は憂くて」と、玉鬘も「いかなる罪深き身」と、自らの前世の罪を責めることは、金剛醜女が「自らの罪咎を責む」と同じ情況といえる。そして末摘花は仏菩薩の変化如くの源氏を念じ、玉鬘は長谷観音を念じ、金剛醜女は仏を念じと、三人は仏や菩薩に救いを請うことが共通する。

7 主人公の変貌

賢愚経の大団円は、人離れた醜女が変貌する場面である。

女見^ハ二仏身^ヲ一、益増歡喜^ス。因^{リテ}二歡喜^ニ一故、惡相即滅^ス。身体端嚴、猶如^シ二天女^ニ一。

（賢愚経、三五七）

金剛醜女は、仏身を見ていつそう歡喜し、歡喜に因って惡相がすぐに消え、身体は端嚴に天女のように美しくなるのである。源氏物語は現実にとった内容なので、末摘花の容姿が美しく変貌することはない。しかし、「かの

花散里も、あざやかに今めかしうなどは花やぎたまはぬ所にて、御目移しこよなからぬに、咎多う隠れにけり」(蓬生・七九)と、華やかさのない花散里と大した違いがなく、欠点の多くは隠れてしまったとある。金剛醜女の「悪相即ち滅す」と末摘花の「咎多う隠れにけり」は対応するといえる。

仏の利益で美しく変貌した金剛醜女をみた父王は、「王見^{ハテ}婦端政^{ナルコトニレテ}殊特^{ナラフモレ}少^{キヲ}双^{フタ}」(賢愚経・三五八)と娘の美しく整っている様子は、とりわけて優れて並ぶものが少ないとある。右近は玉鬘の容姿について、

見たてまつるに、命のぶる御ありさまどもを、またさるたぐひおはしましなむやとなむ思ひはべるに、いづくか劣りたまはむ。ものは限りあるものなれば、すぐれたまへりとて、頂きを離れたる光やおはする。

(玉鬘・三〇六)

と、命が延びる源氏や紫の上のお二人の美しい様子を、他に並ぶものはないだろうと思っていたが、玉鬘の美しさは劣っていない、仏の頭を離れるような光はないけれどもと、この上ない誉めようである。「双^{ナラ}ぶ」と「たぐひ」は、「相ならぶもの」という意味で、金剛醜女が仏の利益で変貌したあとの、特別にすぐれ並ぶものが少ないという美しさの表現が一致する。

8 邸に迎えられる

波斯匿王は、金剛醜女が端嚴美麗に変貌したことを聞くと、

審^{カニ}如^ク是^ノ者^ニ、速^{ニテ}往^{ヒキ}將^キ来^レ、即^{ニテ}時^ニ嚴^ニ車^ニ、迎^ヘレ^ヲ女^レ入^レ宮^ニ。

(賢愚経・三五八)

「審^{つまび}らかにそうならば、すぐに往き、引き連れて来よ」と宮殿に迎え入れよと命ずる。これは源氏が「容貌な

どは、かの昔の夕顔と劣らじや」（玉鬘・三二三）と、右近に玉鬘の容貌について尋ね、「こよなうこそ生ひまさりて見えたまひしか」（玉鬘・三二三）と、母夕顔よりも格段に美しく成人したことを確認すると、「さらばかの人、このわたりにわたいたてまつらむ」（玉鬘・三二三）と、娘として六条院に引き取る手順が一致する。また波斯匿王が「すぐに殿車にて宮に迎え入れよ」と、立派な車を用意して迎え入れるのは、玉鬘が六条院に迎えられ際に、「御車三つばかりして、人の姿どもなど、右近あれば、田舎びずしたてたり。殿よりぞ、綾、何くれとたてまつれたまへる」（玉鬘・三二〇）と牛車を三台したて、お供の身なりなども右近がついて田舎びることのないようと、源氏の心配りにより、立派に整えて六条院に入ることに対応する。

末摘花の場合も、源氏は末摘花の誠実な心を知ると、何年も訪れなかったことを不憫に思い、かねてから造らせていた二条の東院に迎えるのである（第一節8）。金剛醜女と玉鬘を邸に迎えるのは父親で、末摘花と源氏の関係に違いが見られるが、辛苦の末に立派な邸に迎えられることは共通するといえる。

このように末摘花と玉鬘の共通点は、1から8の賢愚経の要素と一致することがわかる。第一節で考察した4「求婚」の要素は仏典にみられないが、金剛醜女説話に、

①后ヲハ曰フ末利夫人ト。其形貌ノ吉コト十六大国ニ無シ並ヒ。時夫人ニ生リ一女子ヲ也。——中略——時ニ成セル二十二三ニ之間タ、
推シテ末利夫人女ノ美キコトヲ、從リ十六大国ニ各相訪ラフ。
(注好撰・二八ウ)

と、金剛醜女の母である末利夫人は十六大国のなかで最も美しいので、女むすめも美しいであろうと、十二三の年頃になると、十六大国より求婚されるという内容がある。この「末利夫人の娘の美しいことを推し量つて」と、親が優れていることにより求婚を受けるのは、第一節4で考察したように末摘花と玉鬘が競って求婚を受けることに

共通する。他にも、金剛醜女説話では、仏が庭に現れるが、源氏が常陸宮の庭を歩いて、末摘花の前に現れることが対応することから、賢愚経を原拠とする金剛醜女説話のあった可能性が考えられるのである。

三 「玉かづら」の意味 ― 金剛醜女と勝鬘夫人を同一人物とする資料から ―

第二節では、賢愚経を原拠とする金剛醜女説話の存在した可能性について述べたが、本節では⑥宝物集の本文から、賢愚経を原拠とする金剛醜女説話の存在について検討したい。

波斯匿王ノムスメ勝鬘夫人ハミメカタチワルク、カミチ、ミ、色クロクヲハシケレハ父ノ大王、楼ニコメテ、
 ヒトニミセ給コトナシ。カ、ルホトニ仏ヲムカヘマイラセテ法ヲトカセマイラスヘキコトアリテ、波斯匿
 王宮ノ人ミナ聴聞スベキコトヲイトナム。勝鬘夫人ハ形ミクルシサニロウヨリ外ヘハイツマシキニテアリケ
 レハ、ナミタヲ流シテ仏ヲミタマツラムトイウ願ヲオコシタマヒシカユヘニ、仏楼ノ内ニ光ヲ放テ現シ給
 キ。光ニアタルカユエニ形端嚴ニカワリ、カミヒスイノコトクナリテ、仏波斯匿王宮ニシテ法説給シヲキ、
 タリキ。
 (宝物集・三一才)

勝鬘夫人とは、勝鬘経⁽⁷⁾の主人公で、舎衛国の波斯匿王の娘として生まれ、阿踰闍国の友称夫人となる。釈迦に帰依した父母からの手紙を読んだ勝鬘夫人は、仏を称え、教えを請うと、仏が現れて説法し、勝鬘夫人はそれに応え、誓願と説法を述べたと伝わり、その内容が勝鬘経とされる。宝物集は、勝鬘夫人が「ミメカタチワルク」とあるが、勝鬘経にこのような記述はみられない。勝鬘夫人の両親の名は、

如^クレ是我^ノ聞^{ケリ}。一時^ハ仏^{セリ}住^ニ舎衛^ニ国祇樹給孤独園^ニ。時^ニ波斯匿王及末利夫人、信^{レズルコトヲ}法未^レ久共相謂言^{テク}。
 勝鬘夫人是我^レ之^{ナリ}女^{ナリ}。
 (勝鬘經・二一七)

と「波斯匿王」と「末利夫人」である。賢愚經の金剛醜女の両親の名も、

如^クレ是我^ノ聞^{ケリ}。一時^ハ仏^{セリ}在^ニ舎衛^ニ国祇樹給孤独園^ニ。爾時^ノ波斯匿王最大夫人、名曰^ヲ摩利^ト。時^ニ生^ム二女^ヲ。
 字^ス二波闍羅^ト、晋言^ニ金剛^ト。
 (賢愚經・三五七)

と「波斯匿王」と「摩利」であることから、「勝鬘夫人」と「波闍羅(金剛)」は、同じ人物と捉えることができる。宝物集の勝鬘夫人の「ミメカタチワルク」は容貌の醜いことで、賢愚經の「此女^ノ雖^モ醜形不^レ似^レ人^ニ」(第二節3)の「醜^{みにく}き形^{かたち}」が一致する。「父ノ大王、楼ニコメテ」と勝鬘夫人を楼に閉じ込めることは、賢愚經の、

王答^{ハフ}二女婿^ニ、勿^レ道^フ二此事^ヲ。急^{ギベシ}当^ニ牢閉^ミ、慎^{ミレ}勿^レ令^{シムルコトデ}出^デ。
 (賢愚經・三五八)

王は娘の婿に「この事(娘の事)を言つてはならない。急いで牢閉せよ。軽はずみに外に出してはならない」という王命が一致する。「牢閉」の牢は固く閉じ込めることで、「楼ニコメテ」に通じる。また「ヒト^(人)ニミセ給コトナシ」は、賢愚經の「勿^レ令^{シムルコト}外人^ニ覩^ミ見^ミ面状^ヲ」(第二節3)の、外人に面状を見せてはならないという王命と一致する。「ロウヨリ外へハイツマシキニテアリケレハ」と、勝鬘夫人は容貌が見苦しいので楼の外に出ることができないことも、賢愚經の「慎^{ミレ}勿^レ令^{シムルコトデ}出^デ」と、軽はずみに外に出してはいけないという王命と一致す

る。また、勝鬘夫人が「光ニアタルカユエニ形端嚴ニカワリ」と、仏の光にあたって端嚴に変わるのは、

女見ニ仏身^ハ一、益増歡喜^テ、因ニ歡喜故^ニ、惡相即滅^シ、身体端嚴^シ、猶如ニ天女^一。

(賢愚經・三五七)

と、金剛醜女が仏の姿をみて益々歡喜し、歡喜により惡相がすぐに滅し、身体が「端嚴」になることと一致する。このように宝物集が引く勝鬘夫人の話は、賢愚經の金剛醜女と混同しているようにもみえるが、宝物集の成立した平安末期以前に、賢愚經を原拠とする金剛醜女説話と勝鬘夫人を同一人物とした内容の仏教説話が流布していたことが考えられる。

次の⑦聖徳太子内因曼荼羅(正中二年(一一三二五)書写)の聖徳太子の前生譚の箇所を見ると、二系統の金剛醜女説話が見られる。

○抑、釈尊ノ出世ハ在世八十年、一中略一 此時ニ舍衛国ノ百皇^王ヲ波斯匿王ト名ツク、后キヲハ末利夫人ト申シキ、其ノ形^{カタチミメ}貌^{タンコムヒレイ}端嚴美麗ニシテ、十六ノ大国ニモ並ヒ無^レ双、爰コニ夫人一ノ女子ヲ産生ス、身ノ膚^{ハダ}ヘハ蛇ノ如シ、其ノ香臭クシテ、人ノ辺タリニ近クヘカラス、髮^{カミ}太クシテ左リニ卷キタリ、只偏ヘニ鬼神ノ如トシ。一中略一 王ノ言ハク、君カ子ハ、是偏ヘニ金剛醜女也、甚タ怖^{ヲシ}ロシ (⑦の1とする)

○抑モ、彼ノ金剛女、尺迦ノ御慈悲ニ預カリ、醜陋頑愚ノ身ノ上ニ、仏相ヲ写シ得給シ上ヘハ、勝鬘女トソ申シケル。 (⑦の2とする)

⑦の1は、金剛醜女は「身ノ膚^{ハダ}ヘハ蛇ノ如シ」とあることから、2百縁經が原拠といえる。⑦の2の「金剛女」の「金剛」は賢愚經に見られる名前のことから、賢愚經が原拠といえる。この聖徳太子内因曼荼羅の内容により、宝物

集が引いた勝鬘夫人の話は、金剛醜女と混同したのではなく、賢愚経を原拠とする金剛醜女の話が、勝鬘夫人の話として流布していたことがわかる。

賢愚経の金剛醜女と勝鬘経の勝鬘夫人が同一人物とされる背景には、先にあげたように両親が同じというだけでなく、次にあげる勝鬘経と賢愚経の内容に類似点が見られることに要因があると考えられる。勝鬘経の波斯匿王と末利夫人は、娘の勝鬘夫人が聡明で賢く、仏の深遠な教えを聞くにふさわしい徳行をそなえていると話し、そこで、仏のすぐれた徳をたたえる手紙を書き、勝鬘夫人に読ませるべく女官の旃陀羅に託す。勝鬘夫人は両親からの手紙を得て、歓喜し希有の心を生じて、旃陀羅に偈（仏徳を賛嘆し教理を述べた物）を説く。第二偈では、

仰惟^{ギおもんミレバ} 仏世尊^ハ、普為^{クニ}二世間^ノ一出^ヅ。亦応^ニ垂^{レテ}哀愍^ヲ、必令^ズ中^{メタマフ}我得^ニ上^セ見^{ルヲ}。

（勝鬘経・二一七）

「仏は世の中の人々に対して分けへだてなく、救いの手をさしのべておられる。願わくば哀愍（慈しみの心）を垂れて、お姿を拝見させてください」と勝鬘夫人は祈念する。金剛醜女も、

心遙^ヲ礼^シ二世尊^ヲ、唯願^{クハ}垂^{レテ}愍^ヲ。到^リ於我前^ニ、暫見^{セラレヨ}二教訓^一。

（賢愚経・三五七）

と、遙かにおはす世尊をうやまい、「唯、願わくは愍れみを示され、我が前に現れて、暫しの間、教訓せられよ」と、仏に教えを請うことが共通する。第三偈では、

即生^チ此念^{セシ}一時、仏於^ハ空中^ニ現^{レテ}、普放^ク淨光明^{キヲ}、顯^シ示^{タマヘリ}無比身^ヲ。

（勝鬘経・二一七）

勝鬘夫人が祈念すると、仏は空中に姿を現し、仏身から光明を放ち、二つとない姿をはつきりと示された。これは、仏が夫人の祈念に答えたことを明かしている。賢愚経では、

仏^ハ知^リニ其^レ志^ヲ、即^チ到^リニ其^ノ家^ニ、於^テニ其^ノ女^ノ前^ニ、地^{ヨリ}中^ニ踊^ス出^ス。

(賢愚経・三五七)

と、仏は女の志を知ると、すぐに女の家に到り地中より現れるのである。勝鬘経の「仏^ハ於^テニ空^ニ中^ニ現^レ、」と賢愚経の「地^{ヨリ}中^ニ踊^ス出^ス」は、「空」と「地」の違いはあるが、女の心に答えた仏が姿を現すことが共通する。金剛醜女は、仏の姿をみて益々歡喜し、歡喜により惡相がすぐに滅し、身体は端嚴に天女のように美しくなる。そして、

仏^ハ為^ス説^フ法^ヲ。即^チ尽^スニ諸^ヲ惡^ヲ。心^ニ速^ニ得^ル須^レ陀^ヲ洹^ニ道^ニ。女^ハ已^ニ得^ル道^ヲ。

(賢愚経・三五七)

と、仏が説法をすると、金剛醜女はすぐに諸惡をなくし、時に応じて(ただちに⁽⁸⁾)「須陀洹道⁽⁹⁾」を逮得し、すでに悟りを得たのである。勝鬘夫人は金剛醜女のように、外見が変貌することはないが、両親から仏の徳をたたえる手紙を得ると、

勝^ハ鬘^レ得^テ書^ヲ、歡^シ喜^シ頂^シ受^シ、読^シ誦^シ受^シ持^シ生^{ゼリ}ニ希^ノ有^ハ心^ヲ。向^{ヒテ}ニ旃^ニ提^ニ羅^ニ而^ニ説^テレ^ヲ偈^ヲ言^フ。

(勝鬘経・二一七)

歡喜し、読誦すると「希有の心を生ぜり」とある。「希有の心」とは、聖徳太子の書いたと伝わる注釈書『勝鬘経義疏』に「生^{ゼリ}ニ希^ノ有^ハ心^ヲ者^ハ、謂^ク、聞^クニ常^ニ住^ニ一^ヲ也⁽¹⁰⁾」(勝鬘経義疏・四二)とあり、常住とは、常住不変の眞実を説く教えのことで、勝鬘夫人は、両親の手紙により、仏の眞実の教えを悟ったことを言う。そして、自ら願いを

おこして仏に帰依したのである。このように金剛醜女と勝鬘夫人は、それぞれ別の仏典の主人公ではあるが、先にあげたように両親が同じというだけでなく、高貴な生まれの女性が仏に救いを求め、在俗のまま悟りを得るという共通点のあることから同一人物とされたことが考えられる。以下の聖徳太子の前世譚にも、金剛醜女と勝鬘夫人を同一人物とする内容が見られる。

⑧ 叡山文庫本『太子伝一⁽¹¹⁾』(二四五四・五年書写)

父ハ舍衛国波斯匿王、御母ハ末利夫人也。而勝鬘余ニ御良惡姿見苦座シカハ大王モ夫人モ御歎ノ色深ク有。

⑨ 鶴林寺本『太子伝一⁽¹²⁾』(鎌倉から室町)

天竺ニシテ舍衛国ノ主波斯匿王ノ姫宮勝鬘ト申夫人也。天下第一ノ惡女ニテマシマシ、見仏ノ得ニ依テ端嚴美麗成給フ。

⑩ 内閣文庫本『聖徳太子伝記一⁽¹³⁾』「又第二ニハ先生之勝鬘夫人之御事」(一五六八年書写)

舍衛国波斯匿王也。御母ハ末利夫人也。而テ勝鬘夫人、餘リニ御良惡^{カタチ}シク御姿見苦敷座シカハ大王モ夫人モ此事ヲ堅歎セ給ヒキ。

⑪ 四天王寺本『太子伝⁽¹⁴⁾』(室町後期)

勝鬘夫人餘リニ御良惡^{カタチ}シク御姿見苦敷座シカハ大王モ夫人モ此事ヲ堅歎セ給ヒキ。

⑫ 四天王寺蔵「聖徳太子絵伝⁽¹⁵⁾」(鎌倉後期頃)

掛幅の左上に逆髪の赤い顔の醜女が描かれ、「金剛女王」と記されている。菩薩の利益で美しくなった勝鬘夫人は右に描かれている。

このように我が国では、賢愚経の金剛醜女が勝鬘夫人の話となり、その話が聖徳太子の前世譚として広まってい

る。

まとめ

以上の考察から、末摘花と玉鬘に、賢愚経の要素や構成の一致が見られ、求婚譚は、金剛醜女説話の要素であることから、作者が用いた資料を推察すると、賢愚経を原拠とする金剛醜女説話が考えられる。また宝物集や、時代は下がるが中世の聖徳太子伝の前世譚に見られるように、賢愚経を原拠とする金剛醜女説話は、金剛醜女と勝鬘夫人を同一人物とした内容である。この金剛醜女と勝鬘夫人を同一人物とする仏教説話が、源氏物語の時代にすでに流布していたとすれば、末摘花と玉鬘の歌語「玉かづら」は、「勝鬘夫人」の意味が含まれるのではないだろうか。随の僧嘉祥大師吉蔵（五四九から六二三）の『勝鬘宝窟⁽¹⁶⁾』に、

言^フニ勝鬘^ト一者、外国^ノ名^ハ為^スニ戸利摩羅^ト。戸利^ニ此^テ翻^テ名^ヲ之^ヲ為^スレ勝。摩羅^ハ名^クレ鬘。鬘^ハ謂^フニ華鬘^ヲ。而^フ言^フレ勝者、一^ニ釈^ク云、鬘^ノ中^ニ之^ヲ上^{ナル}ニ故^ニ云^フニ勝鬘^ト。

（勝鬘宝窟・三七）

「勝鬘」は、外国（インド）の名は、「戸利摩羅」（Srināla）と言う。「戸利」を翻訳すると「勝」、「摩羅」は「鬘」である。「鬘」は「華鬘」をいい、「勝」とは一釈に、「鬘」の中の上なるが故に「勝鬘」と云う。すなわち「勝鬘」は「勝れた髪飾り」の意味である。末摘花と玉鬘に用いる歌語「玉かづら」の「玉」も「勝れた」の意を表し、「かづら」は「鬘」で、「勝鬘」といえる。

類い稀な醜女に描かれた末摘花は、仏菩薩の化身の源氏を信じ、玉鬘が長谷観音に救いを求める姿は、金剛醜

女と勝鬘夫人が、仏を念じる姿が思い合わせられる。そして蓬生巻は、末摘花が変貌したように美しく描かれ、末摘花の髪で作った鬘を「玉かづら」と歌う。「かたは」と評判のたつた玉鬘も、源氏の娘として六条院に迎えられ、「玉かづら」と歌われる。このように二人の姫君に共通する「玉かづら」の意味に、金剛醜女が仏の利益で変貌した勝鬘夫人の意味が含まれると理解することができるのである。

(1) 紫藤誠也氏『古今和歌六帖』と『源氏物語』（寺本直彦氏編『源氏物語』とその受容』所収、右文書院、昭和五十九年（一九八四）。

(2) 清水婦久子氏『源氏物語の巻名と和歌―物語生成論へ―』（和泉書院、平成二十六年（二〇一四））。

(3) 武田早苗氏「玉鬘」の「玉」の意味するもの（『源氏物語の鑑賞と基礎知識12』至文堂、平成十二年（二〇〇〇）十月所収、一〇二頁）。

(4) 『河海抄』巻第十に「此巻の始末摘花巻と同様也」とある。

(5) 『一葉抄』・『弄花抄』・『細流抄』に「たゞ末摘のうき果報にて忘れぬると観し給也」とある。「果報」とは、前世の行いによってうける現世での報いのことである。

(6) 大正新脩大藏經の校注「貌」、高麗大藏經「類」、東大寺本『賢愚經』残巻（大聖武）は「狼」、石山寺本「狼」、興聖寺本「狼」とあるが、「狼」は「貌」の異体字である。「類」は、形象・姿・様子のことで、「貌」と同義語である。

(7) 勝鬘夫人が説いた内容の經典は、求那跋陀羅訳『勝鬘經』（四三六年訳）と、唐の菩提流志編・訳『大宝積經』（巻第一百十九勝鬘夫人会第四十八・七一三年成立）の二つがあるが、一般的に『勝鬘經』が知られている。訳は、中村元

氏編『聖徳太子』（日本の名著2、中央公論社、昭和四十五年（一九七〇））を参照した。

（8）金岡照光氏『仏教漢文の読み方』（春秋社、一九七八年、一五八頁）によれば、「この「応時」は従来、「時に応じて」と訓読している。それでも誤りではない。しかし、これはむしろ直截に「ただちに」と訓ずべきところである」という解説による。

（9）「須陀洹道」とは、煩惱を脱して聖者の境地に入った位、四果の第一。

（10）『勝鬘經義疏』の本文は、家永三郎・藤枝晃・早島鏡三・築島裕四氏校注『聖徳太子集』（日本思想大系2、岩波書店、一九七五年）による。引用の際に訓点は私に改めた。

（11）本文は『中世聖徳太子伝集成』（斯道文庫古典叢刊6、勉誠出版、平成十七年（二〇〇五））を参照した。

（12）本文は黒田彰氏所有の鶴林寺本『太子伝』の写真版複写を参照した。

（13）本文は黒田彰氏所有の内閣文庫本『聖徳太子伝記一』の写真版複写を参照した。

（14）本文は黒田彰氏所有の四天王寺本『太子伝』の写真版複写を参照した。

（15）重要文化財「聖徳太子絵伝」は、もともと四天王寺にあったものではなく伝来は未詳で、作は鎌倉後期とされる。作品の概要と図様構成については、村松加奈子氏「四天王寺所蔵 二幅本聖徳太子絵伝」（『国華』第一四〇八号、二〇一四年）に詳しい。

（16）本文は『大正新脩大藏經』（大正新脩大藏經刊行会、昭和四十二年（一九六七））による。宮内庁蔵『勝鬘宝屈』（唐・弘道二年（六八四）写）は、空海弟子円行（七九九〜八五二）が所蔵していたものであると識語からわかる（『皇室の文庫 書陵部の名品』宮内庁書陵部、平成二十二年（二〇一〇））。

第四章 源氏物語の指食いの女の造型について

―「上陽白髮人」と金剛醜女説話の関わり―

はじめに

源氏がまだ近衛の中将の頃、五月雨の一夜に源氏の宿直所に集まった頭の中将、左馬の頭、藤式部の丞は、それぞれ恋愛や体験談を披露する。後に雨夜の品定めと呼ばれるこの女性談義で左馬の頭は、最も望ましい妻は家柄や容貌よりも、実直で穏やかな性質の女がよいと熱弁をふるう。その左馬の頭に今は亡き愛しい妻がいた⁽¹⁾。口喧嘩の果てに夫の指を噛むことから、読者に指食いの女と呼ばれる。女は浮気を怨み、嫉妬をする性格ではあるけれども、氣立ての悪い女ではない。激しい嫉妬は、左馬の頭への愛情の深さからくるもので、夫に懸命にくす誠実な女として描かれている。

みにくき容貌かたちをも、この人に見やうとまれむと、わりなく思ひつくろひ、うとき人に見えば、おもてぶせにや思はむと、憚り恥ぢて、みさをにもてつけて、見慣るるままに、心もけしうはあらずはべりしかそ、ただこの憎きかた一つなむ、心をさめずはべりし。

(帚木・六三)

醜い容貌も、夫に嫌われはしないかと、むやみにとりつくろひ、親しくない人に会うと、(左馬の頭が)不面目な思ひはせぬかと遠慮をし恥じている。「この憎きかた一つなむ」と激しい嫉妬を静めることのできないのが唯一の欠点であった。

『紫明抄』・『河海抄』は、指食いの女の「うとき人に見え、おもてぶせにや思はむ」について、白居易の新樂府「上陽白髮人」⁽²⁾の「外人不見見応笑」(外き人に見えじ、見えなば笑はれなむ)との関わりを示す。この指摘にもとづく新間一美氏は、題序に「愍怨曠也」(怨曠を愍べり)とあるように、上陽宮に幽閉された女性(以下、上陽人と呼称する)と指食いの女は、怨み、嫉妬する女として共通すると指摘される⁽³⁾。

しかしながら上陽人は、芙蓉や玉に喩えられた美女で、その為に楊妃に睨まれ生涯独身である。指食いの女は、左馬の頭の妻という設定の違いや、「みにくき容貌」^{かたち}、「うとき人に見え、おもてぶせにや思はむと、憚り恥ぢて」と夫を氣遣う性格など、「上陽白髮人」にない要素がみられる。「外人不見見応笑」は、白居易以前の漢詩文に見出し難い表現であるが、賢愚因縁経卷第二「波斯匿王女金剛品第八」(以下、賢愚経)や、敦煌変文の金剛醜女の話(以下、金剛醜女変文)に類似する言葉が散見する。この金剛醜女説話については、すでに第一章から第二章にかけて、末摘花や玉鬘の造型をめぐる発想や表現に関わることを考察したが、指食いの女にも共通する要素がみられることから、本章では、指食いの女と「上陽白髮人」の関わりをふまえて、あらたに金剛醜女説話との関わりを考察をすることで、指食いの女の「上陽白髮人」の引用だけでは捉えきれない部分について追究したい。

一 「上陽白髮人」と指食いの女の造型について

『源氏物語』における「上陽白髮人」の引用については、『紫明抄』(一二九四年以前成立)、『河海抄』(一三六八年成立)、『孟津抄』(一五七五年成立)が関わりを示す。実例に則して具体例を挙げておられるのが丸山キヨ子氏である⁽⁴⁾。丸山氏は以下の五箇所に、「上陽白髮人」の引用のあることを指摘された。

①「窓をうつ声」(幻・一四四)

蕭蕭暗雨打窓声 蕭蕭たる暗き雨の窓に打つ声

②「火ほのかに壁にそむけ」(帚木・六五)

耿耿残燈背壁影 耿耿たる残りの燈の壁に背けたる影

③「十六にて故宮に参り給ひて、二十にて遅れ奉り給ふ。三十にてぞ、今日また九重を見給ひける」(賢木・一三六)

玄宗末歳初選入 玄宗の末の歳初めて選ばれ入りき
入時十六今六十 入りし時は十六、今は六十

④「うとき人にはさらにみえ給はず」(幻・一三三)

外人不見見応笑 外き人には見えず見ば笑ふべし

⑤「末に参りて、はるかに目をそばめられ奉らむもわづらはしく」(竹河・二〇一)

已被楊妃遙側目 已に楊妃に遙かに目を側められたり

丸山氏は、幻の巻の「うとき人にはさらに見えたまはず」を、「上陽白髮人」の語として扱う理由について、「物語の方では、源氏の君が人目をさける意味で用ひてゐる。転用といへるかどうか、それ程大げさな事柄ではないまでも、一脈の関連はみとめられるであらう」と、最愛の妻紫の上を亡くした、源氏の心情表現との関連を示された。

新間氏は、丸山氏の指摘に加えて、指食いの女の「うとき人に見え、おもてぶせにや思はむ」の「うとき人」も、古註釈が示すように「上陽白髮人」の「外人不見見応笑」によるとされる。「外人」を「うとき人」とよむのは、

神田本や金沢文庫本の白氏文集の訓にあり、次に揚げるように、藤原高遠（九四九～一〇一三）の「大式高遠集」⁽⁵⁾の、「上陽白髮人」の十首連作の句題和歌にも同様の訓が見られる。

外人不見見応咲

二七四 玉垂れのみ簾の間うとく人は見む 見えなんのちは悔しかるべく

「うとく」は、「うとし」（形ク）の連用形の副詞で、句題の「外人」の「外」をうけて詠んでいることから、「外人」は「うとき人」と詠んだことがわかる。

『和漢朗詠集』⁽⁶⁾ 卷下「妓女」にも、

七〇七 外人^{ウトキ}不^レ識^ラ承^{ハル}恩^レ処 唯有^三羅衣^染御香^{メル}一

「ウトキ」と訓がみられることから、「うとき人」は伝統的に用いた訓であることがわかる。

新聞氏は、この「外^{ウト}き人」が単なる部分的な引用ではなく、指食いの女の造型は「上陽白髮人」に描かれた上陽人に基づき、さらに、指食いの女が夫を待つ部屋の情景に、「火ほのかに壁にそむけ」の表現に「耿耿残燈背壁影」を利用するのは、偶然ではなく効果的に使われている。「上陽白髮人」は、題序に「怨^{ゑん}曠^{くわう}を愍^{あはれ}べり」とあり、「怨」は怨み、「曠」はむなしいことで、「怨曠」の意味を解すれば、「上陽白髮人」の主題も、上陽宮に幽閉された上陽人の、夫のいない空しさ、怨みの気持ちを抱く女性を憐れむことにある。上陽宮に幽閉された「配偶なきあわれな女」と、指食いの女の左馬の頭が自分を見捨てて他の女のもとへ行っている時の空しい気持ちが結びつくと指摘されている⁽⁷⁾。

ここでさらに、指食いの女と上陽人の類似点について考察を加えたい。左馬の頭は、

さりともし思ひ離れじと思ひたまへしかば、しばし懲らさむの心にて、しかあらためむとも言はず、いたく綱引きて見せしあひだに、いといたく思ひ嘆きて、はかなくなりにはべりにしかば、たはぶれにくくおぼえはべりし。
(帚木・六六)

指食いの女が自分を見限ることはないと思つて、女の嫉妬を懲らしめようと、わざと冷たくつれないそぶりを見せている間に、女はひどく嘆いて死んでしまうので、冗談は言えないものだと後悔する。上陽人の最期は、

妬令潜配上陽宮　　妬まれて^{ひそ}潜かに上陽宮に配せしむ
一生遂向空床宿　　一生に遂ひに空しき^{とこ}床にして宿す

楊妃に妬まれた為に上陽宮に配せられ、生涯つれあいのない部屋に一人寝となることから、上陽宮で一生を終えたと読みとることができる。指食いの女が左馬の頭の訪れのないのを嘆きながら死んでしまう最期と、上陽人が玄宗に会えないままに一生を終える状況は、男に見捨てられた女の嘆きや、空しい心境が一致する。

しかしながら、指食いの女の造型には、「上陽白髮人」だけでは捉えきれない要素がみられる。まず両女の外見を比べると、指食いの女は、

はやう、まだいと下臈にはべりし時、あはれと思ふ人はべりき。聞こえさせつるやうに、容貌^{かたち}などいとまほにもはべらざりしかば、若きほどのすき心には、この人をとまりにとも思ひとどめはべらず (帚木・六二)

「容貌^{かたち}などいとまほにもはべらざりしかば」と容貌がたいしてよくないので、左馬の頭は、「この人をとまりに」と、終生連れ添う妻と思うことが出来ない。

皆云入内必承恩

驗似芙蓉胸似玉

未容君主得見面

已被楊妃遙側目

皆云く内に入りなば必ず恩を承けたまはらむ

驗^{まなぶた}は芙蓉に似胸は玉に似たり

未^{おもて}だ君主に面を見えしむること得ること容^{ゆる}されざるに

已^{すで}に楊妃に遙かに目を側^{そば}められたり

上陽人は、芙蓉や玉に喩えられた美女で、その為に楊妃に妬まれて、玄宗に会うことを許されないのである。両女は容貌の美醜の差が大きく、指食いの女は左馬の頭の妻で、上陽人は生涯独身という男女関係にも違いが見られる。ここでとりわけ注意をしたいのが、「外人不見見応笑」の解釈と、指食いの女に用いた表現の違いである。上陽人は、

小頭鞋履窄衣裳

青黛画眉眉細長

外人不見見応笑

天宝年中時勢粧

小頭^{せうとう}の鞋履^{かいり}窄^{すぼ}き衣裳

青^{まゆずみ}き黛眉^かを画^{まゆずみ}いて眉細く長し

外^{うと}人^ふには見^みえず見^みええば笑ふべし

天^{ふるめきすがた}宝^ふ年中^なの時^{とき}勢^{せい}粧^まなれば

いまやうすがたなれば
そのかみすかたなれば

先の尖った履きもの、細身の衣装、青い黛で画いた細長い眉、時代遅れの粧いは、外き人^{うと}には見えない、見ればきつと笑うにちがいないと姿をみせない。指食いの女は、

みにくき容貌^{かたち}をも、この人に見やうとまれむと、わりなく思ひつくるひ、うとき人に見えば、おもてぶせにや思はむと、憚り恥じて

(帚木・六三)

醜い容貌も、夫に嫌われるのではないかと懸命につくろい、外き人^{うと}に会えば、(夫が)不面目に思うだろうと、遠慮をして恥じている。指食いの女の「みにくき容貌^{かたち}」と、上陽人の「時勢粧」の時代遅れの粧いと理由は違うけれども、外面を恥じる心情と、外き人^{うと}に容貌を見せないことは共通するといえる。ところが、上陽人は自分が恥をかくことを心配するのに対して、指食いの女は夫が「おもてぶせ」に思うだろうと、夫の面目に気遣いを加えることに違いが見られる。指食いの女の造型について考察をすすめるにあたり、重要な糸口と思われるのは、上陽白髪人と指食いの女に共通する「外人不見見応笑」と、指食いの女の「みにくき容貌^{かたち}」と「おもてぶせ」の語に注意したい。

二 指食いの女と金剛醜女の類似点

「上陽白髪人」の「外人不見見応笑」は、白居易以前の漢詩文に見出し難い表現であるが、仏典や類書の金剛醜女の話に類似する言葉が散見する。金剛醜女説話の原拠は序論二に挙げたように、1 賢愚経、2 百緣経、3 雑宝蔵経、4 経律異相、5 法苑珠林があげられる。「外人不見見応笑」と類似する表現は、1 賢愚経、2 百緣経、

4 経律異相に見られる。

- 1 勿^レ令^{シムルコト}外人^ニ得^{ルコトヲ}見^レ之^ヲ也
 (賢愚経・三五七)
- 勿^レ令^{シムルコト}外人^ニ覩^ミ見^レ面^ニ状^ヲ一^ヲ
 (賢愚経・三五七)
- 2 勿^レ令^{シムルコト}出^レ外^ニ使^テ人^ヲ得^レ見^{ルコトヲ}
 (百縁経・二四二)
- 勿^レ令^{シムルコト}外人^ニ見^{ルコトヲ}其^ニ面^ニ状^ヲ一^ヲ
 (百縁経・二四二)
- 4 勿^レ令^{シムルコト}外人^ニ得^{ルコトヲ}見^レ之^ヲ也
 (経律異相・一八四)

第一章と第二章は、末摘花と玉鬘の造型に、賢愚経の主人公の要素を受け継ぐことを論じたが、指食いの女にも関わりが考えられることから考察を行いたい。次のⅠからⅢは、賢愚経の本文と指食いの女が、対応すると思われる箇所である。

Ⅰ 如^ク是^ノ我^{キヌ}聞^{キヌ}。一時^ニ仏^{イマシキ}在^ニ舍^ノ衛^ノ国^ノ祇^ノ樹^ノ給^ニ孤^ノ独^ノ園^ニ。爾^ノ時^ノ、波斯^ノ匿^ノ王^ノ最^ノ大^ノ夫^ノ人^ノ名^ヲ曰^フ摩^ノ利^ノ。時^ニ生^ム一^ニ女^ヲ。字^ス波^ノ闍^ノ羅^ト。晋^ニ言^フ金^ノ剛^ト。其^ノ女^ノ面^ノ類^シ、極^メ為^リ醜^ニ惡^ト。肌^ノ体^ノ龜^ノ皴^ノ、猶^ク如^ク駝^ノ皮^ノ。頭^ノ髮^ノ龜^ノ強^ノ、猶^ク如^ク馬^ノ尾^ト。

(賢愚経・三五七)

主人公の波闍羅(金剛)は、波斯匿王と摩利夫人の娘として生まれながら、「其の女の面貌、極めて醜惡と為す」と醜く生まれつく。身分の違いはあるけれども、指食いの女も「みにくき容貌」とあり容貌の醜いことが共通する。

Ⅱ 王^ハ覩^テ此^ノ女^ヲ、無^シ一^ノ喜^ノ心^ト。便^チ勅^ス宮^ノ内^ニ。勸^ニ意^ヲ守^シ護^シ、勿^レ令^{シムルコト}外^ニ人^ニ得^{ルコトヲ}見^レ之^ヲ也。所以^ゾ者^何。此^ノ女^ノ雖^モ醜^ニ形^ト不^レ似^レ人^ニ、然^{ドモ}是^レ末^ノ利^ノ夫^ノ人^ノ所^{ナリ}生^ム。此^レ雖^モ醜^ニ惡^ト、当^{ベシ}密^ニ遣^レ人^ヲ而^テ護^シ養^シ之^ヲ。

(賢愚経・二五七)

王は娘を見て少しも喜ぶ心がなく、すぐに宮内に「懃ろに守護し、外人に之を見ることが得しむることなかれ」と王命を下す。人とは思えない「醜形」ではあるけれども、末利夫人の生んだ娘なので、丁重に守り、密かに人を遣わして護養させるのである。この「醜^{みにく}き形^{かたち}」の訓は、指食いの女の「みにくき容貌^{かたち}」と一致し、「外人」は、第一節で考察したように「うとき人」という伝統的な訓があり、指食いの女にもみられる。

Ⅲ 王^{ハス}勅^ニ女^ノ夫^ニ。自^ラ捉^リ戸^ノ鑰^ヲ（⁹）、若^シ欲^ス出^テ行^カムト、而^ラ自^ラ閉^レ之^ヲ。我^ハ女^ハ醜^ニ惡^ニ、世^ニ所^ナレ未^リザル^ラ。勿^レ令^シ三^ムコト 外人^ニ覩^ミ見^セ面^ヲ状^一。
常^ニ牢^ニ門^ヲ戸^一、幽^シ閉^レ在^レ内^ニ。

（賢愚経・三五七）

王は娘が結婚の適齢期になると、零落した若者を捜して結婚させ大臣にする。そして娘の夫に、「自ら戸の鑰^{かぎ}を持ち、もし（娘が）外に出て行きたいと望んでも閉じ込めよ。我が娘は、世にみたこともない醜^{みにく}さである。外^{うと}き人に面状を見せてはならない」と王命を下す。指食いの女は、

みにくき容貌^{かたち}をも、この人に見やうとまれむと、わりなく思ひつくろひ、うとき人に見えば、おもてぶせに
や思はむと、憚り恥ぢて
（帚木・六三）

醜い容貌も夫に嫌われはしないかと、むやみにとりつくろい、親しくない人に会うと、夫が（左馬の頭）不面目な思いはしないかと遠慮をして恥じている。このように金剛醜女と指食いの女は、王命と自分の意志による違いはあるが、夫の為に「醜^{みにく}き形^{かたち}」を「外^{うと}き人」に見せないことが一致する。次に両女の内面について比較をしたい。

IV 其女精誠敬心純篤^{ナリハリ}。仏知^{ハリ}ニ其志^シニ、即到^{チリ}ニ其家^ニニ、於^テニ其女前^ニニ、地中^{ヨリ}踊出^ス。

(賢愚経・三五七)

「其の志」は、金剛醜女の仏に対する「精誠、敬心、純篤」をさす。「精誠」は、真心をつくす誠実なことを意味し、「敬心」は、相手を敬い礼をつくす心、「純篤」は、情に篤く真心のあることを意味する。また女の名は波闍羅^{はじやら}、晋に訳すと金剛⁽¹⁰⁾（前掲I）で、名は体を表し、仏に対する志は、揺るがないものといえる。仏は金剛醜女の志を知ると、すぐに金剛醜女の家に入り、女の前に地中より現れる。そして女は仏の姿を見ると歓喜し、端嚴美麗に変貌するという大団円である。指食いの女の性質については、左馬の頭が次のように語る。

この女のあるやう、もとより思ひいたらざりけることにも、いかでこの人のためにはと、なき手をいだし、後れたる筋の心をも、なほくちをしくは見えじと思ひはげみつつ、とにかくにつけて、ものまめやかに後見、つゆにても、心に違ふことはなくもがなと思へりしほどに、進める方と思ひしかど、とかくになびきて、なよびゆき、みにくき容貌^{かたち}をも、この人に見やうとまれむと、わりなく思ひつくるひ、うとき人に見えば、おもてぶせにや思はむと、憚り恥ぢて、みさをにもてつけて、見馴るるままに、心もけしうはあらずはべりしかど、ただこの憎きかた一つなむ、心をさめずはべりし。

(帚木・六二)

この女の「あるやう」とは、有り様、様子のことで、もともと自分では出来ないことでも、どうにかして知恵をだし、不得意なことも、だめな女と思われないよう努力をするのは、指食いの女の夫への「志」といえる。「ものまめやか」は、まじめなさま、誠実なさまを意味し、「つゆにても心に違ふことはなくもがな」と、少しでも夫の心に逆らうことがないように心がけるのは、金剛醜女の「精誠」に通じる。また、指食いの女が「わりなく思ひつくるひ、うとき人に見えば、おもてぶせにや思はむと、憚り恥ぢて」と、夫に嫌われはしないかと、むや

みにとりつくろい、親しくない人に会うと、（左馬の頭が）不面目な思いはしないかと遠慮をして恥じるのは、夫を氣遣うことによる。これは夫を敬い礼をつくす心の表れによるもので、金剛醜女の「敬心」と一致する。左馬の頭は、「心もけしうはあらずはべりしかど、ただこの憎きかた一つなむ」と、女の性格は悪くはないが、ただこの憎らしい嫉妬という一つが不満であったと語る。女の激しい嫉妬は、左馬の頭への愛情の深さからくるもので、夫に懸命につくす、誠実な女であるからこそ、夫の不実が許せないのである。喧嘩別れの後も、

着るべきものの、常よりも心とどめたる色あひしざま、いとあらまほしくて、さすがにわが見捨ててむ後をさへなむ、思ひやり後見たりし。

（帚木・六六）

着るべき着物も、普段よりも念をいれた色合いの染め方や仕立て方が、申し分のない出来映えで、私（左馬の頭）が見捨ててしまった後までも、氣を配って世話をする。これは女が情に篤く、真心をこめて夫につくす人柄で、金剛醜女の「純篤」に通じる。

このように指食いの女の造型をめぐる発想や表現に、賢愚経の金剛醜女の要素と共通点がみられる。しかし、指食いの女の、夫の着物の仕立てや、夫の帰りを待つ健気な姿は、賢愚経にはない要素である。作者が用いた資料を推察すると、賢愚経だけを用いたとはいえず、賢愚経を原拠とする金剛醜女説話を用いた可能性が考えられるのである。

三、金剛醜女変文と指食いの女の類似点

二十世紀はじめに敦煌で発見された敦煌文書の中に、P3048「醜女縁起」、S4511「金剛醜女因縁一本」、S2114「醜女金剛縁」、P3592「醜女縁起」、P2945v「金剛醜女縁」の五点の抄本（以下金剛醜女変文と称する）が現存する。また敦煌莫高窟第九十八窟に「波斯匿王女醜女縁」（五代）の壁画が残り、また日本においても、四天王寺蔵「聖徳太子絵伝」の聖徳太子の前世譚に金剛醜女が描かれ、金剛醜女説話は広く民衆に説かれた絵説きの材料であったことがわかる。

金剛醜女変文が賢愚経に依拠することは、すでに定説となり多くの先行研究で指摘されている⁽¹¹⁾。最近では伊藤美重子氏が、敦煌の「醜女縁起」は『賢愚経』をベースに『雑宝蔵経』のプロットも取り入れ、經典にない二人の姉を配役に加え、夫人や婿の王郎の役柄を加味して現実的な王家のホームドラマに改変し、聴衆の関心を引きつけたと、従来の指摘になかった雑宝蔵経との関わりを指摘される⁽¹²⁾。この日本から遠く離れた敦煌で発見された金剛醜女変文と、源氏物語の間に直接的な関係があるとは想定しにくいが、指食いの女との類似点について考察をしたい。

金剛醜女変文は、父王は娘の夫に、娘が人離れした醜貌のために、

惆悵^シ莫^レ遣^{スコト}外人^ニ聞^一

(P3048 醜女縁起・6—3)

「軽々しく外^{うと}き人に聞かせることはならない⁽¹³⁾」と命じる。これは賢愚経の「勿^レ令^{シムルコト}外人^ニ覩^ミ見^ミ面^ミ状^ミ」^(前掲第二節Ⅲ)の、「覩見」と「聞」の表現の違いはあるけれども、金剛醜女の醜貌を「外人」に世間に知られないようにすることが共通する。金剛醜女変文の「外人」の訓と、指食いの女の「うとき人」が一致するが、これは、金剛醜女変文の本文が、賢愚経に依拠することによるといえる。ところが、原拠の仏典にはない金剛醜女変文だけにみられる表現や要素が、指食いの女に見られるのである。

妹子雖^{ハモ}不^レ端嚴^ニ、手頭裁縫^ハ最巧^{モナリ}

(P3048 醜女縁起・6―4)

金剛醜女は、美しくはないけれども、手先が器用で「裁縫」が最も巧みである。指食いの女も、

龍田姫と言はむにもつきなからず、たなばたの手にも劣るまじく、その方も具して、うるさくなむはべりしとて、いとあはれと思ひ出でたり。中将、そのたなばたの裁縫^ハ方^ヲをのどめて、長き契りにぞあえまし。

(帚木・六七)

と、龍田姫にも劣らぬ染色の腕前をもち、七夕の織女に劣らないほどに機を織り、裁縫が得意である。このように金剛醜女と指食いの女は、容貌は悪いけれども、裁縫の巧みなことが一致する。原拠の仏典には、夫が妻の醜貌を恥じるという要素はないが、金剛醜女変文では、

只為^レ思^ニ君多醜貌^ヲ、我今恥^レ辱^ス会^ス諸賓^ト。

(P3048 醜女縁起・6―5)

夫は、「君のはなはだしい醜貌を思うと、私が今、諸賓を招いて宴会をすることは、はずかしめを受ける」と嘆いている。指食いの女の場合は、

みにくき容貌^{カタチ}をも、この人に見やうとまれむと、わりなく思ひつくろひ、うとき人に見えば、おもてぶせにや思はむと、憚り恥ぢて

(帚木・六三)

と、「みにくき容貌」^{かたち}なので、夫に嫌われないかと、むやみに取り繕い、親しくない人に会うと、（左馬の頭が）不面目な思いはせぬかと遠慮をして恥じるのは、妻の醜貌が夫の恥になるという要素が共通するといえる。

このように金剛醜女変文の金剛醜女と指食いの女は、外き人に醜貌を隠す、裁縫が巧みで、妻の醜貌が夫の恥になるという要素が一致する。また第一章で考察したように、金剛醜女変文だけにみられる表現が末摘花の造型にもみられることは偶然の一致とは考えにくく^{（14）}、賢愚経を原拠とする金剛醜女変文の流れをくむ資料が、日本にあつた可能性が考えられるのである。

まとめ

こうした考察から、帚木巻の指食いの女の造型をめぐる発想や表現に、「上陽白髮人」と金剛醜女説話の受容のあつたことがわかる。その場合の作者が用いた直接の資料を推察すると、1「上陽白髮人」、2賢愚経、3賢愚経に依拠する金剛醜女変文の流れをくむ金剛醜女説話があげられる。これらのことから、指食いの女の「うとき人に見え、おもてぶせにや思はむ」の表現の背景には、白居易の新樂府「上陽白髮人」の「外人不見見応笑」と、賢愚経の「勿令外人覩見面状」の両方の意味が含まれ、また指食いの女の造型に両方の主人公の要素を用いたことがわかる。指食いの女が、

ただありしなごらは、えなむ見過ぐすまじき。あらためてのどかに思ひならばなむ、あひ見るべきなど言ひしを——中略——しかあらためむとも言はず、いたく綱引きて見せしあひだに、いといたく思ひ嘆きて、はかなくなりはべりにしかば、たはぶれにくくおぼえはべりし。

（帚木・六六）

「ただ、今まで通りの浮気な心ならば、辛抱することはできません。心を改めて落ち着くようになるならば、お

会いしましょう」と、左馬の頭の浮気心が改まることを期待し、夫を待ちながら、たいそうひどく悲しく思つて、亡くなつてしまう最期は、上陽人が玄宗に会えないまま、一生を空しく終える状況と一致する。また指食いの女が、最期まで夫の不実を頑なに許さないのは、金剛醜女の誠実で揺るがない金剛心を受け継ぐといえよう。

以上の考察から、源氏物語の作者が指食いの女の造型に、上陽人と金剛醜女の要素を用いた理由を推察すると、

- 1 未容君王得見面（上陽白髮人）と、勿令外人得見之也（賢愚経）
- 2 外人不見見応笑（上陽白髮人）と、勿令外人覩見面状（賢愚経）

上陽人は楊妃の命により幽閉され、金剛醜女は王命により宮内に幽閉され、「外人に面を見せない」という共通する要素を見いだし、両女の要素を指食いの女の造型に用いたことが考えられるのである（15）。

（1）左馬の頭は、生涯の頼りになる妻の例として指食いの女について語る。また指食いの女は、左馬の頭の着物や生活上の世話をすることから、左馬の頭の妻の立場であつたといえる。

（2）新樂府「上陽白髮人」の本文と訓読は、太田次男・小林芳規両氏『神田本白氏文集の研究』（勉誠社、昭和五十七年（一九八二））を用いた。以下の引用も同書により、一部表記を改めたところがある。

（3）新聞一美氏「源氏物語の女性像と漢詩文―帚木三帖から末摘花・蓬生卷へ―」（『中古文学と漢文学Ⅱ』和漢比較文学叢書第四卷、和漢比較文学会編、汲古書院、昭和六十二年（一九八七））。

（4）丸山キヨ子氏『源氏物語と白氏文集』（東京女子大学学会研究叢書3、昭和三十九年（一九六四））の「第二篇 源氏

物語に与えた白氏文集の影響」一一七頁以下。

(5) 『私家集大成中古Ⅰ』(明治書院、昭和四十八年(一九七三)十一月)。

(6) 本文は佐藤道生氏『三河鳳来寺旧藏曆応二年書写 和漢朗詠集影印と研究』(勉誠出版、平成二十六年(二〇一四)による。

(7) 新聞一美氏「源氏物語の表現と漢詩文―白樂天の諷諭詩と夕顔・六条御息所―」(『講座 平安文学論究第九輯』平安文学論究会編、風間書房、平成五年(一九九三)初出、『源氏物語と白居易の文学』和泉書院、平成十五年(二〇〇三)所収)二八八頁以下。

(8) 大正新脩大藏經の校注「貌」、高麗大藏經「類」、東大寺本『賢愚經』残卷(大聖武)は「狼」、石山寺本「狼」、興聖寺本「狼」とあるが、「狼」は「貌」の異体字である。「類」は、形象・姿・様子のことで、「貌」と同義語である。

(9) 東大寺本『賢愚經』残卷(大聖武)「排」、石山寺本「排」、興聖寺本「排」である。賢愚經を引く経律異相の同箇所も「排」とある。ここでは「鑰^{かぎ}」のほうが意味がとりやすいので用いる。

(10) 岩本裕氏「縁起の文学」(『東方学』第三十輯、昭和四十年(一九六五)七月)は、賢愚經の題名に見られる波斯匿王の王女「金剛」の名は、波闍羅の訳でサンスクリット語でヴァジラーであると指摘される。「金剛」は非常に堅固で破砕しえないものを修飾する語である。

(11) 序論注30参照。

(12) 伊藤美重子氏「敦煌写本「醜女縁起」の依拠する經典の再検討―『賢愚經』と『雜宝藏經』の醜女說話をめぐる―」(土肥義和・氣賀澤保規両氏編『敦煌・吐魯番文書の世界とその時代』、東洋文庫、平成二十九年(二〇一六)四月)。

(13) 「惆悵」の訳は、蔣禮鴻著『敦煌變文字義通釈』(上海古籍出版社、一九九七年)の「猶如説造次、輕率的意思、又有倉猝的意思」による。

(14) 第一章第二節に、金剛醜女変文の「渾身一似黒靴皮」(P3048)と「表着には黒貂の皮衣」(末摘花・二七一)、「錦繡羅衣馥鼻香」(P3048)と「いときよらにかうばしきを着たまへり」(末摘花・二七一)など、末摘花にも金剛醜女変文だけにみられる表現がみられることを述べた。

(15) さらに「上陽白髮人」と金剛醜女変文の類似点について述べるならば、「外人不見見応笑」(上陽白髮人)と、金剛醜女変文の「惆悵莫遣外人聞」(P3048)と、「王郎遣妻不出、恐怕朋友恠咲」(笑)」(P3048)の「咲^{ワラ}」に共通した語句が見られることから、白居易は「上陽白髮人」の表現に、賢愚経もしくは金剛醜女変文の表現を用いたことが考えられる。

結章 敦煌変文と源氏物語の人物造型

はじめに

甘肅省敦煌市は、かつて絲綢之路の交通の要衝として繁栄し、仏教文化が東漸をつづける古代中国、中原地方への門口であった。前秦建元二年（三六六）、敦煌鳴沙山の東面する断崖に莫高窟最初の仏教石窟寺が開かれたと記録にあり、以後千年の時にわたって千余の石窟寺がつくられた。その内の四九二窟が今日まで伝えられている。この第九十八窟に「賢愚経変相部分 波斯匿王女醜女縁」（五代）の壁画が現存する。また、五本の金剛醜女変文が出土したことからも、彼の地において金剛醜女縁の絵解きが行われていたことがわかる。そして敦煌から遙か遠く離れた大阪天王寺にある和宗総本山四天王寺が所蔵する掛福「聖徳太子絵伝」前世譚の部分に、金剛醜女の絵が描かれているのである。第一幅の書画の大半を占める勝鬘夫人伝は、稀代の醜女金剛女は長く深宮に幽閉されていたが、金剛醜女の庭に釈迦が示現して、救世観音を授け、金剛女が観音像を受けると、たちまち絶世の美女に変身し、勝鬘女と名を改めるといふ構図である。この勝鬘夫人伝は、聖徳太子の本地が救世観音であることを説き、さらには、三十五歳條「勝鬘経講讃」に通じる⁽¹⁾。

このように我が国では、金剛醜女は、仏の利益で勝鬘夫人となり、そして、推古天皇の時代に摂政として、内政、外交、仏教の興隆に力を尽くしたという聖徳太子の前世譚に組み込まれるという展開を見せている。

かつて川口久雄氏は、日本文学の隅々にまで敦煌のものが響きわたっているとのべ、金剛醜女変文と源氏物語の末摘花との間に、「二つの醜女の系列がある⁽²⁾」と指摘された。しかしその後、半世紀たった今日に至るまで、川口氏の説を検討するものは皆無であった。本章は本論のまとめとして、金剛醜女変文だけに見られる金剛醜女

の要素と、末摘花をはじめとする、指食いの女、空蟬、花散里といった源氏物語に登場する醜女の要素を考察すること、日本に金剛醜女変文の流れをくむ金剛醜女説話の存在した可能性について検討したい。

一、末摘花の造型と金剛醜女変文

源氏物語の醜女の造型を考察するにあたり、第一章では、末摘花の造型について、賢愚経や金剛醜女説話だけでなく、金剛醜女変文だけに見られる描写の一致点をあげた。本節は、賢愚経の本文が金剛醜女変文ではどのように描かれているか比較し、また末摘花にどのように取り入れられているのか再考したい。

①其女面類^{（三）}、極^{メテ}為^ニ醜惡^ト。肌体^ハ麤^ク、猶如^ニ駝皮^ノ。頭髮^ハ麤^ク強^ク、猶如^ニ馬尾^ノ。

（賢愚経・三五七）

金剛醜女の顔は、極めて醜惡で、肌は「駝皮」、髪は「馬尾」と獣に喩えられる。賢愚経は、「醜惡」「醜形」「極惡」「劇如畜生」「受醜陋形」という語により金剛醜女の醜さを表現しているが、金剛醜女変文では、より具体的に判りやすい描写がされている。

②渾身^ハ又似^{タリ}野猪皮^ニ。——中略——女^ノ縁^ニ醜陋^ニ世間^ニ希^{ナリ}、渾身^ハ一似^{タリ}黒執皮^ト。

（P3048 醜女縁起・612）

金剛醜女の全身は野生の猪の皮に似たり、女の醜陋は世にも希^{まれ}で全身は黒の「執^{なめし}」に似たりとある。末摘花の肌は「色はづかしく白うて真青に」（末摘花・二七〇）と金剛醜女の黒い肌と対極であるが、装束の描写をみると、

聴し色のわりなう上白みたる一襲、なごりなう黒き桂重ねて、表着には黒貂の皮衣、いときよらに香ばしきを着たまへり。古代のゆゑづきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには、似げなくおどろおどろしきこと、いともてはやされたり。

(末摘花・二七一)

と、禁色の色あせた一襲の桂は、元の色が判らないほど黒く汚れ、表着には黒貂の皮衣を身に着けている。金剛醜女の野生の猪の皮は、全身が汚いことの譬えで、末摘花の「なごりなう黒き桂」が対応し、金剛醜女の全身が黒の鞣皮に似ているのは、末摘花の「表着には黒貂の皮衣」を対応させたことが考えられる。黒貂は毛皮の最高級品で、常陸宮家のかつての繁栄と没落を象徴するという見方もあるが、この場面は「似げなくおどろおどろしきこと」と、若い姫君に似つかわしくない奇怪な装いとして、作者が描いていることに注意すれば、表着として全身が黒い毛皮で覆われている末摘花と、全身が黒の鞣皮のような肌の金剛醜女は、見過ごすことのできない重要な一致点にみえる。次に、末摘花の身のこなしについて、源氏の眼をとおして見た様子は、

口おほひしたまへるさへ、ひなびふるめかしう、ことごとしく、儀式官の練り出でたる臂もちおぼえて、さすがにうち笑みたまへるけしき、はしたなうすずるびたり。――中略――ただ「むむ」とうち笑ひて、いと口重げなるもいとほしければ、出でたまひぬ。

(末摘花・二七二)

と、末摘花が袖で口元を袖で隠しておられる格好が、野暮ったく古めかしい。仰々しく儀式官が肩肘を張って歩みでる姿のように思えて、さすがに微笑む様子がちぐはぐで似合わない。――中略――ただ「むむ」と含み笑いをされて、返歌がすぐにできない様子がかわいそうなので、源氏はお出になったとある。高貴な育ちの姫君の身のこ

なしには、ほど遠いといえよう。嫺やかな美しい身のこなしは、末摘花にはまったく見られないのである。賢愚経に金剛醜女の身のこなしの記述はないが、金剛醜女変文では、

③人左右和^{シテ}身^ガ転、——中略——公主全無^シ窈窕^{（４）}、差事^{（５）}非^レ常不^レ小。上唇^ハ半斤有^リ余、鼻孔^ハ竹筒渾小。
生来未^レ省^{ミル}二^{コト}歡喜^{スル}、見^{コト}説^ク二年一笑^ニ。
(P3048 醜女縁起・6―2)

と、人を見る時は左右に身の向きをかえ、公主にはまったく嫺やかさがなく、上唇の重さは半斤余りあって、鼻の穴は竹筒より大きく、生まれてからいまだ喜ばず、三年に一度笑うと、公主らしからぬ身のこなしである。末摘花の「ことごとしく儀式官の練り出でたる臂もち」は、金剛醜女の「人を見るのは左右に身の向きをかえ」と大げさな堅苦しい身のこなしが共通する。金剛醜女の「上唇の重さは半斤余り」は日本語の口が重いと理解すれば、末摘花の「いと口重げなる」に通じる。末摘花が「さすがにうち笑みたまへるけしき、はしたなうすずるびたり」と、めったに笑わないのは、金剛醜女が「生まれてからいまだ歡喜をみず、三年に一度笑う」と共通する。金剛醜女の鼻は「鼻の穴は竹筒より大きく」とあり、末摘花も「あななたはと見ゆるものは御鼻なりけり」（末摘花・二七〇）と形は違うが、極端に醜い鼻であることが一致する。このように二人の嫺やかさのない、仰々しい身のこなしや、滅多に笑わないと言う性格は、よく似ている。

金剛醜女変文の金剛醜女が結婚する際に身に付けた装束は、

④錦繡^ノ羅衣^{（かんばしき）}馥^{（６）}鼻香。
(P3048 醜女縁起・6―4)

と、錦繡の羅衣、鼻に馥^{かんばし}き馥郁たる香がするとある。「錦繡の羅衣」は、色とりどりの糸で刺繡をほどこした

大変高価な装束のことで儀式などの正装に用いる。その上に高価な香木の香りをこめている。極めて醜い醜女に立派な装束を身につけ、良い香りまでもがするというのは、極めて珍しい設定といえよう。ところが、末摘花も「いときよらに香ばしきを着たまへり。古代のゆゑきたる御装束なれど」（末摘花巻・二七一）と、良い香を薫き込め、由緒ある装束を身に付けているのである。このように金剛醜女変文にみられる醜女の要素が、末摘花と一致することは偶然とはいい難く、因果関係があるようにみえるのである。

二、指食いの女の造型と金剛醜女変文

本論第四章では、雨夜の品定めと呼ばれる女性談義に登場する指食いの女の造型について、「上陽白髮人」と金剛醜女との関わりを考察をした。この指食いの女の、

みにくき容貌かたちをも、この人に見やうとまれむと、わりなく思ひつくろひ、うとき人に見えうとば、おもてぶせにや思はむと、憚り恥ぢて、見慣るるままに、心もけしうはあらずはべりしかそ、ただこの憎きかた一つなむ、心をさめずはべりし。

（帚木・六三）

「うとき人に見えうとば、おもてぶせにや思はむ」について、古註釈は、白居易の新樂府「上陽白髮人」の「外人不見見うと笑」（外うとき人に見えうとじ、見えなば笑はれなむ）の関わりを示す。しかし、上陽人は芙蓉や玉に喩えられた美女で、その為に楊妃に睨まれて生涯独身であるが、一方の指食いの女は、「みにくき容貌かたち」であることや、左馬の頭の妻という設定や、「うとき人に見えうとば、おもてぶせにや思はむ」と夫を氣遣う性格など「上陽白髮人」にない

要素が見られることに注目した。「外人不見見応笑」は、白居易以前の漢詩文に見出し難い表現であるが、賢愚経や金剛醜女変文に類似する言葉が散見することから、「上陽白髮人」の関わりをふまえて、金剛醜女説話との関わりを考察した。第四章三節では、金剛醜女変文との考察はしているが、さらにもう一度確認したい。

金剛醜女変文では、父王は娘の夫に、娘が人離れした醜貌のために、

⑤ 惆悵^シ莫^{レス}遣^{スコト}外人^ニ聞^ラ

(P3048 醜女縁起・6—3)

「輕々しく外^{ウト}き人に聞かせることはならない」と命じる。これは賢愚経の「勿^レ令^{シムル}外人^ニ覩^ミ見^ミ面^ヘ状^ヲ」(賢愚経・三五七)の、「覩見」と「聞」の表現の違いはあるけれども、金剛醜女の醜貌を「外人」に世間に知られないようにすることが共通する。金剛醜女変文の「外人」の訓と、指食いの女の「うとき人」が一致するが、これは、金剛醜女変文の本文が、賢愚経に依拠することによるといえる。ところが、原拠の仏典にはない金剛醜女変文だけにみられる表現や要素が、指食いの女にも見られるのである。賢愚経に、金剛醜女の夫が妻の醜貌を恥じるという要素はないが、金剛醜女変文では、

⑥ 只^ニ為^レ思^フ君^ノ多^ク醜^シ貌^ヲ、我^レ今^ニ恥^ス辱^ス会^ニ諸^ト賓^一。

(P3048 醜女縁起・6—5)

夫は、「君のはなはだしい醜貌を思うと、私が今、諸賓を招いて宴会をすることは、はずかしめを受ける」と嘆いている。指食いの女の場合も、

みにくき容貌^{かたわ}をも、この人に見やうとまれむと、わりなく思ひつくろひ、うとき人に見え、おもてぶせに

や思はむと、憚り恥ぢて

(帚木・六三)

と、「みにくき容貌」^{かたち}なので、夫に嫌われないかと、むやみに取り繕い、親しくない人に会うと、(左馬の頭が)不面目な思いはせぬかと遠慮をして恥じるのは、醜貌が夫の恥になるという要素が共通する。金剛醜女変文の金剛醜女は、

⑦ 妹子雖^ハ不^レ二端^ニ嚴^ニ、手頭裁縫^ハ最^モ巧^{ナリ}

(P3048 醜女縁起・6—4)

と、金剛醜女は器量は悪いけれども、手先が器用で「裁縫」が最も巧みであるとある。指食いの女は、

龍田姫と言はむにもつきなからず、たなばたの手にも劣るまじく、その方も具して、うるさくなむはべりしとて、いとあはれと思ひ出でたり。中將、そのたなばたの裁ち縫う方をのどめて、長き契りにぞあえまし。

(帚木・六七)

と、(染色の腕前は)龍田姫といっても不似合いではなく、(裁縫にかけては)七夕の織女の腕前にも劣らず、その方面(染色・裁縫の技術)も身に備えていて巧みであったと、(左馬の頭は指食いの女を)思い出している。頭の中將は、「そのたなばたの裁ち縫う方は二の次にして、長い契りにあやかたらよいのに」という。「裁ち縫ふ」は、染色、機織り、布を裁断して縫うことで、金剛醜女と指食いの女は手先が器用で裁縫の巧みなことが共通する。このように指食いの女の造型にも、金剛醜女変文の、外き人に醜貌を見せない、妻の醜貌が夫の恥になると氣遣う、裁縫が巧みという美質が共通する。

三、空蟬・花散里の造型と金剛醜女変文

簾木巻の後半から登場する空蟬は、控えめで慎み深い女性として描かれ、源氏との関係を拒絶し源氏を深く嘆かせる女性である。その空蟬の容貌は、

かの空蟬の、うちとけたりし宵の側目には、いとわろかりし容貌ざまなれど、もてなしに隠されてくちおしうはあらざりきかし、
(末摘花・二七五)

と、雪の日の朝に末摘花の醜貌をはつきりと見た源氏は、あの空蟬を思い出し、とても醜い容貌であるけれども、たしなみのある振る舞いに、欠点が隠されて悪くないと思う。これは、空蟬と末摘花を見比べて、空蟬の容貌が悪いくことを明示している。末摘花と比較される空蟬にも、金剛醜女説話の関わりが考えられる。

空蟬が軒端萩と囲碁を打つところを、源氏が覗き見ると、

母屋の中柱に側める人やわが心かくると、まづ目とどめたまへば、濃き綾の単衣襲なめり、何にかあらむ上に着て、頭つき細やかに小さき人の、ものげなき姿ぞしたる。顔などは、差し向かひたらむ人などにも、わざと見ゆまじうもてなしたり。手つき痩せ痩せにて、いたうひき隠しためり。
(空蟬・一〇七)

母屋の中柱に横向きに座る人が、あの人かと注目すると、「頭つき細やかに小さき人の、ものげなき姿ぞしたる」と、頭の形が細く、小柄な人で、目立たない姿をしている。顔をわざと、向き合っているひとに見えないように

気を付けているのは、女性のたしなみというより、「いとわろかりし容貌」を隠す。その手は、「手つき痩せ痩せにて」とやせ細っている。賢愚経には手指の描写はないが、金剛醜女変文をみると、

⑧女縁^ノ醜陋^ノ一世間^{ニナリ}希、渾身^ハ一似^{タリ}黒靴皮^ト——中略——十指^ニ纖纖^ニ如^ク露柱^ノ、一双眼^ハ子似^{タリ}木槌離^一

(P3048 醜女縁起・6—2)

と「十指纖纖」とある。「露柱」と「木槌離」は具体的に何を意味するのか未詳であるが、金剛醜女の醜さの描写であることは前後から読み取れるので、「十指纖纖」は細く美しい指の形容ではなく、痩せ痩せた指と解釈ができる。空蟬の「手つき痩せ痩せ」とやせ細った指が共通する。空蟬が、

たとしへなく口おほひて、さやかにも見せねど、目をしつとつけたまへれば、おのづからそば目に見ゆ。目すこし腫れたる心地して、鼻などもあざやかなところなうねびれて、にほはしきところも見えず。言ひ立つれば、わろきによれる容貌^{かたち}をいいたうもてつけて、このまされる人よりは心あらむと、目とどめつべきさましたり。

(空蟬・一〇九)

と、空蟬が「たとしへなく口おほひて」と袖で口元を隠し、末摘花も「口おほひしたまへるさへ」と顔を隠すのは、二人が「わろきによれる容貌^{かたち}」を隠すことが共通し、金剛醜女がその醜貌を人に見せないことに一致する。また「鼻などもあざやかなところなうねびれて」は、末摘花も象のような鼻で、金剛醜女変文の「鼻の穴は竹筒より大きく」と、三人は鼻の形の悪いことが共通する。このように空蟬は、末摘花ほどの極端な醜女ではないが、よくみると、末摘花との共通点がみられ、その醜形の描写は金剛醜女変文と類似するのである。

源氏物語には、もう一人、金剛醜女の要素を受け継ぐと思われるのが、花散里である。その花散里も末摘花と

比較されている。

かの花散里も、あざやかに今めかしうなどは花やぎたまはぬ所にて、御目移しこよなからぬに、咎多う隠れにけり。

(蓬生・七九)

と、末摘花は華やかさのない花散里と大した違いがなく、見た目の欠点の多くは隠れてしまったとある。末摘花は、極めて容貌の醜い姫君であるが、見た目の欠点が隠れてしまったのは、金剛醜女が変貌したように、末摘花も変貌したといえる。しかし、花散里は、末摘花と変わらない醜女なのかという意味にもとれる。初音巻で花散里の住む夏の御殿を見舞った源氏は、花散里について、

縹は、げに、にほひ多からぬあはひにて、御髪^{ぐし}などもといたく盛り過ぎにけり。やさしき方にあらねど、えびかづらしてぞつくろひたまふべき。われならざらむ人は、見ざめしぬべき御ありさまを、かくて見るこそうれしく本意あれ。

(初音・一五)

「われならざらむ人は、見ざめしぬべき御ありさま」と、私以外の人だったら厭気のしそうな様子を、こうしてお世話するのは自分としても嬉しく満足であると思う。これは、源氏が末摘花の醜貌を見て、

我ならぬ人は、まして見忍びてむや。わがかうて見馴れけるは、故親王のうしろめたしとたぐへ置きたまひけむ魂のしるべなめりとぞ思さるる。

(末摘花・二七三)

私以外の人ならば、なおさら我慢できないと思う表現とほぼ一致する。このように花散里は、末摘花と対照させながら、醜貌の女性であることが描かれている。野分巻に源氏は花散里を見舞うと、

何にかあらむ、さまざまなるもの色どもの、いときよらなれば、かやうなる方は、南の上にも劣らずかしと思す。御直衣、花文綾を、このころ摘み出だしたる花して、はかなく染め出でたまへる、いとあらまほしき色したり。

(野分・一四〇)

花散里は、「かやうなる方は、南の上にも劣らずかし」と、染色や裁縫などの技術は、紫の上にもひけをとらぬ巧者で、夕霧の装束をかいがしく用意している。染色や裁縫は貴族の女性の教養の一つであるが、醜貌の女性が最も裁縫が巧みであることは、金剛醜女変文の金剛醜女と一致する。

このように金剛醜女変文だけにみられる①から⑧要素が、源氏物語に登場する醜女の造型に見られることは、日本にも金剛醜女変文の流れをくむ賢愚経を原拠とする内容の豊かな金剛醜女説話のあったことが考えられるのである。

まとめ

以上の考察から、源氏物語に登場する末摘花・玉鬘・指食いの女・空蟬・花散里の造型をめぐる発想や表現に、金剛醜女説話の受容について論じた。金剛醜女説話は、絵解きにより広く民衆に受け入れられ、さらに絲綢之路を経て日本に伝わり、源氏物語に取り入れられたといえよう。また源氏物語の醜女の造型に、金剛醜女変文だけ

にみられる要素が一致することは、日本に賢愚経を原拠とする金剛醜女変文の流れをくむ説話のあった可能性が考えられるのである。

では作者はどういう意図で、金剛醜女説話を源氏物語に取り入れたのかという疑問が残る。単に醜女を描く為とは考えにくい。我が国では金剛醜女説話が、勝鬘夫人の話となり、聖徳太子伝に組み込まれていることに、何らかの糸口があるのではないだろうか。『東大寺要録』に「聖武天皇は聖徳太子の後身にて救世観音の垂迹なり」とあり、『栄華物語』には「正（聖）徳太子の御日記に、皇城より東（法成寺）に仏法弘めん人を我と知れ」と、藤原道長は聖徳太子の生まれ変わりと言う伝承がある。今後は、聖徳太子の後身の伝承と源氏物語との関わりについて課題としたい。

（１）作品の概要と図様構成については、村松加奈子氏「四天王寺所蔵 二幅本聖徳太子絵伝」（『国華』第一四〇八号、二〇一四年）に詳しい。

（２）川口久雄氏「金剛醜女変文と日本の説話文学」（『漢文教室』第五九号、一九六二年三月初出。『敦煌よりの風』３ 敦煌の仏教物語【上】、明治書院、一九九九年所収）。

（３）大正新脩大蔵経の校注「貌」、高麗大蔵経「類」、東大寺本『賢愚経』残卷（大聖武）は「狼」、石山寺本「狼」、興聖寺本「狼」とあるが、「狼」は「貌」の異体字である。「類」は、形象・姿・様子のことで、「貌」と同義語である。

（４）「窈窕淑女、君子好逑」（『詩経』周南、関雎）。

（５）「差事」は「奇事・怪事」のことで、普通と異なる奇異な事を意味する（禮鴻編『敦煌文献語言詞典』、杭州大学出版社、一九九四年）。

（６）S4511「復」、S2114・P2945「複」とある。

(7) 「惆悵」の訳は、蔣禮鴻著『敦煌変文字義通釈』（上海古籍出版社、一九九七年）の「猶如説造次、輕率的意思、又有倉猝的意思」による。

第一章 川口松太郎『愛染かつら』における「長恨歌」の受容について

はじめに ―愛染堂勝鬘院「愛染かつら」の霊木―

大阪天王寺にある愛染堂勝鬘院⁽¹⁾は、「愛染さん⁽²⁾」の通称で浪速^{なにわ}の人に親しまれ、「愛染かつら⁽³⁾」と呼ばれる古木がある。桂^{けい}の木に凌霄花^{れいそう}（ノウゼンカヅラ）⁽⁴⁾が巻き付き一体となった姿は、仲の良い男女が一緒にいるかのように見えることから、恋愛成就・夫婦和合の霊木として知られる。この霊木をモデルにして、川口松太郎が小説『愛染かつら』を書いたと伝わる⁽⁵⁾。

東京浅草生まれの川口は、大正十二年（一九二三）の関東大震災により、小山内薫の薦めで大阪の出版社プラトン社に編集者として入る。ここで花柳章太郎の紹介により、最初の妻となる大阪新町の高級茶屋「大万」の一人娘舞妓静子（本名、照）と出会う⁽⁶⁾。川口は、花街の信仰の厚い「愛染さん」について、舞妓静子から「縁結びの神仏⁽⁷⁾」であることや、「かつらの木に恋人同志が誓うと必ず結ばれる」という言い伝えを聞いたのではないだろうか。また同年に、川口が師と仰ぐ谷崎潤一郎⁽⁸⁾が関西に移住し、川口の勤めるプラトン社から戯曲『無明と愛染』（プラトン社、大正十三年（一九二四）五月）を出版する。この谷崎の作品から、愛染明王が「熾盛な恋着を浄菩提へと転じる愛染明王⁽⁹⁾」について学んだことも考えられる。

小説『愛染かつら』は、津村病院に勤務する美貌の看護婦高石かつ枝と病院長の令息津村浩三の悲恋譚である。『婦人倶楽部⁽¹⁰⁾』（昭和十二年（一九三七）一月）昭和十三年五月）に連載され、女学生や主人公と職業を同じくする看護婦に人気を博する。昭和十三年に田中絹代・上原謙主演の映画化で、「熱狂の波はたちまち全国津々浦々にまで及び、六人に一人がこの映画を見た⁽¹¹⁾」と日本中にブームが起こる。主題歌「旅の夜風⁽¹²⁾」は、

映画封切りの五日前に発売されると、八十万枚（レコード盤）を超す売行きとなる⁽¹³⁾。昭和十三年（一九二八）から昭和三十七年にかけて映画化が七回、昭和四十年（一九六五）から昭和五十一年の間には、連続テレビドラマとして三回、単発ドラマとして一回放映され、高視聴率を出す⁽¹⁴⁾。元テレビディレクターの野崎元晴氏は、「愛染かつらは芸術的にも技術的にも価値あるものではないかもしれない。また映画史に残る名画と云われるものでもないだろう。併し劇場につめかけた満員の観客をハラハラさせ、吐息をつかせ、またスクリーン上の主人公と観客が一体になって興奮させる映画は数少ないだろう⁽¹⁵⁾」と記す。

このように『愛染かつら』は、昭和を代表するメロドラマとして国民的人気を得るが、管見によれば文学研究の対象とされていない。本稿は『愛染かつら』の主人公の造型や構成に、白居易の「長恨歌」と陳鴻の「長恨歌伝⁽¹⁶⁾」と類似した表現が見られることから、両者の関わりを想定して考察したい。また作者が用いたテクストについて考察することで、日本人が親しんだ「長恨歌」を、近代日本の大衆文学に取り込む手法にせまる。

一 戦前における「長恨歌」の受容について

『白氏文集』が伝来以来多くの日本文学に影響を与えたことは、小島憲之氏⁽¹⁷⁾や新聞一美氏⁽¹⁸⁾の研究に詳しい。「長恨歌」の受容は、昭和九年（一九三四）に出版された遠藤実夫氏の『長恨歌研究⁽¹⁹⁾』がある。遠藤氏は「長恨歌故事に關係ある作品も明治三十年過ぎ頃までは殆んど見ることが出来なかつたが、大正の中葉頃に至るや作家の間には題材をこゝに求めて戯曲なり小説なりを作る者が可成り多く出て来た⁽²⁰⁾」と指摘される。

改めて、明治以後から戦前に出版された「長恨歌」に關係する作品の調査をすると、①から⑮の作品がみられた。②⑧⑨⑪⑫⑮は『長恨歌研究』に紹介されるが、その他は今回加えた。※は舞台化された興行年と劇場名で

ある。

①尾崎紅葉『多情多恨』（前編、明治二十九年（一八九六）二月二十六日、同六月十二日、後編、同九月一日、同十二月九日、読売新聞）

「李夫人」・「長恨歌」と源氏物語の影響を受けた作品⁽²¹⁾。

②宮崎繁吉（来城小隠）『楊貴妃』（大学館、明治三十二年（一八九九）十二月）

楊貴妃に関する漢詩文の注釈書。緒言に「台湾・中国より持ち帰った書籍の中から世人の未だ貴妃の全豹を窺はざるものに割愛す」と、楊貴妃に関する書を人々に贈るとある。内容は「羅貫中が著はす所の隋唐志伝を以て骨子と為し、別に正史と野条と諸家の詩文集とを取り綜錯混化、縦横に鋪帳」したものの。

③岩井正次郎（松風軒）『長恨歌評釈』（大学館、明治三十二年（一八九九）十二月）

「長恨歌」の百二十句の注釈に、「楊貴妃命とはいへ、寿王を棄てゝ甘して玄宗と契る、是義父即舅と通するものに非ずや」など思想的な批判を加える。

④加藤千蔭『長恨歌』（日本橋 小林新兵衛発行、明治三十五年（一九〇二）六月）
江戸時代の国学者で書家加藤千蔭氏による習字の手本。

⑤大和田建樹『長恨歌』（東京出版社、明治三十五年（一九〇二）九月）

「漢の帝のその昔 美人を朝に召さんとて」と、「長恨歌」を七五調に訳したもの。

⑥篠原嶺葉『長恨歌』（如山堂書店、明治四十五年（一九一二）三月）

通俗小説。はしがきに「其長恨歌と題したるは、彼の白楽天の長恨歌に似通ひたる節^{ふし}在るにはあらで、唯尽きぬ恨を意味して題したるのみ」とある。しかし、構成や表現に「長恨歌」や源氏物語の影響が見られる。愛し合う男女が再び結ばれるであろうとする結末からは、川口の『愛染かつら』に与えた影響が考えられる。

※新派男女合致努力会「悲劇長恨歌」(大正二年(一九一三)八月興行⁽²²⁾、東京三崎座)。

⑦岡本綺堂「長恨歌」(『梨の葉集』所収、春陽堂、大正七年(一九一八)六月)

「長恨歌」をもとにした戯曲。七月七日の玄宗と楊貴妃の比翼連理の誓いの場面で始まり、蜀に逃げる途中に兵士の狼藉により、楊貴妃が縊り殺される場面で終わる。

※大正十年(一九二一)五月興行、市村座。大正十三年(一九二四)十二月興行、京都南座⁽²³⁾。

⑧久保青濤『多情多恨楊貴妃哀史』(東京刊行社、大正八年(一九一九)九月)

歴史小説。序に「この伝の為に参考としたのは、唐書皇妃伝、龍威秘書、唐人說薈、五朝小説、說郛、明皇伝、長恨歌伝、長恨歌琵琶行攻異及略解、通俗唐玄宗軍談等であつた」と識す。

⑨近藤経一『玄宗と楊貴妃』(新潮社、大正九年(一九二〇))

玄宗の武恵妃を亡くした後の、楊貴妃との出会いから別れまでの心境を描く。

※十三代目守田勘弥の玄宗と村田嘉久子の楊貴妃で、大正十年十月興行、帝国劇場⁽²⁴⁾。

⑩『大正十年五月興行 筋書 市村座』(大正十年(一九二一)五月、発行者 上條勝太郎)

第一番目、岡本綺堂作「長恨歌」(二幕)の序幕「長生殿の場」と大詰「馬嵬駅の場」のあらすじを掲載。まえがきに「此狂言は岡本綺堂氏の脚本中未だ舞台に上場された事の無い、珍らしい出しもので御座います、題材を白楽天の長詩に取り、玄宗皇帝と楊貴妃の史実を劇化されたものであります」とある。

※楊貴妃を六代目尾上菊五郎、玄宗を七代目坂東三津五郎が演じる。

⑪菊池寛「玄宗の心持」(『菊池寛戯曲集』第二卷、大正十一年(一九二二)五月)

一幕。長安から馬嵬へ落ち延びる途中に楊貴妃の齒が痛み出し、玄宗が楊貴妃の齒を抜くという場面から、自分の意志で死を選ぶ楊貴妃が描かれる。

※二代目市川猿之助の玄宗と初瀬浪子の楊貴妃で大正十一年(一九二二)十月興行、有楽座。役者不明、大

正十六年九月興行、歌舞伎座 (25)。

⑫ 番匠谷英一『楊貴妃』(藝楽道場叢書、春陽堂、大正十一年(一九二二)十一月)

五幕十二場で、楊貴妃と梅妃の争い、李林甫・楊国忠・安祿山の権力闘争、安祿山の楊貴妃への横恋慕、誇り高い楊貴妃の玄宗への貞操と忠義、そして楊貴妃は自らの意志で玄宗から死を賜るといふ筋書き。

※興行日時不明。

⑬ 三上於菟吉『楊貴妃の欲望』(二松堂書店、大正十二年(一九二三)六月)

通俗小説。楊貴妃は、永遠の美貌を保つ方法を、市井の妖婆に頼むという筋書きの「楊貴妃の欲望」と、荔枝を好むという伝承をもとに書いた「楊貴妃の贈物」の二編。

⑭ 米田・太郎『西太后・楊貴妃』(支那文献刊行会、昭和三年(一九二八)二月)

通俗小説。玄宗は武恵妃の死後、高力士に心に適う美女を探させることに始まり、楊貴妃一族の栄枯盛衰を描く。

⑮ 島津久基「長恨歌翻訳」(『対訳源氏物語講話』巻一、矢島書房、昭和五年(一九三〇)十一月)

「きりつぽ」の条に、長恨歌の一句ごとに、訓読・翻訳・注が付く。

⑯ 下中彌三郎編『松田南溟 道德経長恨歌』(和漢名家習字本大成20、平凡社、昭和九年(一九三四)三月)

書家松田南溟(万延元年(一八六〇)生、昭和四年(一九二九)没)による習字の手本。

⑰ 吉川英治「江戸長恨歌」(大日本雄弁会講談社『婦人倶楽部』、昭和十三年(一九三八)六月)

『愛染かつら』の次の連載小説。観世家の門下生の色男片山賛四郎は、旗本の息女珠貴と婚約をしながら、儒家の娘八重をたぶらかして罪を重ねるが、妻珠貴と八重の真実の誠にふれて心を改める話。片山家に伝わる二管の笛に比翼と連理という銘がつくことにちなむ命名。

⑱ 田中克己『楊貴妃とクレオパトラ』(東京ぐるりあ・そさえて、昭和十六年(一九四二)十月)

歴史小説。あとがきに「いまの中学校や高校では、歴史で楊貴妃やクレオパトラのことは教へないのである。それを補ふのが、映画や私のこの本なのだとしたら、少々よみづらい点もゆるしてもらへるかと思ふ」とある。装丁は棟方志功。

このように、明治二十九年（一八九六）から昭和十六年（一九四一）にかけて、「長恨歌」を粉本にした歌舞伎や新劇の上演・通俗小説の出版・習字の手本等が盛行したことは、多くの例証により確かめることができる⁽²⁶⁾。「長恨歌」の盛行した時期は、川口（明治三十二年（一八九九）～昭和六十年（一九八五））の生まれ育った頃と重なる。尋常高等小学校を終えて洋品店や質屋の丁稚奉公のあと、本好きなことから、数えの十四歳（以下、数え年）で古本の露天商を始める⁽²⁷⁾。仕入れた古本の中には①から⑥のいずれかの作品が含まれ、川口も読んだのではないだろうか。

大正三年（一九一四）から五年（十五歳～十七歳）は、郵便局に勤めながら文学への夢を膨らませ、浅草の宮戸座・市村座・常磐座・金竜館に通い続ける⁽²⁸⁾。大正八年から十年（二十歳～二十二歳）頃は、講談師悟道軒円玉の元で講談速記⁽²⁹⁾を手伝う。円玉について「漢籍の素読などは見事なもので難しい漢文をすらすら読む。十八史略とか漢楚軍談というような中国の歴史小説も自在に読む⁽³⁰⁾」と書く。そして、「私がいくらかでも江戸時代の文物に通曉しているのは円玉の家にいたお陰だ⁽³¹⁾」と回想することから、漢籍の素養は円玉のもとで養ったことがわかる。この頃、幼なじみの七代目尾上栄三郎と市村座で再会し、戯曲を書くことに興味を持ち始める⁽³²⁾。栄三郎の父尾上梅幸が帝国劇場の座頭⁽³³⁾であったことから、芝居好きの川口が長恨歌に関する戯曲を見たことが考えられる。特に文壇の恩人である菊池寛⁽³⁴⁾の「玄宗の心持」は、見ている可能性が高い。『愛染かつら』の連載から十八年後の昭和三十年（一九五五）、映画「楊貴妃⁽³⁵⁾」の脚本を手掛け、同時に小説『楊貴妃⁽³⁶⁾』を出版する。中国文学者の吉川幸次郎氏は、この映画の感想を「日本の色彩映画を見るのは、

これがはじめてである。色彩は、中国における高貴な色である黄と西方における高貴な色である紫とを、主調として圧倒的に美しい。―中略―脚本は何よりも唐の詩人、白樂天の「長恨歌」にもとづいている⁽³⁷⁾」と述べる。

二、『愛染かつら』と「長恨歌」・「長恨歌伝」の比較

『愛染かつら』は、「美貌の看護婦高石かつ枝は、死別した夫との間に生まれた娘敏子の存在を隠し、独身として津村病院で働く。津村家は御典医を勤めた名家で、津村浩三はその五代目を継ぐ身の上である。かつ枝と浩三は、愛染堂の前にある「愛染かつら」の木の下で将来を誓い、駆け落ちを約束する。しかし、かつ枝は娘敏子の急病の為に、京都市の夜行列車に遅れ、その後もすれ違いが重なり別れる。一年後、人気歌手となったかつ枝は浩三と再会し、二人の将来の幸福を暗示する場面で終わる」という構成である。

作者川口の関心の中に、「長恨歌」があつたことは前節で述べたとおりである。では具体的に、どのようなテキストによって、『愛染かつら』の表現に仕組んだのであろうか。「長恨歌」の注釈資料は、江戸時代出版された和刻本版本の『長恨歌抄⁽³⁸⁾』・『歌行詩⁽³⁹⁾』・『歌行詩諺解』等がある。これらのテキストのうち本稿が目するののは、『歌行詩』の本文に釐頭（頭注）を加えて刊行された『歌行詩諺解』（貞享元年（一六八四）版）である。この書物は、国会図書館・東京大学付属図書館・慶應大学付属研究所斯道文庫・関西大学などに所蔵される他、昨今においても古書目録に散見することから、戦前までは広く流布していたことが考えられる。この『歌行詩諺解』の頭注と『愛染かつら』の表現に一致が見られることから、両書の関わりを想定して比較する。

1、「長恨歌」・「長恨歌伝」と『愛染かつら』の誓いの場面の類似

「長恨歌」の玄宗と楊貴妃の二人の愛の誓いの場面は、

① 七月七日長生殿 フミツキ 夜半無^ヤ人私^{ハンシテ}語^{サ、メゴトセントキ}時

（『歌行詩諺解』長恨歌、四八丁才）

と「私語」に「サ、メゴト」と訓が付く。「長恨歌序」頭注は、

② 七月七日長生殿ニヲイテ夜半人無シテサ、ヤ、キ、サ、メ、ゴ、ト、セシ時密契ノ誓ヲ玄宗トセシヤウニモアリ

（『歌行詩諺解』長恨歌序、三二丁ウ）

と「サ、ヤキ」・「サ、メゴト」とある。『愛染かつら』の浩三とかつ枝の誓いの場面も、

（『愛染かつら』愛染堂、一一〇頁）

この樹につかまつて誓ひの言葉[、]をさ[、]、や[、]け[、]ば[、]です。

このかつらの樹につかまつて、改めて誓ひのさ[、]、や[、]きを聞かして下さい。

（『愛の染かつら』愛染堂、一一一頁）

と「長恨歌」の「私語」の「ささやく」の訓が見られるが、宮内庁所蔵『那波本 白氏文集』や『金沢文庫本 白氏文集』の書き入れを見たとは考えにくい。国語辞書⁽⁴⁰⁾で「私語」の用例を見る事はできるが、部分的な引用ではなく、注釈書の訓を使ったのではないだろうか。

次に、『歌行詩諺解』の注釈の一致をあげる。「長恨歌」の有名な一句に、

③在^レ地願^ハ爲^ハニ連理枝^ト一 の下段に、樹一枝相^ハヒ向^ハヒ連ナリ

(『歌行詩諺解』長恨歌、四八丁才)

と「相^レヒ向^レヒ」と注がつく。『愛染かつら』は、浩三がかつ枝に対して、

かつらに手^ハを置^ハいて、下^ハさい、僕^ハに對^ハひ合^ハつて立^ハつて下^ハさい。

(『愛染かつら』愛染堂、一一〇頁)

と乞う。「かつらに手^ハを置^ハいて」は、二人が「愛染かつら」の樹を介して繋がることから、「枝^ハを交^ハはす」・「連理の枝」を暗示させ、「相^レヒ向^レヒ」と「對^レひ合^レつて」は、動詞「むかふ」が共通する。「長恨歌伝」には、

④時夜^ニ殆^{ホト}半^{ンド}、休^{ヤス}侍衛^シ於^エ東^イ西^ヲ廂^ア一、獨侍^リ上^ベ。上^カ憑^ツ肩^ニ而^リ立^リ、因^テ仰^テ天^ニ感^ジ牛^ノ女^ヲ事^ヒ密^ニ

相^イ誓^チ心^ニ一、願^ク世^ヨ々^ハ為^ハ夫^ト婦^ト一。言^イ畢^ハ執^テ手^ヲ、各^タ鳴^ガ咽^イ。此^レ獨^リ君^ヲ主^ヲ知^ラ之^ノ耳^ミ。

猶^ヲ私^レ也

ナキムセフ

(『歌行詩諺解』長恨歌伝、二五丁才)

と、玄宗と楊貴妃は密かに二人だけの誓いを行う。「上肩ニ憑ツテ立リ」は、玄宗が楊貴妃の肩に身よせる動作から、下定雅弘氏は「玄宗の思ひは先にあり、玄宗が貴妃をリードしてなされている⁽⁴¹⁾」と指摘される。浩三の思ひもかつ枝より先にあり、誰にも知られないように、かつ枝を人気のない場所の愛染堂に誘う。そして、

「今、僕は古い迷信にでも、馬鹿々々しい云ひ伝へにもすがりつきたい気持ちで一杯です。どうか、このかつらの樹につかまつて、改めて誓^ハひのさ^ハ、や^ハきを聞^ハかしてください。」「いえ、それは……。」「此処まで来

て悲しい事を云はないで下さいね、祖先の菩提寺の愛染かつらの下に立つて……。見上げる浩三の目が明らかに涙ぐんでゐる。

（『愛染かつら』愛染堂、一一〇頁）

と、かつ枝に「誓ひのさゝやき」を求める。これは玄宗がリードして楊貴妃と誓いをする状況と同じである。「長恨歌伝」の「願クハ世々夫婦ト為ラムト」と「貴女と結婚の目的をとげる」（『愛染かつら』愛染堂、一一二頁）は、「結婚の約束」が一致する。玄宗と楊貴妃は「言ヒ畢ツテ手ヲ執テ各ニ嗚咽ス」と感極まってすすり泣く。浩三も「目が明らかに涙ぐんでゐる」と泣いている。かつ枝は「汚れ多い自分の罪障がこの上神を偽つては、行く末の身の上も恐ろしい」（『愛染かつら』愛染堂、一一二頁）と、誓いを躊躇して泣けない。しかし、「真実一路の叫び声はかつ枝の胸を打たずには置かなかつた」（『愛染かつら』愛染堂、一一二頁）と、浩三の思いに感動するのは、楊貴妃の心境に通じる。これらの言葉と状況の表現の一致から、『愛染かつら』の誓いの場面は、楊貴妃と玄宗の比翼連理の誓いの場面を使ったことがわかる。

2、楊貴妃と高石かつ枝の類似

「長恨歌伝」の楊貴妃は、

⑤得^{タリコウノウウノ}二弘農^{エングムスメヲ} 楊玄琰^ニ女^ニ 于寿邸^ニ。既^ニ筭^{カンサシセリ} 矣。

（『歌行詩諺解』長恨歌伝、六丁ウ）

とあり、「楊玄琰ガ女ヲ寿邸ニ得タリ。既ニ筭セリ」について、下定氏は「ややぼかした言い方である。これだと適齢期になっているというだけで、まだ結婚していないかのようにも読める」と指摘される⁽⁴²⁾。かつ枝は、

国元の反対を押切つて結婚しましたからまだ入籍が出来ません。良人の死後、生まれた子供は姉夫婦の子供として届け出て、――中略――現在の独身と云ふ風に解釈して今日まで無事に働いて来たのです。

（『愛染かつら』秘めし身の上、二四頁）

と正式に入籍をせず、娘敏子を姉夫婦の子として独身とするなど、浩三との出会いの前に複雑な過去がある。これは楊貴妃が玄宗との出会いの前に寿王の妃であったという、史実が曖昧な表現の「長恨歌伝」と近いといえる。次に楊貴妃の資質の表現をみると、

⑥ 天生麗質 難二自棄一 一朝選 在二君王側一
ノナセルレイシツナレバシミステ
 ウルハシキ スガタナレバ スタリ

（『歌行詩諺解』長恨歌、三二丁ウ）

と、「天生麗質」という言葉で言い表される。かつ枝も、

磨かざる技巧が巧まぬ美しさで聴衆を捉へる。天稟と云ふべきか、麗質と云ふべきか。

（『愛染かつら』順風、二八八頁）

と「天稟」・「麗質」が使われる。「天生」と「天稟（稟の俗字）」は生まれながらの性質のことで、楊貴妃の「天生麗質」とかつ枝の「天稟麗質」は同じ意味である。

「天生麗質」について、『歌行詩諺解』だけに、次の頭注が付く。

⑦ 天然ト生レツキタル美人ナリ麗質ハウルハシキスカタナリ難自棄トハイカニウルハシク美ナルスガタナリ
テシン
 キヨシ
 共挙止ノタチフルマイタヲヤカナラズ淡粧濃抹ノヨソヲイカザリナク、香薫ヲ身ニホノメカサバルモノアリシ

ニ此ノ人ハモトヨリ美麗ナリシニ猶マシテ清ク花飾クワシヨクシテ自ラ身ヲステズシ玉フトナリ一説ニ難自棄トハ自

ラ姿ヲカザラズ打棄醜婦シウフニヒトシカラマク欲スレ共此人天然トウルハシク生レツキ玉ヘバ花飾ヲホドコサ
ミニクシ

ズ、ソ、ノ、マ、ニ、シ、玉、ヘ、共、ヲ、ノ、ヅ、カ、ラ、ウ、ル、ハ、シ、キ、ス、ガ、タ、ハ、ス、テ、ガ、タ、シ、ト、云、フ、心、ナ、リ

（『歌行詩諺解』長恨歌、三二丁オ）

「淡粧濃抹ノヨソヲイ」（蘇軾「飲湖上初晴後雨」）は、薄化粧も厚化粧もそれぞれに美しいという意味である。
生まれつきの美人は「花飾ヲホドコサズソノマ、ニシ玉ヘ共ヲノヅカラウルハシキスガタ」と、飾らなくても麗
しき姿とある。かつ枝の粧いは、

お対の銘仙をきちんと身につけた美しさは、癪にさはるとは思つても、見惚れぬわけには叶かないほど美し
かった。
（『愛染かつら』敏子ちゃん、一一頁）

と、銘仙（安価な実用着）の姿が美しいとある。華やかな芸能界の歌手になった後も、

かつ枝を初めて見る人たちは、誰もがその美しさに驚いてしまつて、「女流作曲家なんて云ふから、どんな
に物凄い女が出て来るかと思つたが、どうも、実に意外だね。」「今日集つてゐる唄ウタひヒ手テなんンか傍ホウにもよヨれレない
ぢやないか。」「外の連中は作つてゐるんだが、高石さんは白粉オシロイだつてそんなにニつけてやヤしない、第一、着
物が好い、ケバケバくクしくクなくて、地味ヂミな着物キモノを着キてテゐミて、而もそソいイつがよヨく似ニ合アふ。」

（『愛染かつら』順風、二八四頁）

と、着飾らなくても、「唄ひてなんか傍にもよれない」と飛び抜けた美しさは、まわりの歌手も及ばないとある。これは「六宮粉黛無二顔色」（『歌行詩諺解』長恨歌、三二丁ウ）と、楊貴妃の美しさは後宮の美女も比べものにならないと似た表現である。「白粉だつてそんなにつけてやしない」は、「淡粧濃抹ノヨソヲイカザリナク」と、化粧で飾らないことに通じる。「ケバくしくなくて、地味な着物を着てゐて、而もそいつがよく似合ふ」は、「花飾ヲホドコサズソノマヽニシ玉ヘ共ヲノヅカラウルハシキスガタハステガタシ」と着飾らなくても美しいことが共通する。この⑦の頭注は、『長恨歌抄』・『歌行詩』に見られない。この他にも、

群をぬいたかつ枝の秀才ぶりは、看護婦学校を同期に卒業した同級生をだしぬいて、卒業後三年目で一等看護婦に進級してゐる。
（『愛染かつら』嫉視、八頁）

少女時代には、声楽家を夢見た事もあり、唱歌にはいくらか自信は持つてゐたし、殊に、浩三の伴奏で立派に唄ひこなしたのが、何よりも嬉しかった。
（『愛染かつら』思はぬ余興係、五六頁）

と、群を抜いた秀才で、音楽に造詣がある等、楊貴妃の美質と共通する。

『愛染かつら』の後半は「長恨歌伝」の最後の段と似る。楊貴妃は死後に仙界に生まれ変わり玉妃となるが、

⑧ 由ヨツテ此ニ一念ニ又不ズ得レ居フルコトヲ此ニ復タ墮フチテ下界ニ且ツム結ス後縁ヲ或ハ為ナリト天ハナラシ或ハ為ナラシ地決トサダ再メテ相見フタ、ビヒ好合マミヘテ如シテ旧クナランモトノ
（『歌行詩諺解』長恨歌伝、二五丁ウ）

と「此ノ一念」の為に、楊貴妃は仙界に居ることができない。「此ノ一念」とは、「世々夫婦ト為ラント」という楊貴妃と玄宗の誓いのことである。玉妃は、また後の縁を結び、再び対面をし、旧のように仲むつまじくしたい

と方士に伝える。『愛染かつら』のかつ枝は、浩三と別れた後に芸能界の歌手となる。死別と生き別れの違いはあるが、男と別れた後に女は、仙界と芸能界という違う世界に住むことが共通する。かつ枝は、再会した浩三に對して、

「私は一生あなたをわすれることはございません。」——中略——津村家のお父さんやお母さんが、喜んで私を迎えて下さるやうな、立派な芸術家になつて、ご苦労をなさらなくとも、結婚のできる立場を作るまで待つてくだされまし。

（『愛染かつら』幸福の日は、三三〇頁）

と云う。かつ枝の「私は一生あなたをわすれることはございません。」と、王妃の「世々夫婦ト為ラント」は、結婚の約束を忘れないことが共通する。控えめな性格のかつ枝が、結婚のできる立場になるまで待つてくださいと自分の意志を浩三に伝えるのは、楊貴妃の「復天下界ニ墮チテ且ツ後縁ヲ結バン」の言葉を用いたといえる。しかし、かつ枝の娘敏子の存在は楊貴妃に無いモチーフである。これは『愛染かつら』の主題に関わると考えられ、まとめにおいて考察をする。

3、玄宗と津村浩三の比較

玄宗については、『歌行詩諺解』の頭注に次のようにある。

⑨此長恨歌ハ白樂天ノ作ナリ其濫觴ハ唐ノ玄宗皇帝ノ事ナリソレ玄宗ハ睿、宗ノ三男也

（『歌行詩諺解』長恨歌伝、一丁オ）

玄宗は「睿宗ノ三男」とある。津村⁽⁴³⁾浩三は「看護婦たちに一ばん人気のあるのが長男の浩三だつた」（『愛染か

つら』お祝ひの日、三三頁）とあり、長男の名前に「浩三」とするのは、睿宗の第三子の「三」を取ったと考えられる。玄宗に音楽の才能があったことは、よく知られた話であるが、

⑩ 梨園トハ梨花ノ園ノ中ニ三百人ノ楽人ノ弟子ノイルニヨツテ梨園ノ弟子ト云ナリ弟子ト云フハ皆玄宗ニ楽ヲナラフテ吹ニ依テ弟子ト云ナラン詳見ニ于長恨歌註一
（『歌行詩諺解』長恨歌伝、十四丁ウ）

と梨園において、楽人に音楽を指導するほどのレベルであったことがわかる。浩三は、

自分から伴奏を買って出るだけあつて、相当にピアノも弾いた経験があるらしく、前奏の一章節を強音に弾き出し、唄ひ出しにかゝると弱音に弱めて来る呼吸が仲々玄人つぽく油断ならない嗜みの深さを示している。
（『愛染かつら』伴奏者、五三頁）

と音楽に造詣が深い。また、

ボートの選手だけに、鍛えた体があつしりとして、陽に焼けた顔色は浅黒かつたが、きりゝとひきしまつて厭味のない美男子だ。
（『愛染かつら』秀才令息、四十頁）

と、学問・音楽だけでなく、スポーツも得意である。浩三は、玄宗皇帝の多能多芸で音律や学問に通じ、スポーツを好む要素^{（4）}を受け継いでいるといえる。『歌行詩』に玄宗がスポーツを好む記述はないことから、作者川口は、玄宗に関する何らかの書物を見たことが考えられる。

以上の考察から、『愛染かつら』の女主人公かつ枝は類い希な美貌と賢さと音楽の才能を合わせ持ち、男主人

公浩三は頭脳明晰で音楽やスポーツに才能があるなど、人物設定は楊貴妃と玄宗が基づくと考えられる。また二人は永遠の愛を誓うが、結ばれがたいという点も、「長恨歌」・「長恨歌伝」と一致する。そして、⑦⑨⑩の注釈は、『長恨歌抄』と『歌行詩』になく、『歌行詩諺解』だけにみられ、その描写が『愛染かつら』と一致するところから、作者川口は、『歌行詩諺解』をテキスト用いた蓋然性が高いといえるのである。

三、『愛染かつら』の構成——源氏物語桐壺巻——

川口の師と仰ぐ谷崎潤一郎が、源氏物語の現代語訳を手がけるのは、『愛染かつら』が出版される前年の昭和十年九月と昭和十三年九月である⁽⁴⁵⁾。後に川口も昭和三十七年に『新源氏物語⁽⁴⁶⁾』を出版することから、源氏物語に関心があったことがわかる。源氏物語の桐壺帝と桐壺の更衣は、「朝夕の言種に翼をならべ、枝をかかさむと契らせたまひし」(桐壺・二七)と「長恨歌」の比翼連理の誓いをするところから、玄宗皇帝と楊貴妃に喩えられたことは定説になっている⁽⁴⁷⁾。

桐壺巻の巻頭は、

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさふらひ給けるなかに、いとやむごとなききにはあらぬが、すぐれてときめき給ふありけり、はじめよりわれはと思ひあがり給へる御かたぐ、めざましきものにおとしめそねみ給、おなじほど、それより下らうの更衣たちは、ましてやすからず
(桐壺・十一)

と更衣は帝に特別に寵愛されることから、後宮の中で嫉妬を受けるといふ書き出しである。『愛染かつら』の冒

頭も、

高シヤン、高シヤンと、医学士たちに騒がれている高石の人氣には峯沢ばかりでなく、外の看護婦たちも露骨な反感を持つてゐるのだ。――中略――群をぬいたかつ枝の秀才ぶりは、看護婦学校を同期に卒業した同級生をだしぬいて、卒業後三年目で一等看護婦に進級してゐる。――中略――同期に学校を出た連中にすれば、心中おだやかならないのも無理ではないのだ。

（『愛染かつら』嫉視、八頁）

と、かつ枝の人氣に対する同僚の反感が書かれ、更衣が「めざましきものに貶め嫉み給ふ」と、嫉みをうけることが共通する。更衣の「同じほど、それより下腐の更衣たちは、ましてやすからず」と、「同期に学校を出た連中にすれば、心中おだやかならないのも無理ではないのだ」は似た表現である。更衣とかつ枝が、周囲の女性の心を不穩にさせるのは、同じ状況といえる。桐壺帝は、

限りあらむ道にも、おくれ先立たじと契らせたまひけるを、さりとともうち捨てては、え行きやらじとのたまはするを、女もいといみじと見たてまつりて、

かぎりとしてわかるゝ道のかなしきにかまほしきは命成けり

（桐壺・十六）

と、「かぎりあらんみち」（死出の道）を、一緒に行こうと約束をするが、更衣の死により二人は別れる。浩三とかつ枝は、

よし、不幸な運命が大手を拡げてゐようとも、行けるところまで行くのが愛される身にのこされたたゞ一つの道だ。――中略――「必ず待つてゐますよ。」と浩三の声も涙に慄へて聞えるのだ。「浩三様が私を信じ

てくださいます以上に、私は浩三様へおすがり申さねばなりません。」（『愛染かつら』明夜、一四六頁）

と、駆け落ちの約束をするが、かつ枝の娘敏子が急病になり約束の汽車に遅れて、二人は離れ離れになる。「かぎりあらんみち」（死出の道）と「一つの道」（駆け落ち）は死別と生別の違いはあるが、「男女が運命を共にする約束」と「女が約束を果たせず別れる」が共通する。浩三とかつ枝の別れを描く章題「運命の岐れ路」（『愛染かつら』一四七頁）と、更衣の歌「わかるゝ道」は、言葉の意味が共通する。桐壺帝は更衣亡き後、更衣の魂の行方を捜させる為に、

野分だちて、にはかに膚寒き夕暮れのほど、常よりもおぼしいづること多くて、
鞆負の命婦といふをつかはす。
（桐壺・十九）

と、鞆負命婦を更衣の里へ遣わす。この命婦に対応するのが、浩三の友人の妹美也子といえる。美也子は「私が行くより外には、こんな使ひをする者もないでせう。」（『愛染かつら』心弱く、二五二頁）と、浩三の使いとして、かつ枝の行方を捜しに高石家を訪問する。しかし、美也子が訪れる前日に高石家は引越をし、かつ枝を捜し当てることはできなかった。鞆負命婦と美也子は、「役目を果たせない使者」であることが共通する。このように『愛染かつら』は、「長恨歌」を受容した源氏物語桐壺巻の構成と要素がみられる。

まとめ — 『愛染かつら』の主題について —

以上の考察から、『愛染かつら』の構成や表現に、白居易の「長恨歌」と陳鴻の「長恨歌伝」と、これらを受容した源氏物語を用いたことがわかる。「長恨歌」の主題は大きくいって諷諭主題説と愛情主題説がある⁽⁴⁸⁾が、『愛染かつら』は、明らかに浩三とかつ枝の愛情物語といえる。しかし、男女の愛だけでなく、主題に「母の愛」を加えたことが、次の逸話から解る。『愛染かつら』が松竹大船で映画化が決まった時、川口は、「主題歌はぜひ西條八十先生にお願いして欲しい。なぜならこの小説のヒントは西條先生の『母の愛』という詩から得たからだ⁽⁴⁹⁾」と述べる。「母の愛」は小説の中で、

晴れて逢へない母子ゆゑ 真の夜中に逢ひにくる 真の夜中に出る月の

やうに寂しく逢ひにくる 晴れて呼ばれぬ我子ゆゑ 真の夜ふけにこの涙

おなじ想ひかさらく 行つてまた来る小夜時雨

西條先生が得意の抒情小曲で、単なる流行歌謡ではない立派な一篇の詩であつた。その文句が又、かつ枝は心なく見すごしてしまふ事の出来ないもので、「晴れて逢へない母子ゆゑ、真の夜中に逢ひにくる」というのが、何処となく自分たち母子の境涯に似かよつてゐる。
(『愛染かつら』母の愛、一二一頁)

と引用されることから、主人公が密かに我が子に逢うという設定は、西條八十の「母の愛⁽⁵⁰⁾」の詩によるといえる。そして主人公かつ枝が娘敏子を思う「母の愛」は、

捨て去つて惜しくない我が子であろうか。恋に殉じて愛児を棄てるのが、女の正しい道であろうか。『敏子よ、敏子!』はたと突当つた愛情の障碍には、可愛らしく微笑みかける愛児の目差が、無心にありくと浮

び上つて来るのだった。

(『愛染かつら』愛の障碍、一三四頁)

と恋人との「愛の障碍」になるという展開に繋がる。「母の愛」が男女の障害になるという設定は、「長恨歌」や源氏物語にないことから、この作品において展開したプロットといえる。「小説のヒントは西條先生の『母の愛』という詩から得た」というのは、川口の実の親が分からない生い立ち⁽⁵¹⁾や私生活の影響が窺える。

「これの母親と結婚していたんだが、その中に三益のところにも子どもが三人もできちまったよ、ま、あつちの子どもたちを放っておくこともできないから、一女が二十歳になるのを待つて、一家をたてさせて僕は一女の母と別れた⁽⁵²⁾」

と娘一女の成人を待つて、妻照と離婚をする。この事は、二人の妻に生まれた子を思う川口の愛情が見える。『愛染かつら』の連載の始まりは、昭和十二年(一九二七)一月で、長女一女は数え年五歳である⁽⁵³⁾。小説の主人公の娘敏子は六歳で、実の娘と年齢が近い。敏子の利発さ・かわいらしさ・親を慕う言葉の描写に、実の娘の影響がないとはいえないであろう。

物語の結末は、「華麗なオーケストラのクライマックスが行く手の幸福を暗示する響きを伝えて、明るく華やかに聞こえて来るのだった」(『愛染かつら』愛染堂、三三二頁)と、かつ枝と浩三の幸福を暗示する。これは「かつらの樹にかまつて恋人同志が誓約をすると、将来は必ず結ばれると云ふのです」(『愛染かつら』愛染堂、一〇九頁)という「愛染かつら」の誓いが、成就されるという暗示にほかならない。そして、愛染堂勝鬘院が「施薬院」の歴史を持ち、側に施薬療病院として四天王寺病院(昭和六年(一九三一)設立)が開設されたことによ

り、病院を舞台にした物語が生まれたと考えられる⁽⁵⁴⁾。続編『新愛染かつら』(矢貴書店、昭和二十四年(一九四九))は、「戦後復員した浩三とかつ枝は再会し、娘敏子を姉に託して浩三と結婚する。しかし、かつ枝は名門津村家の家風になじめず離縁する」という内容である。愛し合う男女が出会いと別れを繰り返す物語は、「長恨歌」の「此恨綿綿無_二絶期_一」を思わせる。

昭和二十一年に矢貴書店から再版された『新編愛染かつら⁽⁵⁵⁾』の表紙は、凌霄花が描かれ、中表紙に桂の枝の挿絵がある。この挿絵からも、浩三とかつ枝が「愛染かつら」の木のもとで愛を誓う場面が、物語の眼目といえることから、主人公「かつ枝」の名は、「愛染かつらの枝」が由来といえる。

(1) 奥田慈応氏編『寺誌愛染』(愛染堂勝鬘院、一九三六年五月)に掲載の写真を以下翻刻「四天王寺別院勝鬘院 俗ニ愛染堂ト云フ。本尊愛染明王、脇士勝鬘夫人。創立人天皇三十二代用明天皇御宇 聖徳太子四天王寺敬田院ヲ始メ四ヶ院造立ノ中施薬院ノ旧地ニシテ、方今存在之堂塔ハ元和四戊午年徳川氏四天王寺伽藍再建ノ砌建営」(明治十一年届出愛染堂什物帳)。

(2) 「愛染堂又は「愛染さん」と呼ばれるのは御本尊に愛染明王を祀りますから御本尊の名号によりまして名つけたものであります」(奥田慈応氏編『寺誌愛染』、愛染堂勝鬘院、一九三七年三月、一三頁)。

(3) 現在は「桂の木」が「愛染かつら」の木と伝わる。しかし、一九三六・一九三七年発行の『寺誌愛染』(注1・注2同)は、「楠の巨木」(伝聖徳太子御手植)の写真が掲載され、同じ古木が『寺誌愛染』(一九五六年五月)に、「愛染かつらの霊木」と紹介される。「宝恵カゴの発祥地 映画で知られたその名」(読売新聞、一九六一年七月二日付)の記事は、「境内にはいると、右手に戦災ですっかり枝をもぎとられたクスの大木が五本の献灯にかこまれてそびえていた。直径一メートル、樹齢数百年。いのちを失ったガサガサのはだに数本のカツラが身をくねらせて巻きつき、みずみず

しい無数の青葉を繁らせている」とある。これらの記事から「愛染かつら」のモデルは、桂の木ではなく、伝聖徳太子御手植の霊木と伝わる楠（枯死）に、凌霄花の蔓が巻き付いた古木といえる。

(4) ノウゼンカヅラ（旧仮名使い）科の蔓性落葉樹、漢名「凌霄花」。古木（大阪大空襲により枯死と伝わる）に巻き付くノウゼンカヅラ（計測筆者、地際110cmの幹周40cm、二〇一四年六月二十二日）は樹齢不明。金沢市西田家庭園の朝鮮五葉松に巻き付くノウゼンカヅラ（計測、金沢市文化財保護課宮本氏、地際110cmの幹周40cm、二〇一四年五月）は推定樹齢三百五十年。生育環境は違うが金沢を参考にすれば愛染堂のノウゼンカヅラも樹齢数百年と考えられる。

(5) 『寺誌愛染』（愛染堂勝鬘院、二〇一一年、二三頁）。他に東京都台東区谷中の新義真言宗本覚山自性院愛染寺がモデルという説も伝わる。これは、『愛染かつら』の初出『婦人倶楽部』の挿絵に、自性院愛染寺の境内にある「桂の木」と「三国筆海堂墓碑」の絵が描かれていることから、広まった説といえる。牧野和春氏『巨樹と日本人』（中央新書、平成十年（一九九八）六月）は、川口が昭和十年頃、別所温泉の老舗旅館柏屋本館三階、竹の間に長期的に滞在し、竹の間から北向き観音がよく見える桂の巨木を見てひらめいたのが、『愛染かつら』であると紹介する。しかしながら、立派な桂の木と愛染明王は存在するが、この場所がないと作品が成り立たないという要素は見られない。旅館柏屋に川口が滞在し小説を書いたという記録があることから、この地は作者執筆の地といえる。作者は場所を特定していないが、私見によれば、大阪天王寺の愛染堂勝鬘院は「発想の地」、東京都台東区谷中の新義真言宗本覚山自性院愛染寺は「舞台の地」、長野県上田市の別所温泉北向観音境内に桂の木は「執筆の地」とであると云える。

(6) 若城希伊子氏『空よりの声―私の川口松太郎』（文藝春秋、一九八八年、一一六頁）。

(7) 「勝鬘堂愛染不動明王、神には結ぶの神、仏には愛染と申す心なり」（『寺誌愛染』愛染堂勝鬘院、一九三六年、四四頁）

(8) 谷崎潤一郎との関係について「谷崎は文学青年や弟子志願などが大嫌いで、訪ねて来る者も追い返して誰にも会わなかった。その中でどうした風の吹きまわしか、出入りを許されている青年が三人いた。一人は岡田時彦という映画俳優

優で今の岡田茉莉子の父だ。それと今東光と私の三人」とある（川口松太郎『忘れ得ぬ人忘れ得ぬこと』講談社、一九八三年、二二頁）。

（9）小川豊生氏「愛染明王と性の神学——『瑜祇経』解釈学を起点とする中世日本の性と身体——」（『説話論集』第十六集、説話と説話文学の会編、清文堂、二〇〇七年七月）参照。

（10）『婦人倶楽部』は『主婦の友』・『婦人公論』・『婦人画報』と並ぶ戦前戦後の四大婦人雑誌。大正九年（一九二〇）に大日本雄辯会講談社が創刊。（与那覇恵子・平野晶子両氏監修『婦人倶楽部』戦前期四大婦人雑誌目次集成、ゆまに書房、二〇〇六年）。

（11）鈴木和年氏『愛染かつらとニッポン人』（情報センター出版局、一九八四年、三頁）参照。

（12）西條八十作詞「旅の夜風」の歌詞「泣いてくれるなほろほろ鳥よ 月の比叡を独り行く」は、「長恨歌」49・50句「行宮見^レ月傷^レ心色 夜雨聞^レ猿腸断声」を思わせる。

（13）長田暁二氏『歌でつづる20世紀くあの歌が流れていた頃』（株式会社ヤマハミュージックメディア、二〇〇三年、一〇八頁）。

（14）テレビドラマデータベース参照。

（15）野崎元晴氏「大衆から圧倒的に支持された愛染かつら」（『キネマ旬報』第九〇九号、一九八五年五月、一四九頁）。

（16）白氏文集に陳鴻の「長恨歌伝」が含まれ、『歌行詩』は、「長恨歌序」の前に「長恨歌伝」がある。

（17）小島憲之氏「第三章白詩圏の文学」（『古今集以前』塙書房、一九七六年、所収）。

（18）新聞一美氏「白居易文学の受容」（『平安朝文学と漢詩文』和泉書院、二〇〇三年、所収）。

（19）遠藤実夫氏『長恨歌研究』（建設社、一九三四年）。

（20）同前、遠藤著書、三四九頁。

（21）諸田龍美氏「尾崎紅葉『多情多恨』と「李夫人」「長恨歌」」（『人文学論叢』第八号、愛媛大学人文学会、二〇〇

六年十二月）参照。

(22) 早稲田大学演劇情報総合データベース参照。

(23) 同前注22。

(24) 東宝株式会社『帝国の五十年』（帝国劇史編纂委員会、一九六〇年、四七頁）。

(25) 前掲注22。

(26) 中国における中唐から近現代に至る楊貴妃に取材した文学作品については、竹村則行氏『楊貴妃文学史研究』（研文出版、二〇〇三年一〇月）参照。

(27) 高峰秀子氏『人情話松太郎』（潮出版、一九八五年初出。文春文庫、二〇〇四年、三六頁）。

(28) 前掲注6若城著書、四三頁。

(29) 講談速記について「その頃の新聞雑誌に講談速記の連載を試み非常な大当たりを得、大衆小説発達の貴重な温床となった」（『人情馬鹿物語』新潮社、一九五五年初出。論創社、二〇〇九年、八頁）と記す。今回筆者が調査をした『講談全集』第一巻（第十二巻）（大日本雄弁会講談社、昭和三年（一九二八）（一九二九）・佐野孝・吉沢英明・中込重明・菊池真一・旭堂南陵五氏の講談研究資料に、長恨歌に関する作品はみられない。

(30) 前掲注8川口著書、五七頁。

(31) 前掲注29川口著書、八頁。

(32) 前掲注6若城著書、九六頁。

(33) 前掲注6若城著書、九五頁。

(34) 前掲注8川口著書、七頁に文壇の恩人に久保田太郎・小山内薫・谷崎潤一郎・菊池寛・里見弴をあげる。

(35) 溝口健二監督『楊貴妃』（大映と香港ショウ・ブラザーズ合作、一九五五年五月公開）。

(36) 川口松太郎『楊貴妃』（河出書房、一九五五年）。

(37) 吉川幸次郎氏「映画「楊貴妃」を見て」(『毎日新聞』一九五五年五月五月初出。『吉川幸次郎全集』(第十一巻、筑摩書房、一九六八年所収)。

(38) 国田百合子氏『長恨歌・琵琶行抄諸本の研究資料編』(ひたく書房、一九八二年) 参照。

(39) 京都女子大学蔵『歌行詩』(京都、風月宗知、寛永四(一六二七)年五月)は「長恨歌伝・長恨歌序・長恨歌・琵琶行序・琵琶行・野馬台之起・野馬台序・野馬台詩注」の本文に訓点が付され、割注は典拠に漢籍を引用。中心作品の「長恨歌」「琵琶行」「野馬台詩」にちなんで一般的に『歌行詩』と呼ばれる。本文は注38国田著書と同文だが訓点に違いがみられ、鼈頭(頭注)がない。

(40) 下中弥三郎編『大辞典』第12巻(平凡社、一九三四年)に、「【私語】ささやくこと、ひそひそばなし、長恨歌「七月七日長生殿、夜半無_レ人私語時」とある。

(41) 下定雅弘氏『長恨歌―楊貴妃の魅力と魔力―』(勉誠出版、二〇一一年、一二五頁)。

(42) 同前注41下定著書、一〇三頁。

(43) 谷崎潤一郎『吉野葛』(『中央公論』一九三〇年一月二月初出)の主人公「津村」は「行きずりに遇ふ町の女、令嬢、芸者、女優などの、淡い好奇心を感じたこともないではないが、いつでも彼の眼に止まる相手は、写真で見る母の俤に何処か共通な感じのある顔の主であつた」と川口の生い立ちや女性関係と酷似する。川口と谷崎は関西に移り住む頃に特に親しくなることから、『吉野葛』の津村と『愛染かつら』の津村浩三の姓が同じであることは偶然とはいえず、別稿で論ずる。

(44) 『唐書』巻五、本紀五「性英武善二騎射」(和刻本正史『唐書(影印本)』一、汲古書院、一九七〇年)。

(45) 谷崎潤一郎訳『源氏物語』巻一(中央公論社、一九三九年、序文)参照。

(46) 川口松太郎『新源氏物語』(文藝春秋新社、一九六二年)参照。

(47) 新聞一美氏「桐と長恨歌と桐壺巻―漢文学より見た源氏物語の誕生―」(『甲南大学紀要』文学編四十八、一九八三年三月)初出、『源氏物語と白居易の文学』和泉書院、二〇〇三年所収)。

(48) 前掲41下定著書、三四頁。

(49) 長田暁二氏『歌でつづる20世紀くあの歌が流れていた頃』(株)ヤマハミュージックメディア、二〇〇三年、一〇八頁)。

(50) 初出誌未確認。『西條八十全集』第三卷 詩Ⅲ、株式会社国書刊行会、二〇〇〇年一二月、五二七頁に「発表されずに『紫の罌粟』(昭和三年六月一日刊行)に書きおろされたものか」とある。

(51) 「戸籍をみると島岡春吉よね私生児川口竹次郎庶子認知」(注6に同じ、二二二頁)。

(52) 前掲注6若城著書、一〇七頁。

(53) 小出一女氏(一九三三年二月二十一日生)は、川口と妻照の長女で、四代目竹本越路太夫(小出清)氏妻。故竹本越路太夫直弟子竹本三輪太夫氏に、一女氏の生年月日を健康保険証で御確認頂いた。

(54) 架蔵小出一女氏「川口松太郎一周忌の礼状」に、川口について「過去に何度か訪れて知り尽くしているところでも、起稿の段階でさらに足を運んで確認しないと気の済まぬ性質で」とある。同内容は『父の肖像Ⅱ』かまくら春秋社、平成十六年(二〇〇四)に所収。これらの記事から川口は『愛染かつら』起稿に際して愛染堂勝鬘院に出向き、四天王寺病院(昭和六年建設)を確認したことが考えられる。

(55) 『新編愛染かつら』(矢貴書店、一九四六年)は戦後再版したもので、初出と比較すると、若干の推敲がある。あとかぎに「私がこの小説を書いたのは十年前であつた。好い意味にも、悪い意味にも、この小説は私を有名にした。――中略――人は、時々甘美な物語に、愚かになりたい心持のする事もあるものである。さう云う意味ではこの小説もまた価値を持つてゐるかも知れない。(一九四六、一)」とある。

賢愚經卷第二 波斯匿王女金剛品第八	撰集百緣經 波斯匿王女醜女緣	雜寶藏經卷第二 波斯匿王女賴提緣	經律異相卷三十四 諸國王女部	法苑珠林卷第七十六 十惡篇第八十四之四惡口部
如是我聞。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園。爾時波斯匿王最大夫人。名曰摩利。時生一女。字波闍羅。晉言金剛。其女面類。極爲醜惡。肌體羸澁。猶如蛇皮。頭髮羸強猶如馬尾。王觀此女。無一喜心。便勅宮內。勸意守護。勿令外人得見之也。所以者何。此女雖醜形不似人。然是末利夫人所生。此雖醜惡。當密遣人而護養之。女年轉大。任當嫁處。時王愁憂。無餘方計。便告吏臣。卿往推覓本是豪姓居士種者。今若貧乏。無錢財者。便可將來。吏即如教。即往推覓得一貧窮豪姓之子。吏便喚之。將至王所。王得此人。共至屏處。具以情狀。向彼人說。我有一女。面狀醜惡。欲覓嫁處。未有酬類。聞卿豪族。今者雖貧。當相供給。幸卿不逆。當納受之。時長者子。長跪白言。當奉王勅。正使大王以狗見賜。我亦	佛在舍衛國祇樹給孤獨園。爾時波斯匿王。摩利夫人。生一女兒。貌極醜。身禮羸澁。猶如蛇皮。頭髮羸強。猶如馬尾。王見此女。無一喜心。便勅宮內。勸加守護。勿令出外使人得見。王自念言此女雖醜形不似人。然是末利夫人所生。而養育之。年漸長大。任當嫁娶。時王憂愁。知當奈何。無餘方計。便告一臣。卿可推求。本是豪族種姓家者。今若貧乏。無錢財者。便可將來。臣即受教。遍往求覓。得一貧窮豪族之子。使便喚之。將來詣王。王見此人。共至屏處。密共私語。聞卿豪族今者貧窮。當相供給我有一女。面貌極醜。幸卿不逆。當納受之。時此貧人。長跪白王。當奉教勅。正使大王以狗見賜。我亦	昔波斯匿王有女。名曰賴提。有十八醜。都不似人。見皆恐怕。	佛在舍衛國。爾時波斯匿王最大夫人。名曰末利。時生一女。字曰波闍羅。梁言金剛。女面醜惡。肌體羸澁。猶如蛇皮。髮如馬毛。王觀此女。無一喜心。便勅宮內。勸意守護。勿令外人得見之也。女年轉大。任當嫁處。處告吏臣。卿可推尋。豪姓貧者。便可將來。臣即如教。得一貧豪姓之士。將至王所。向彼人說。我有一女。面狀醜惡。未有酬類。當相供給。想卿不逆。當納受之。時長者子長跪白言。當奉王勅。時長者子長跪白王曰。正使大王以狗見賜。亦不	又百緣經云。昔佛在世時。波斯匿王婦末利夫人產生一女。字曰金剛。面貌極醜。身體羸澁。猶如蛇皮。頭髮羸強。猶如馬尾。王見不喜。勅閉深宮不令出外。年漸長大任當嫁娶。便遣一臣。推覓一人本是豪族今貧乏者。卿可將來。臣受勅已。覓得付王。王將屏處密私語言。聞卿豪族今者貧窮。我有一女。面貌極醜。

當受。 之。 今設見賜。奉命納之。王即以女。妻彼貧人。爲起宮殿。舍宅門閣。令有七重。王勅女夫。自捉戶鑰。若欲出行。而自閉之。我女醜惡。世所未有。勿令外人覩見面狀。常牢門戶。幽閉在內。王出財貨。一切所須。供給女婿。使無乏短。王即拜授。以爲大臣。其人所有財寶饒益。	何況大王遺體 當受不違王教。何況今者。末利夫人。所生之女。	王女。而不可也。	王即以女妻彼貧人。爲起宮殿。舍宅門閣七重。王勅女夫。自捉戶排。若欲出時。而自閉之。勿令人覩見女面狀。	王給女婿使無乏短。又拜爲大臣。其人所有財。與諸豪族共爲設會。月月更爲會同之時。夫婦俱詣。諸人來會。悉皆將婦。	唯彼大臣。恒常獨詣。衆人疑怪。彼人婦者。
當受不違王教。何況今者。末利夫人。所生之女。	王尋妻之。爲立宮室。約勅長者子言。	此女形醜。慎莫示人。出則鎖門。入則閉戶。以爲常則。	有諸長者子。共爲親友。飲醺遊戲。每於會日。諸長者子婦皆來集會。	唯此王女。獨自不來。於是諸人。共作要言。後日更會。仰將婦來。有不來者。重謫財物。遂復作會。貧長者子。猶故如前。不將婦來。諸人便共重加謫罰。貧長者子。敬受其罰。諸人已復共作要言。明日更會。不將婦來。復當重罰。如是被罰。乃至二三。亦不將來詣於會所。貧長者子。後到家中。語其婦言。我數坐汝爲人所罰。婦言何故。夫言。諸人有要。飲會	唯彼大臣。獨不將來。衆人疑怪。彼人婦者。
與諸豪族共爲設會。月月更爲會同之時。夫婦俱詣。諸人來會。悉皆將婦。	王即以女妻彼貧人。爲起宮殿。舍宅門閣七重。王勅女夫。自捉戶排。若欲出時。而自閉之。我女醜惡。世所未有。勿令外人覩見面狀。常牢門戶。幽閉在內。王出財貨。一切所須。供給女婿。使無乏短。王即拜授。以爲大臣。其人所有財寶饒益。	王給女婿使無乏短。又拜爲大臣。其人所有財。與諸豪族共爲設會。月月更爲會同之時。夫婦俱詣。諸人來會。悉皆將婦。	唯此王女。獨自不來。於是諸人。共作要言。後日更會。仰將婦來。有不來者。重謫財物。遂復作會。貧長者子。猶故如前。不將婦來。諸人便共重加謫罰。貧長者子。敬受其罰。諸人已復共作要言。明日更會。不將婦來。復當重罰。如是被罰。乃至二三。亦不將來詣於會所。貧長者子。後到家中。語其婦言。我數坐汝爲人所罰。婦言何故。夫言。諸人有要。飲會	唯彼大臣。恒常獨詣。衆人疑怪。彼人婦者。	唯此大臣。獨不將來。衆人疑怪。彼人婦者。
與諸豪族共爲設會。月月更爲會同之時。夫婦俱詣。諸人來會。悉皆將婦。	王即以女妻彼貧人。爲起宮殿。舍宅門閣七重。王勅女夫。自捉戶排。若欲出時。而自閉之。我女醜惡。世所未有。勿令外人覩見面狀。常牢門戶。幽閉在內。王出財貨。一切所須。供給女婿。使無乏短。王即拜授。以爲大臣。其人所有財寶饒益。	王給女婿使無乏短。又拜爲大臣。其人所有財。與諸豪族共爲設會。月月更爲會同之時。夫婦俱詣。諸人來會。悉皆將婦。	唯此王女。獨自不來。於是諸人。共作要言。後日更會。仰將婦來。有不來者。重謫財物。遂復作會。貧長者子。猶故如前。不將婦來。諸人便共重加謫罰。貧長者子。敬受其罰。諸人已復共作要言。明日更會。不將婦來。復當重罰。如是被罰。乃至二三。亦不將來詣於會所。貧長者子。後到家中。語其婦言。我數坐汝爲人所罰。婦言何故。夫言。諸人有要。飲會	唯彼大臣。恒常獨詣。衆人疑怪。彼人婦者。	唯此大臣。獨不將來。衆人疑怪。彼人婦者。

儼能端政。暉赫曜絕。或能極醜。不可顯現。是以彼人。故不將來。今當設計往觀彼婦。即各同心。密共相語。以酒勸之。令其醉臥。解取門鑰。便令五人往至其家。開其門戶。	儼能端政。顏色暉耀。或能極醜。不中顯現。是以彼人。不將婦來。今當設計。往觀彼婦。即各同心。密共相語。以酒勸之。令醉臥地。解取門鉤。使令五人。往至其家。開其門戶。欲觀其婦。當於爾時。	之曰。盡仰將婦詣於會所。我被王勅。不聽將汝以示外人。故數被罰。	儼能端正。或能極醜。是以彼人故不將來。密共相語。勸酒令醉。解取門排。開其門戶。遣其五人造家往看。至家開門婦疑非夫。內自剋責。懊惱而言。	時女心惱。自責罪咎。為夫所憎。恒見幽閉。處在闇室。不覩日月及與衆人。復自念言。今佛在世。潤益衆生。遭苦厄者。皆蒙過度。	即便至心。遙禮世尊。唯願垂愍。到於我前。暫見教訓。其女精誠。敬心純篤。	佛知其意。即到其家。於其女前。地中踊出。現紺髮相。令女見之。其女舉頭。見佛髮相。倍加歡喜。歡喜情敬。	敬心極深。其女頭髮。自然細軟。如紺青色。佛復現面。女得見之。見已歡喜。面復端政。惡相麤皮。自然化滅。佛復現身。齊腰以上。金色晃昱。令女見之。女見佛身。益增歡喜。因歡喜故。惡相即滅。身體端	其身即變。醜惡都盡。	歡喜轉深。	其女見佛心生歡喜。惡相即滅。身體端	身體端正猶如天女。
儼能端政。暉赫曜絕。或能極醜。不可顯現。是以彼人。故不將來。今當設計往觀彼婦。即各同心。密共相語。以酒勸之。令其醉臥。解取門鑰。便令五人往至其家。開其門戶。	儼能端政。顏色暉耀。或能極醜。不中顯現。是以彼人。不將婦來。今當設計。往觀彼婦。即各同心。密共相語。以酒勸之。令醉臥地。解取門鉤。使令五人。往至其家。開其門戶。欲觀其婦。當於爾時。	之曰。盡仰將婦詣於會所。我被王勅。不聽將汝以示外人。故數被罰。	儼能端正。或能極醜。是以彼人故不將來。密共相語。勸酒令醉。解取門排。開其門戶。遣其五人造家往看。至家開門婦疑非夫。內自剋責。懊惱而言。	時女心惱。自責罪咎。為夫所憎。恒見幽閉。處在闇室。不覩日月及與衆人。復自念言。今佛在世。潤益衆生。遭苦厄者。皆蒙過度。	即便至心。遙禮世尊。唯願垂愍。到於我前。暫見教訓。其女精誠。敬心純篤。	佛知其意。即到其家。於其女前。地中踊出。現紺髮相。令女見之。其女舉頭。見佛髮相。倍加歡喜。歡喜情敬。	敬心極深。其女頭髮。自然細軟。如紺青色。佛復現面。女得見之。見已歡喜。面復端政。惡相麤皮。自然化滅。佛復現身。齊腰以上。金色晃昱。令女見之。女見佛身。益增歡喜。因歡喜故。惡相即滅。身體端	其身即變。醜惡都盡。	歡喜轉深。	其女見佛心生歡喜。惡相即滅。身體端	身體端正猶如天女。
儼能端政。暉赫曜絕。或能極醜。不可顯現。是以彼人。故不將來。今當設計往觀彼婦。即各同心。密共相語。以酒勸之。令其醉臥。解取門鑰。便令五人往至其家。開其門戶。	儼能端政。顏色暉耀。或能極醜。不中顯現。是以彼人。不將婦來。今當設計。往觀彼婦。即各同心。密共相語。以酒勸之。令醉臥地。解取門鉤。使令五人。往至其家。開其門戶。欲觀其婦。當於爾時。	之曰。盡仰將婦詣於會所。我被王勅。不聽將汝以示外人。故數被罰。	儼能端正。或能極醜。是以彼人故不將來。密共相語。勸酒令醉。解取門排。開其門戶。遣其五人造家往看。至家開門婦疑非夫。內自剋責。懊惱而言。	時女心惱。自責罪咎。為夫所憎。恒見幽閉。處在闇室。不覩日月及與衆人。復自念言。今佛在世。潤益衆生。遭苦厄者。皆蒙過度。	即便至心。遙禮世尊。唯願垂愍。到於我前。暫見教訓。其女精誠。敬心純篤。	佛知其意。即到其家。於其女前。地中踊出。現紺髮相。令女見之。其女舉頭。見佛髮相。倍加歡喜。歡喜情敬。	敬心極深。其女頭髮。自然細軟。如紺青色。佛復現面。女得見之。見已歡喜。面復端政。惡相麤皮。自然化滅。佛復現身。齊腰以上。金色晃昱。令女見之。女見佛身。益增歡喜。因歡喜故。惡相即滅。身體端	其身即變。醜惡都盡。	歡喜轉深。	其女見佛心生歡喜。惡相即滅。身體端	身體端正猶如天女。
儼能端政。暉赫曜絕。或能極醜。不可顯現。是以彼人。故不將來。今當設計往觀彼婦。即各同心。密共相語。以酒勸之。令其醉臥。解取門鑰。便令五人往至其家。開其門戶。	儼能端政。顏色暉耀。或能極醜。不中顯現。是以彼人。不將婦來。今當設計。往觀彼婦。即各同心。密共相語。以酒勸之。令醉臥地。解取門鉤。使令五人。往至其家。開其門戶。欲觀其婦。當於爾時。	之曰。盡仰將婦詣於會所。我被王勅。不聽將汝以示外人。故數被罰。	儼能端正。或能極醜。是以彼人故不將來。密共相語。勸酒令醉。解取門排。開其門戶。遣其五人造家往看。至家開門婦疑非夫。內自剋責。懊惱而言。	時女心惱。自責罪咎。為夫所憎。恒見幽閉。處在闇室。不覩日月及與衆人。復自念言。今佛在世。潤益衆生。遭苦厄者。皆蒙過度。	即便至心。遙禮世尊。唯願垂愍。到於我前。暫見教訓。其女精誠。敬心純篤。	佛知其意。即到其家。於其女前。地中踊出。現紺髮相。令女見之。其女舉頭。見佛髮相。倍加歡喜。歡喜情敬。	敬心極深。其女頭髮。自然細軟。如紺青色。佛復現面。女得見之。見已歡喜。面復端政。惡相麤皮。自然化滅。佛復現身。齊腰以上。金色晃昱。令女見之。女見佛身。益增歡喜。因歡喜故。惡相即滅。身體端	其身即變。醜惡都盡。	歡喜轉深。	其女見佛心生歡喜。惡相即滅。身體端	身體端正猶如天女。

<p>嚴。猶如天女。奇妙蓋世。無能及者。佛愍女故。盡現其身。其女諦察。目不曾眴。歡喜踊躍。不能自勝。其女盡身。亦皆端政。相好非凡。世之希有。惡相悉滅。無有遺餘。佛爲說法。即盡諸惡。應時逮得須陀洹道。女已得道。佛便滅去。</p> <p>時彼五人。開戶入內。見婦端政殊特少雙。自相謂言。我怪此人不將來往。其婦端政。乃至如是。觀觀已竟。還閉門戶。持其戶鑰。還彼人所繫著本帶。</p>	<p>嚴。猶如天女。</p> <p>種種法要。心開意解。得須陀洹果。心懷踊悅。與世無比。時佛還去。</p> <p>爾時五人。開門入內。見其端政。殊妙少雙。時彼五人。各相謂言。我怪此人不將婦來。見婦端政。乃至若是。觀觀已竟。牢閉門戶還繫戶鉤。彼人帶頭本處。會同各罷。</p>	<p>貌同諸天。</p> <p>諸長者子。密共議言。王女所以不來會者。必當端正異於常人。或當絕醜。是故不來。我等今當勸其夫。酒令無覺知。解取鑰匙。開門往看。即飲使醉。解取鑰匙。相將共往。開門看之。</p> <p>見此王女端正無雙。便還閉門。詣於本處。爾時其夫。猶故未寤。還以鑰匙。繫著腰下。</p> <p>其夫覺已。尋還向家。開門見婦端正殊異。怪而問之。汝何天神女處我屋宅。婦言。我是君婦賴提。夫怪而問之所以卒爾。</p> <p>婦時答言。我聞君數坐我被罰。心生慚愧。懇惻念佛。尋見如來從地踊出。見已歡喜。身體變好。貧長者子。極大歡喜。尋入</p>	<p>嚴。猶如天女。奇姿蓋世。</p> <p>佛愍女故。爲說妙法。即盡諸惡得須陀洹道。</p> <p>時彼五人。開戶入內。見婦端正。</p> <p>怪不將來。</p> <p>還閉門戶。持鑰繫本帶。</p>	<p>佛便爲說種種法要。得須陀洹果。</p> <p>時佛去後。五人入見。</p> <p>端正少雙。觀看已竟。還閉門戶繫鉤本處。</p> <p>其人還家。見婦端正。欣然問言。汝是何人。婦答夫言。我是汝婦。夫即語言。汝前極醜。何緣端正乃爾。</p> <p>婦便白夫。具說上事。婦復向夫。我欲見王。汝當爲我通白消息。夫往</p>
<p>其人醒悟。會罷至家。入門見婦。端政奇妙。容貌挺特。人中難有。見已欣然。問是何人。女答夫言。我是汝婦。夫問婦言。汝前極醜。今者何緣端政乃爾。其婦具以上事答夫。我緣佛故。受如是身。</p> <p>婦復白夫。我今意欲與王相見。汝當爲我通其意故。夫受其言。即往白王。女郎今者。欲來相</p>	<p>其人還家。入其舍內。見婦端政殊特過人。欣然問言。汝是何人。婦答夫言。我是汝婦。夫即問言。汝前極醜。今者何緣端政乃爾。其婦具以上事答夫。緣佛神德。使我今得如是身體。婦復白夫。今我意欲與王相見。汝當爲我通其意情。夫受其言。即往白王。女郎今者。欲來相</p>	<p>其夫覺已。尋還向家。開門見婦端正殊異。怪而問之。汝何天神女處我屋宅。婦言。我是君婦賴提。夫怪而問之所以卒爾。</p> <p>婦時答言。我聞君數坐我被罰。心生慚愧。懇惻念佛。尋見如來從地踊出。見已歡喜。身體變好。貧長者子。極大歡喜。尋入</p>	<p>其人醒悟。會罷至家。見婦姿容。欣然問曰。是何人。女答夫言。我是汝婦。夫言。汝前極醜。今者端正。其婦具以上事白。</p> <p>其夫</p>	<p>其人還家。見婦端正。欣然問言。汝是何人。婦答夫言。我是汝婦。夫即語言。汝前極醜。何緣端正乃爾。</p> <p>婦便白夫。具說上事。婦復向夫。我欲見王。汝當爲我通白消息。夫往</p>

見。王答女婿。勿道此事。急當牢閉慎勿令出。女夫答王。何以乃爾。女郎今者。蒙佛神恩。已得端政。天女無異。王聞是已。答女婿言。審如是者。速往將來。即時嚴車。迎女入宮。王見女身端政殊特。	歡喜踊躍。	不能自勝。即勅嚴駕。王及夫人女并女夫。共至佛所。禮佛畢訖。却住一面。時波斯匿王。跪白佛言。	不審此女。宿殖何福。乃生豪貴富樂之家。復造何咎。受醜陋形。皮毛羸強。劇如畜生。唯願世尊。當見開示。	佛告大王。夫人處世。端政醜陋。皆由宿行罪福之報。乃往過去久遠世時。	時有大國。名波羅。時彼國中。有大長者。財富無量。	舉家恒共供養一辟支佛。身體羸惡形狀醜陋。憔悴叵看。時彼長者。有一小女。日日見彼辟支佛來。惡心輕慢。可罵毀言。面貌醜陋。身皮羸惡。何其可憎。乃至如是。時辟支佛。數至其家。受其供養。在世經久。欲入涅槃。爲其檀越。
見。王答女夫。莫道此事。急當牢閉慎勿令出。女夫答王。何以乃爾。女郎今者。蒙佛威神。便得端政。天女無異。王聞是已。審如是者。速往將來。即莊嚴車。迎女入宮。王見女身。端政殊特。世無等雙。歡喜無量。	不能自勝。王即告勅。嚴駕車乘。共詣佛所。頂禮佛足。却坐一面。	長跪白佛言。世尊。不審此女。宿種何福。乃生豪貴富樂之家。復造何業。受醜陋形。皮毛羸強。劇於畜生。唯願世尊。當見開示。	爾時世尊。告大王夫人。汝今善聽當爲汝說。乃往過去無量世時。	有一大國。名波羅奈。有一長者。財富無量。不可稱計。時彼長者。合其家內。常恒供養一辟支佛。身體羸惡。形狀醜陋憔悴叵看。時長者家。有一小女。見辟支佛來。惡心輕慢。呵罵毀言。面貌醜陋。身皮羸惡。何其可憎。時辟支佛。數至其家。受其供養。在世經久。欲入涅槃。即便爲其。	白王。王女身體。自然變好。今求見王。王聞歡喜。尋即喚看。見已歡喜。情甚疑怪。將詣佛所。	而白佛言。世尊。此女何緣。生於深宮。身體醜惡。人見驚怪。復以何因。今卒變好。佛告王言。乃往過去。有辟支佛。日日乞食。到一長者門前。時長者女。持食施辟支佛。見辟支佛身體羸惡。而作是言。此人醜惡形如魚皮。髮如馬尾。
已得端正。天女無異。今者蒙佛神恩。王勅將來。迎女入宮。王見歡喜。	王及夫人。及女并女夫。共至佛所禮佛言。	不審此女。宿植何福。乃生豪富。受醜陋形。	佛告王曰。過去世時。國名波羅奈。有大長者。財富無量。	舉家恒共供養一辟支佛。身體羸惡形狀醜陋。時彼長者。有一小女。見彼辟支。惡心輕慢呵罵毀言。面貌醜陋身皮羸惡。何其可憎。此辟支佛。受其供養。欲入涅槃。	白王。女郎今者欲來相見。王答女夫。莫道此事。急當牢閉慎勿令出。女夫白王。女郎今者蒙佛威神。便得端正。天女無異。王聞是已。即遣往迎。見女端正。歡喜無量。	將詣佛所。而白佛言。不審此女宿種何福。乃生豪貴而復醜陋。佛告王言。乃往過去。波羅奈國。有一長者。日常供養一辟支佛。身體醜陋。時長者家有一小女。見辟支佛惡心罵言。面貌醜陋身皮羸惡。何期可憎。時辟支佛。欲入涅槃。便現神力。

賢愚經 第二	作種種變。飛騰虛空。身出水火。東踊西沒。西踊東沒。南踊北沒。北踊南沒。坐臥虛空。種種變現。咸使彼家覩見神足。即從空下。還至其家。長者見已。倍懷歡喜。其女即時悔過自責。唯願尊者。當見原恕。我前惡心。罪釁過厚。幸不在懷。勿令有罪也。時辟支佛聽其懺悔。佛告大王。爾時女者今王女是。由其爾時惡不善心。毀咎賢聖辟支佛故自造口過。於是以來。常受醜形。後見神變。自改悔故。還得端正。英才越群。無能及者。由供養辟支佛故。世世富貴。緣得解脫。如是大王。一切衆生有形之類。應護身口勿妄爲非輕呵於人。爾時王波斯匿。及諸群臣。一切大衆。聞佛所說因緣果報。皆生信敬。自感佛前。以是信心。有得初果至四果者。有發無上平等意者。復有得住不退轉者。咸懷渴仰。敬奉佛教。歡喜遵承。皆共奉行。	現大神變。踊身虛空。身出水火。東踊西沒。南踊北沒。於虛空中。行住坐臥。隨意變現。令長者家一切覩見。還從空下。至長者家。長者歡喜。不能自勝。其女即時悔過自責。唯願慈哀。當見開恕。我前惡心。罪釁過厚。幸不在懷。今聽懺悔。勿令有罪。佛告大王。欲知爾時彼長者女。毀咎辟支佛故。於後生處。常受醜形。後見神變。向其悔過。故今得端政。超世奇特。無有及者。由是供養辟支佛故。在所生處。常生富家。尊榮豪貴。無所乏少。又值於我。脫其憂苦。爾時波斯匿王。及諸臣民。心開意解。有得須陀洹者。斯陀含者阿那含者。阿羅漢者。有發辟支佛心者。有發無上菩提心者。爾時諸比丘。聞佛所說。歡喜奉行。	雜寶藏經卷第二	禮歡喜奉行	爲其檀越作十八變。	作十八變。
撰集百緣經						
經律異相第三四諸國						
法苑珠林卷第七十六						

<p>注好撰 金剛醜女変美艶ニ二十九</p>	<p>今昔物語卷第三 波斯匿王娘金剛醜女語第十四</p>	<p>私聚百因縁集卷第三十四金剛醜女ノ事 釈尊ノ利生見物ノ功德</p>	<p>聖徳太子内因曼荼羅</p>
<p>舍衛国ニ有王ニ。 名波斯匿王ト云フ。后曰末利夫人ト云フ。 其形貌吉十六大国無並ニ。 時夫人生一女子也。 身膚如毒蛇ニ。其臭香不可近ニ。 太髮左卷。是鬼也。 時大王与夫人乳母三人知、余不令知其醜ニ。 王云、君子是金剛醜女也。 甚怖。早令メヨトイフ別居。仍方丈室造、宮北去ニ里ニ、</p>	<p>今昔、天竺ノ舍衛国ニ王有リ、波斯匿王ト云フ。后ヲバ末利夫人ト云フ。 其ノ后、形貌端正美麗ナル事、十六ノ大国ニ並ブ女無シ、一人ノ女子ヲ生メリ。 其ノ女子ノ有様、膚ハ毒蛇ノ如シ。其ノ臭キ香、人不可近付ズ。 太キ髮左ニ卷テ鬼ノ如也。 惣テ形・有様、皆人ニ不似テ、此ニ依テ此女子ノ様ヲ 大王・后・乳母三人許知テ、余ノ人ニ全ク不令知ズ。 大王后ニ云ク、「君ガ子ハ此金剛醜女也。甚ダ可怖畏シ。速ニ別ノ所ニ可居シ」ト宣テ、宮ノ北ニ二里ヲ去テ方丈ノ室ヲ造テ、</p>	<p>舍衛国ニ有王。 名ニク波斯匿王ト云フ。后ヲ曰ニフ末利夫人ト云フ。 其形貌吉ク十六大国ニ無レ並ヒ。 時夫人生ミ一女子ヲタマフナリ。 身膚如レ蛇ノ。其鼻香不レ可ニカラ近付ニ。 太髮左リニ卷タリ。 時大王与夫人乳母三人ノミ知、餘不レ令知ニ其醜ニ。 王云ク。君ガ子ハ金剛醜女也。其怖ヘシ。早ク令メヨ別居ニ。 仍テ方丈ノ室ヲ造テ。宮ヨリ北ニ去テニ里ヲ、</p>	<p>前文省略 ○抑、釈尊ノ出世ハ、在世八〇年、三界ノ特尊、四生ノ主トシテ、一子ノ慈悲ハ平等ニ灌キ誠諦ノ金言ハ八万四千ニ聞ク依テ之、彼ノ五竺ノ君主ヲ始めメトシ、惣シテ朝、民群、類凡テ、二界八万ノ衆悉ク、仏前一所ニ群集シテ、普、皆平等ノ利益ニ預ラスト云事無シ、 此時ニ舍衛国ノ百王ヲ波斯匿王ト名ツク、后キヲハ末利夫人ト申シキ、 其ノ形貌端嚴美麗シテ、十六ノ大国ニモ並ヒ無シ双、 爰コニ夫人一ノ女子ヲ産、生ス、 身ノ膚ヘハ蛇ノ如シ、其ノ香臭クシテ、人ノ辺タリニ近クヘカラス、 髮太クシテ左ニ卷キタリ、 只偏ヘニ鬼神ノ如トシ、 時ニ大王ト夫人、乳母、此ノ三人ハカリ知リテ、余ハ其ノ形ノ醜ナル事ヲ知ラス、 王ノ言ハク、君ガ子ハ、是偏ヘニ金剛醜女也、甚タ怖ロシ、速力ニ別宮ニ居セシメヨトテ、内裏ヨリ北タニ里ヲ去リテ、深山溪谷ニ方丈ニ家ヲ作りテ、乳母ト侍女一人ヲ</p>

具 ^{シテ} 乳母侍女一人込 ^{コメテ} 室 ^ニ （二ハウ）内 ^ニ 、 更不 ^セ 令 ^セ 出入 ^ル 。	時 ^ニ 成 ^ニ 十二三之間 ^ニ 、推 ^{シテ} 末利夫人女 ^{カコトヲ} 美 ^ニ 、從 ^リ 十六大國 ^ニ 各相 ^{ハカラヒテ} 訪 ^{ラフ} 。	則 ^ス 大王召 ^ス 一陰孫 ^ノ 。 位 ^{シテ} 成 ^ニ 大臣 ^ニ 稱 ^ス 賀 ^{ムコト} 令 ^ム 相具 ^セ 。	大臣非 ^ニ 心 ^ニ 逢 ^デ 怖畏 ^ニ 心 ^ニ 、昼 ^ニ 夜 ^ニ 愁 ^ル 吟 ^{コト} 無 ^リ 極 ^ニ 。	然 ^タ 間、大王為 ^ニ 一生大願 ^ノ 修 ^ス 法 ^ヲ 會 ^ヲ 。	第一 ^ノ 女 ^{ムスメ} 形 ^{ミナクキ} 鬼 ^ニ 故 ^ニ 不 ^ラ 來 ^ラ 。	仍 ^{シテ} 諸 ^ノ 大臣奇 ^ミ 疑 ^テ 、 以 ^テ 酒 ^ヲ 令 ^{メテ} 醉 ^{エハ} 賀 ^ノ 大臣 ^ヲ 、取 ^テ 腰 ^ニ 指 ^{サイタル} 匙 ^ヲ 、 以下 ^ニ 官 ^ヲ 令 ^{メニ} 見 ^{ミセ} 善 ^{ヤル} 惡 ^{ヤル} 之 ^ヲ 遣 ^{ハル} 。	時 ^ニ 彼 ^ニ 女 ^ノ 下 ^ノ 官 ^ノ 未 ^ル 到 ^{タラ} 之前 ^ニ 、 室 ^{シテ} 内 ^リ 独 ^ニ 居 ^テ 悲 ^ク 云 ^フ 、 靈 ^ノ 山 ^ノ 釈 ^ノ 迦 ^ノ 、吾 ^カ 形 ^ヲ 成 ^テ 美 ^ニ 令 ^{ヘト} （二九オ）	
乳母 ^{ならびに} 扞 ^ニ 女房一人ヲ具 ^{シテ} 、室ノ 内ニ籠 ^メ 居 ^テ 更ニ不 ^セ 令 ^セ 出入 ^ル ズ。 金剛醜女十二三歳ニ成 ^ル 程ニ、母、 末利夫人ノ端正美麗ナルヲ推 ^{おしはかり} 量 ^{ハカリ} テ、十六ノ大國ノ王、各后ニ為 ^ム ト乞 ^フ 。	然 ^{レド} モ父ノ大王不用 ^ズ シテ、一 人ノ人ヲ以 ^テ 忽 ^ニ 大臣ニ成 ^{シテ} 、 此ヲ賀 ^ト 云 ^テ 、此金剛醜女ニ副 ^ヘ 置 ^キ タリ。 此ノ大臣ノ、心ニ非 ^{あら} ズシテカカル 怖 ^シ キ事ニ會 ^テ 、昼 ^ニ 夜 ^ニ 歎 ^キ 詫 ^{ブル} 事無 ^限 シ。然 ^{レド} モ、大王ノ仰 ^セ 七難 ^{そむきがた} 背 ^ク テ、彼室ニ有 ^リ 。	然 ^ル 間、大王、一生ノ大願トシテ 法 ^ヲ 會 ^ヲ ヲ勲 ^ニ 修 ^シ 給 ^リ 。	金剛醜女第一ノ女子也ト云 ^{ヘド} モ、其ノ形醜 ^キ ガ故 ^ニ 此ノ法 ^ヲ 會 ^ニ 不 ^来 ズ。	諸ノ大臣金剛醜女ノ有 ^様 ヲ不 ^知 ザ ルニ依 ^リ テ、法 ^ヲ 會 ^ニ 不 ^来 ザル事ヲ 奇 ^ビ 疑 ^テ 構 ^{フル} 様、酒ヲ以 ^テ 此ノ 賀 ^ノ 大臣ニ令 ^吞 テ、善 ^ク 醉 ^{ヌル} 時 ニ大臣ノ腰ニ指 ^{タル} 匙ヲ蜜 ^ニ 取 ^テ 、 下 ^ノ 官ノ人ヲ以 ^テ 有 ^様 ヲ見 ^{セム} ガ為 ^ニ 彼ノ室ヘ遣 ^ル 時ニ、 彼ノ金剛醜女、此ノ使ノ未 ^不 至 ^ザ ル前ニ室ノ内ニ独 ^居 テ歎 ^キ 悲 ^テ 云 ^ク 、 「釈迦牟尼仏、願 ^ク ハ我方形ヲ忽	具 ^{ヘテ} 乳母ト侍女一人ヲ入 ^ニ レ室内ニ不 ^三 出入 ^セ 。 時 ^ニ 成 ^ニ ル十二三之間 ^ニ 。 推 ^{ハカラヒテ} 末利夫人ノ女 ^{ムスミ} 美 ^{ナル} ニ。 從 ^ニ 十六大國 ^ニ 各相 ^{ハカラヒテ} 妨 ^ク ク。	即 ^チ 大王。召 ^{シテ} 一族孫ヲ成 ^シ シ大臣ト稱 ^{シテ} 賀 ^ト 令 ^ム 相 ^ハ 。 大臣悲 ^ニ 逢 ^デ 怖畏 ^ニ シテ晝 ^ニ 夜 ^ニ 愁 ^ル 吟 ^{スル} コト無 ^シ レ間。	然 ^ル 間大王為 ^ニ メニ一生ノ大願 一ノ修 ^{ニスル} 法 ^ヲ 會 ^ヲ 。 一 ^ノ 女 ^ノ 形 ^ヲ 醜 ^ク シテ故 ^サ ラ不 ^来 ラ。 仍 ^テ 諸 ^ノ 大臣奇 ^シ ミ疑 ^フ 。 以 ^レ 酒ヲ令 ^メ 醉 ^{エハ} 賀 ^ノ 大臣ヲ 取 ^ニ 腰 ^ニ 指 ^{シタル} 劔ヲ 以 ^ニ 下 ^ノ 官ヲ令 ^メ 見 ^{ミセ} 善 ^{ヤル} 惡 ^{ヤル} 之 ^ヲ 遣 ^{ハル} 時ニ 彼 ^ノ 女 ^ノ 下 ^ノ 官 ^ノ 未 ^ル 到 ^{タラ} 。前 ^ニ 室内 ニ独 ^居 シテ悲 ^{シム} レ之 ^ヲ 。 靈 ^ノ 山 ^ノ 釈 ^ノ 迦 ^ノ 。吾 ^カ 形 ^ヲ 成 ^{シテ} 美人	相具シテ、室内ニ置クト云ヘトモ、更ラニ 近カス、内官女官モ出入セス、 角テ既テ二十三ニモ成リ給ヒシカハ、彼 ノ母后キ末利夫人ノ美ナウ事ヲ推 ^推 リテ、十 六ノ大國ヨリ我々ト相 ^{アイサマタ} 妨ク、 即チ、大王一ノ張孫ヲ召シテ大臣ト成シ、 賀ト稱シテ相具セシムル由ニテ、而カモ彼 レシテ新宮ニ供御ヲ送クル、 臣下悲ミ怖レテ愁吟スルコト窮リ無シ、 然
而 ^ル 間タニ、大王法會を設ケテ、衆僧ヲ供 養スルコト有リ、然而モ我カ一 ^リ 女 ^ノ 金剛女、形チ醜ナル依リテ、此ノ庭ニ 烈 ^{ツラナヘマ} ラサル事ヲ、大王モ后モ御意ノ内 ニ嘆セ給フ、								

<p>逢父^ノ法^ニ会^ニ。 依比^ニ願^ニ一^ニ仏身現^ス庭中^ニ。 女見^テ此相^ヲ生^カ随喜^ヲ故身^ノ上^ニ移^シ得^ツ仏相^ヲ。 居待^ツ吾夫^ヲ之間^ニ、下官竊^ニ来^テ從^ニ物隙^ニ見^ル之^ヲ返告^ス諸臣^ニ云、目眼^モ不^レ及^ス。未^レ曾^レ有^ル是^ノ女人^ノ相^ニ。</p>	<p>ニ美^ニ成^シテ、父^ノ法^ニ会^ニニ令^{アハシ}会^メ給^ト。 時ニ仏、庭^ノ中^ニ現^{ハレ}給^フ。 金剛醜女^ノ仏^ノ相好^ヲ見^テ奉^テ歡喜^ス。此^ノ故^ニ、忽^ニ我^ガ身^ノ上^ニ仏^ノ相^ヲ移^シ得^{タリ}。 「夫^ノ大^ニ臣^ニ此^ノ事^ヲ速^ニ告^ム」ト思^フ間^ニ、此^ノ下^ニ官^ノ人^ノ、蜜^ニ来^テ物^ノ隙^{ヨリ}見^ニ、室^ニ内^ニ一^ニ人^ノ女^ノ有^リ。形貌^{端正ナル}事[、]仏^ノ如^ク也。使^ヒ返^リテ諸^{大臣}ニ告^テ云^ク、「我^ガ心^ニモ不^レ可^ク及^ズ、未^レ曾^レカ^ク端^{正ナル}女^人ノ形^ヲ不^レ見^ズト。 賀^ノ大^ニ臣^ハ悟^メ起^テ室^ニ行^テ見^レバ、見^モ不^レ知^ズ美^{麗ナル}女^人居^{タリ}。近^モ府^寄テ疑^テ云^ク、「我^ガ室^ニ誰^人ノ来^給ヘルゾ」ト。 女^ノ云^ク、「我^ハ汝^ガ妻^{金剛醜女}也^也」。</p>	<p>ト令^メ玉^ヘ逢^ハ父^ノ法^ニ會^ニニ依^ツテ此^願ニ一^ニ佛身現^ス庭中^ニ。女見^ニツク此^相ヲ一^ニ生^ススル歡喜^ヲ故^ニ。身^上ニ移^シ得^{タリ}佛相^ヲ。 居^テ待^ツレ夫^ヲ之間^ニ。下^ニ官^竊カニ来^テ從^ニ物^ノ隙^ニ見^レテ之^ヲ歸^ツテ告^ニ諸^臣ニ云^ク。目^モ相^ヒ不^レ及^ハ。未^レ曾^レ有^ル女^人ノ相^{ナリ}。</p>	<p>法^ニ會^ニハシメ給^ヘト、彼^ノ方^ニ向^テ祈^念ス、 此^ノ願^念ニ応^シテ、新^宮ノ庭中^ニ仏身^ヲ顯現^ス、此^ノ相^ヲ見^テ奉^リテ、歡喜^ヲ生^ス、亦復^タ小^身ノ聖^容、閻^浮壇^金、救^世觀^音ノ像^ヲ与^ヘテ給^フ、此^ノ時^キ、忽^チ醜^{ナル}身^ノ上^ヘニ仏相^ヲ写^シ得^テ、端^嚴殊^特ニ成^リ座^シテ臣^下ヲ待^ツ、爰^ニ張^孫来^リテ物^ノ間^{ヨリ}是^ヲ見^テ、驚^キ歸^リテ諸^臣ニ告^ケテ云^{ハク}、未^レ曾^ニモ加^様ノ女^人ノ相^ヲ見^ス、目^ノ性^モ及^ハサル御^形也^ト、</p>
<p>時^ニ賀^ノ大^ニ臣^ハ差^キ起^リ。 臣^起至^室退^云不^レ近^ツ。 疑^云、吾^室何^人来^給。 女^云、吾^汝妻^也。 又^云、更^ニ不^レ余^一。 又^云、早^来。吾^出法^ニ會^ニ。 即^蒙釈^迦引^接也^也。 臣^走返^告大^王。 則^王后^宮々^振玉^挙行^幸迎^テ娘^ヲ。 将^来善^庭會^ニ（二九ウ）了^ハ、</p>	<p>夫^ノ云^ク、「更^ニ非^ジ」ト。 女^ノ云^ク、「速^ニ我^レ行^テ父^ノ法^ニ會^ニハム」。 我[、]釈^迦ノ引^接ヲ蒙^{レル}故^ニ現^身ニ替^{タリ}。 大^臣此^ノ事^聞テ、走^リテ大^王ニ此^ノ由^ヲ申^ス。 大^王・后[、]宮^ニ聞^キ驚^テ、忽^興ヲ振^テ彼^ノ室^ニ行^幸シテ見^給フニ、実^ニ世^ニ不^レ似^ズ端^正美^麗ナル事[、]</p>	<p>時^ニ賀^ノ大^ニ臣^ハ起^テ至^リテ室^ニ退^キ立^テ不^レ近^付。 疑^テ云^ク。吾^家ニ何^人来^リ給^フ。 女^云ク。吾^レ汝^ガ妻^也。 又^更ニ不^レ爾^一。 又^云ク早^ク王^来レ吾^レ出^ニテ法^ニ會^ニ。 即^チ蒙^ニムル釈^迦ノ引^接ヲ也^也。 臣^走リ返^ツテ告^ニ大^王ニ。 即^チ后^宮振^ニ玉^舉ヲ。行^幸シテ迎^フレ娘^ヲ。</p>	<p>猶^ホ臣^下奇^ミテ重^ネテ行^キ、近^カスシテ問^フ、 抑[、]我^ガ君^ノ宮^室ニハ、何^人ノ来^リ給^{ヘル}ソト、 時^ニ女^ノ云^{ハク}、我^ハ是^レ金^剛女^也、 早^ク此^ニ近^キ来^レ、父^ノ法^ニ會^ニハムト、 此^ノ事^ヲ走^リ歸^リテ、大^王ニ奏^シ奉^ル、 時^キニ后^宮大^臣諸^卿以下^ノ雲^客、大^王ヲ始^メ奉^リ、玉^ノ御^轡ヲ振^リ、行^幸幸^在シテ、姫^宮ヲ迎^ヘ奉^リテ、法^ニ會^ノ庭^ニ連^ラナリ給^ル</p>

<p>仏所^ニ将行^テ一々^ニ問^ヲ之^一。</p>	<p>仏言^ク、此女^ハ昔^カ汝家^ノ御炊^{ミカシキ}也。 然汝^ニ殿^ニ一聖人^ヲ来^テ受^シ施^セ、 汝有^テ普願^ニ、置^テ一俵^ヘノ米^ヲ、 至^リ于^ニ牧童^ニ令^テ搏^ミ令^キ供^フ養僧^ニ。</p>	<p>其中^ニ此女^ハ乍^ハ供養僧^ニ、 後^ニウシロ^ニ謗形^ノ醜^{コト}。 後時^ニ聖人^ノ王^ノ前^ニ来^テ、現^シ神反^ヲ上^ニ虚空^ニ入^ル。 彼女^ハ見^テ之^ヲ泣^キ々^ニ懺^ム悔^ス謗罪^ヲ。</p>	<p>是以^{ヨリ}供僧^ヲ故生^ル大王^ト子^一。 生^カ謗^ヲ故得^ニ鬼身^ヲ。</p>	<p>後時^ニ至^カ懺^ム悔^ス故^ニ、 蒙^テ吾教化^ヲ永入^ル仏道^ニ。 故僧^ヲ不可^レ謗^ス。復造^ト罪^ヲ、能^シ々^ニ生怖^{シテ}畏^ル心^ヲ可^レ懺悔^ス。々々^ニ (三〇オ)</p>	<p>譬^ハム方^ニ無^シ。即^チ娘^ヲ迎^テ宮^ニ来^リ又願^ヒノ如^ク法会^ニ会^ヌレバ、大王、娘^ヲ具^シテ仏^ノ御許^ニ将^テ参^リ此事^ヲ一^ニ問^ニ奉^ル。</p>	<p>仏ノ宣^{ハク}、善^ク、此ノ女人^ハ昔^カ汝家^ノ御炊^{ミカシキ}也。汝ガ家^ニ一^ノ聖人^ヲ来^テ施^ヲ受^ク。汝^ハ善願^有テ、一^ニ表^ノ米^ヲ置^テ、家^ノ諸^ノ上下^ノ人^ニ此^ノ米^ヲ令^テ搏^ミ僧^ヲ令^キ供養^ス。</p>	<p>其ノ中^ニ此ノ女、供養^シナガラ僧^ノ形^ノ醜^キ事^ヲ謗^リキ。 僧^ノ即^チ王^ノ前^ニ来^テ神変^ヲ現^ジテ、虚空^ニ昇^テ涅槃^ニ入^リニキ。 彼ノ女^ハ此^ヲ見^テ、哭^テ謗^リシ罪^ヲ悔^ヒ悲^シビテ</p>	<p>僧^ヲ供養^セシ故^ニ、今大王ノ娘ト生^{タリ}ト云^ドモ、僧^ヲ謗^ゼシ罪^ニ依^テ鬼^ノ形^ヲ得^{タリ}。 然レドモ懺悔^ヲ至^シ故^ニ、今日我ガ教化^ヲ蒙^テ鬼^ノ形^ヲ改^テ端正^ノ姿^ト成^テ、永^ク仏道^ニ入^ル也。</p>	<p>此故^ニ僧^ヲ謗^ズル事^無カレ。又譬^ヒ罪^ヲ造^ス事^有トモ、心^ヲ至^シテ可^レ懺悔^{ベシ}。 懺悔^ハ第一^ノ善根^ノ道^也」ト説^ト給^{タマ}ヒケリトナム語^リ伝^ヘタルトヤ。</p>	<p>将^テ来^ニテ善^ノ庭^ノ會^ニ乃^チ佛所^ニ将^キ行^キ一々^ニ問^レ之^ヲ。</p>	<p>佛言^{ハク}。此女^ハ昔^カ汝家^ノ御炊^{ミカシキ}ナリ。然ルニ殿^ニ一^ノ聖人^ヲ来^リテ受^クレ施^ヲ。汝有^ニテ普願^ニ置^ニク一俵^ノ米^ヲ。至^ニル牛牧童^ニマテ令^メテ傳^ヘ令^キムレ供^フ養^ス僧^ニ。</p>	<p>後^ニ二謗^ル形^ノ醜^キヲ。彼聖人。 王^ノ前^ニ来^テ現^シ神变^ヲ。上^ニリテ虚空^ニ入^ルニル涅槃^ニ。彼女^ハ見^テ之^ヲ泣^キ々^ニ懺^ム悔^ス謗罪^ヲ。</p>	<p>是^レ供^フ僧^ヲスルヲ以^テノ故^ニ生^ル大王ノ子ト。生^{スル}謗^ヲ故^ニ得^ニテ鬼身^ニヲ</p>	<p>後時^ニ至^ス懺悔^ヲ故^ニ蒙^ニリテ吾教化^ヲ永^ク入^ルニル佛道^ニ。 故^ニ僧^ヲ不^レ可^レ謗^ス。造^ラハレ罪^ヲ能^ク々々怖畏^心ヲ以^テ可^レ懺悔^ス。懺悔^ハ第一^ノ菩薩道^也云々。</p>	<p>フ、父ノ大王、母后^キノ叡慮^ノ内^ニ、譬^ハフ取^ルニ物^ノ無^シ、如^ク此^ノ御形^チノ醜^ニ御ハシケル事^ハ、因^ニ位^ニ付^テ子細^{アリ}、応^知、 ○抑^モ、彼ノ金剛女、釈迦^ノ御慈悲^ニ預^カリ、醜陋^{頑愚}ノ身^ノ上^ニ、仏相^ヲ写^シ得^給シ上^ヘハ、勝鬘^女トソ申^シケル、――後略――</p>
--	---	---	--	--	--	--	---	--	--	---	---	--	--	--	---

広本『原中最秘抄』	略本『原中最秘抄』	『長谷寺験記』
<p>一 仏ノ御中ニハツセナン日ノ本ニアラタナルシルシアラハシ給モロコシニモ聞エアナリ</p> <p>長谷寺和州高市郡ニ建立。元正天皇御時養老七年道明法師造之。同供養之事聖武天皇御時天平八年導師行基菩薩^{水鏡見之}。長谷寺流記云。唐僖宗皇帝之時千人ノ后ヲモチ給ヘリ。第四ノ后ヲ馬頭夫人ト云ヘリ文宗皇帝孫玄成太子娘</p> <p>顔長シテ面馬ニ似タリ。仍馬頭ト名ツク。然トモ心ニ情フカクシテ</p> <p>帝ノ寵愛^{子タミ}ニ心ナシ。^{コウヒ}ソレヲ猜テ自余ノ后妃評定シテ云。馬頭夫人ハ夜ナク御門ニマイリ給ヘルハカリニテ、面貌ヲアサヤカニ見給ハサルニヨリテ御氣色無双也。</p> <p>白昼ニ彼貌ヲ觀覽アラハ、定テ疎ム御心出キナント云合テ</p> <p>揚州ノ錦羅園^{キンラエン}ト云所ニ、花ノ盛ヲ得テ、イマ十五日アリテ彼所ヘ花見ノ行幸行啓アルヘシト定ル。</p> <p>然間后達面々ニイテタチケハヒ給ヒケリ。</p> <p>此ノ夫人ハ吾面ノ人ニ似サル事ヲ歎、医師ヲメシテノ給様。我顔陋事、療ナヲシテエサセタラハ、千両ノ金ヲアタヘント云ヘリ。</p> <p>医師申テ曰。御貌ハ生得也。治スルニ不可叶ト申。其時国ノ中ニ穀城山ト云所ニ千歳ヲ経タル仙人アリ。</p>	<p>一 仏の御中にはつせなん日の本にあらたなるしるしあらはし給。もろこしにもきこえあなり</p> <p>長谷寺流記云。唐僖宗皇帝千人の後をもち給。其中馬頭夫人と云。</p> <p>顔ながくして馬の面ににたり。然心に情ふかくして</p> <p>帝の寵愛二心なし。</p> <p>自余の夫人これをそねみて</p> <p>此面を分明に見たまはぬによりて寵愛あり。</p> <p>白昼にかたちをみせたてまつらんと相儀して</p> <p>揚州の錦羅園に 後十五日ありて花見の行幸を申すゝむ。</p> <p>此馬夫人我面の人に似さる事を歎て</p> <p>穀城山^{コウ}に居たる仙人をめしてこれ</p>	<p>第六陽成天皇御宇ニ大唐国ニ王有キ僖宗皇帝ト云。千人ノ后有リ。其第四ノ后ヲハ馬頭夫人ト名ク。是文宗皇帝孫玄成太子ノ御娘也。宿習ニヤ有ケム。</p> <p>顔長クシテ鼻ノ姿頗ル馬ニ似リ。ケレトモ心ニ情ケ深クシテ由シ有ル様ニ云ニ付テ優ニ思ヒケルニヤ。</p> <p>帝王貳心無ク時メカセ玉テ、サル御カタワ有トハ知食ナカラ、カタヘノ后達ヨリ猶マチカクシテナサレケルヲ数多ノ御方々一ツ心ニ嫌ミアヒ玉テ</p> <p>何ニモコノ后ノカタワヲ帝ニ見セ奉テ御中ヲサケ申サムト巧ミケル程ニ、一人ノ后御計事トシテ帝王ヲ始テ千人ノ后集リテ七日七夜花見ノ宴ヲ始テ昼ル彼ノ夫人ノ顔ヲ見セ奉ムト云合セケレハ九百余人ノ后皆一同シテ此由ヲ奏聞シケリ。御門聞食シ入テ今十五日ヲ過テ花盛ヲ待得テ</p> <p>揚州ノ錦羅園ト云先王遊戲ノ所ヲ開テ道ヲハライ園ヲ飾リテ此会有ヘシト宣旨ヲ下サレハ后達面々ニ悦テ我モクト出立ケリ。民モ見物ナント云テ一國皆動ケリ。</p> <p>此夫人何ンシテカ我形ヲ頭ハサシド思テ、サレハトテ出サラムモ其云カイナシ。身ノ一期ヲ愛ニシテ失イハテム事コソト悲ミテ思ノ余^{アマリ}ニ医師ヲ召テ云合セケレハ医師申ケルハ御生レ付ノ御カタハハ葉ノ及フヘキニ非ス。此国本ノ中ニ穀城山ト云山ニ千歳ヲ経タル発</p>

<p>行果薰修シテ通^{コト}力自在ナリ。 此仙人ヲ召^{コト}テ綺由ヲノ給ニ、</p>	<p>我昔宝志和尚ト云シ時他心智ヲ得飛行自在ナリキ。其時世界ヲカケリ見シニ 大日本国長谷寺觀音ハ極位ノ大薩埵也。次ニ凡^{ホシ}衆^{シユ}ニ同シテ利生ヲホトコシ給。彼国ハ是ヨリ東方ナリ。タトヒ行程ヲ隔ツト云トモ、彼仏ヲ向奉祈請マシマサハ定感応タチ所ニ侍ナント申ニ、仍骨髓ヲクタク礼拝ヲイタシ数反名ヲ唱テイノリ給ニ、</p>	<p>を嘆くに仙人云。</p>	<p>日本国長谷寺觀音極位の大薩埵也。彼国ハ是ヨリ東方也。彼方に向て祈請しましまさは感応あるへしと申す。仍礼拝をいたし名号をとなへていのり給に、</p>	<p>七日ヲフル曉夢ニウツ、トモナク東方ヨリアヤシキ老僧香ノ袈裟ヲ着タルカ紫雲ニ乗テ手ニ水瓶ヲ持来近付テ顔ニソ、クト思ニ、心歎喜シテ已ニ利生ニ預ヌト思フ。</p>	<p>七ケ日にあたる曉異僧来て、水瓶を夫人の面にそゝくと思に心歎喜して</p>	<p>則鏡ヲ取テ形ヲ見レハ本ノ容兒ニアラス。端嚴美麗ニナレリ。然モ身カウハシク相近者ノ奇異ノ思ヲナス。其後三日ヲ経テ、后妃侍女ノ中ニ交ハルニ上下^{コソリ}挙目ヲ瀕^{ソバメ}随喜セスト云者ナシ。公弥^{キミ}寵愛日来ニコエ芳物異ニ于他^ニ</p>	<p>鏡を取てみれば端嚴美麗になれり。其後后妃の中に交に上下目を挙さすと云事なし。</p>	<p>是ヒトヘニ泊瀨觀音ノ利生ナリト悦給^{シテ}テ大唐国乾符三年丙申七月十八日諸侍女眷属ヲ率シテ日域チカキ所ナリトテ明州ノ津ニ出テ拾^シ種ノ宝物ヲ披^ヒ送ニ本朝^ニ。仏具錫杖如意鐺鉢金剛鈴玉幡牛・法螺唐皮孔雀尾已上行阿勘文</p>	<p>是偏に泊瀨觀音の利生也と悦て大唐国乾符三年丙申七月十八日諸侍女をひきいて明州の津に出て宝物十種を本朝にをくられけり。是にの事を此物語に此いふにや</p>	<p>明有道ノ仙人アリ。其ノ名ヲ素神仙人ト云。行業年積リ神通ヲ具シ威験ヲ備テ人ノ願ヲ滿難事ヲ成スル者有リト申ケレハ、則密ニ召テ仰ラレケリ。仙人モ医師ノ如ク是先世ノ宿習惡業所作ニテ仙術ノ及フヘキニ非ス。只ハ仏神ニ祈ヘルト申ス。サテハ何レノ仏神也。殊ニ威神モ勝レカハル大事ヲハ叶玉ヘキト御尋有ケル程ニ仙人答テ云。我当初宝志和尚トシテ通力ヲ以三千世界ヲ見シ中ニ 日本国長谷寺ノ觀音極位ノ奇形ヲ凡衆ニ同ノ諸仏冥道ノ教ヲ受功德成就ノ地ヲ開テ広大利他ノ大願ヲ發シ普門示現ノ尊容ヲ顯ス。其上山内ハ皆密嚴清淨ノ法地ニシテ応用三千世界滿テリ。眷属ハ悉大悲覆護聖人ニシテ化儀ヲ十方国・施ス。是累劫ノ間大聖化ヲ垂ル砌也。其ノ中ニ觀音金剛玉石ニ座シテ広ク衆生ヲ度シ玉フ然レハ驗德世ニ勝レ玉ヘリト云。則教ノ如ク道場ヲ構ヘ誠ヲ至テ祈請スルニ。七日七夜ヲフル曉夢トモナク幻トモナキニ、東方ヨリ奇ケナル貴僧香ノ衣モ着シ紫雲ニ乗シメ手ニ香水瓶ヲ持来テ顔ニソ、クト忽ニ心歎喜シテ大聖ノ利生ニ預リヌト思テ 鏡ヲ以テ顔ヲ見ハ端嚴ナラヒナクコビ面ニミチリ。一期其ノ顏薰^{フク}所匂ヲ写ス。 三ケ日ヲ経テ件ノ会ニ吏ルニ上下コツテ此ヲ以テナス。惡ミ嫉ミシ九百余人ノ后モワリナキ有様ヲ見^ミ返^ヘテ親子ノ貶ヲ成ス。マシテ帝王ノ鍾愛ハ弥^{フタ}ヨ貳^ニナシ。是当寺觀音ノ利生也ト悦テ 大唐国乾符三年丙申年六月十八日ニ諸眷属ソ卒シ明州ノ津ニ出テ諸宝物ヲ当寺ニ送ラル其宝物者 仏具皆具仏器鳴磬香炉錫杖一枝鐺鉢二具金剛鈴一懸玉幡流牛玉一法螺長三尺也唐皮二枚孔雀尾十莖如意此等ノ十種并ニ金ノ札ニ、願文有リ其言云</p>
--	--	-----------------	--	---	---	--	---	--	---	--

III 馬頭夫人說話比較表

初出一覧

I 序論 新稿

II 本論

第一章 源氏物語における末摘花の造型 — 金剛醜女説話の受容について —

『和漢比較文学』第五十二号、平成二十六年（二〇一四）二月一日

第二章 源氏物語における玉鬘の造型について — 『原中最秘抄』が示す長谷観音の靈験譚の関わり —

『女子大国文』第百六十三号、平成三十年（二〇一八）九月三十日

第三章 源氏物語における歌語「玉かづら」の意味 — 末摘花と玉鬘の造型を手がかりとして —

新稿

第四章 源氏物語の指食いの女の造型について — 「上陽白髮人」と金剛醜女説話の関わり —

『笹川祥生先生喜寿記念論文集あしかぜ』笹川祥生先生喜寿祝賀有志会、平成三十年（二〇一八）

結 章 敦煌変文と源氏物語の人物造型 — 金剛醜女説話受容の方法 —

国際学術研究会記念論集『北方絲綢之路文化遺産与二十一世紀』中国清華大学編、掲載予定

III 付 編

第一章 川口松太郎『愛染かつら』における「長恨歌」の受容について

『白居易研究年報』第十六号、勉誠出版、平成二十七年（二〇一五）十二月二十五日